第二獨步集

第二獨歩集

國木田獨歩著

第三十六版

第二

獨步集

目次

竹の木戸……一
鶯死……四二
疲労……六二
節操……七一
二老人……八六
泣き笑ひ……一〇六
郷の友へ、B生より　一一八
入郷記……一二六
肱の侮辱……一四一
湯ヶ原ゆき……一四九
少年の悲哀……一七八
春の鳥……一九六
小春……二一九
遺言……二四九
初孫……二五七
初戀……二六四
糸くづ……二七一

第二 獨歩集

國木田獨歩

竹の木戸

【上】

大庭眞藏といふ會社員は東京郊外に住んで京橋區邊の事務所に通つて居たが、電車の停留所まで半里以上もあるのを、毎朝缺かさずテク〳〵歩いて運動には恰度可いと言つて居た。溫厚しい性質だから會社でも受が可かつた。

家族は六十七八になる極く丈夫な老母、二十九になる細君、細君

の妹のお清、七歳になる娘の禮ちやん、之れに五六年前から居るお徳といふ女中、以上五人に主人の眞藏を加へて都合六人であつた。

細君は病身であるから餘り家事に關係しない、臺所元の事は重にお清とお徳が行つて居て、それを小まめな老母が手傳て居たのである。別けても女中のお徳は年こそ未だ二十三であるが私はお宅に一生奉公をしますといふ意氣込で權力が仲々強い、老母すら時々此女中の言ふことを聞かなければならぬ事もあつた。我儘過るとお清から苦情が出る場合もあつたが、何しろお徳はお家大事と一生懸命なのだから結極はお徳の勝利に歸するのであつた。

生垣一つ隔てゝ物置同然の小屋があつた。それに植木屋夫婦が暮して居る。亭主が二十七八で、女房はお徳と同年輩位、そして此隣交際の女性二人は互に負けず劣らず喋舌り合つて居た。

初め植木屋夫婦が引越して來た時、井戸がないので何卒か水を汲まして吳れと大庭家に依頼みに來た。大庭の家では其は道理なことだと承諾してやつた。それから彼是二月ばかり經つと、今度は生垣を三尺ばかり開放さして吳れろ、さうすれば一々御門へ迂廻らんでも濟むからと頼みに來た。これには大庭家でも大分苦情があつた、殊にお徳は盗棒の入口を造へるやうなものだと主張した。が、しかし主人眞藏の平常の優しい心から遂に之を許すことになつた。其方で木戸を丈夫に造り、開閉を嚴重にするといふ條件であつたが、植木屋は其處らの籔から青竹を切つて來て、これに杉の葉など交ぜ加へて無細工な木戸を造くつて了つた。出來上つたのを見てお徳は『これが木戸だらうか、掛金は何處に在るの。こんな木戸なんか有るも無いも同じことだ』と大聲で言つた。植木屋の女房のお源は、

これを聞きつけ

『それで澤山だ、どうせ私共の力で大工さんの作るやうな立派な木戸が出來るものか。』

と井戸邊で釜の底を洗ひながら言つた。

『それぢやァ大工さんを賴めば可い。』とお德はお源の言葉が癪に觸り、植木屋の貧乏なことを知りながら言つた。

『賴まれる位なら賴むサ。』とお源は輕く言つた。

『賴むと來るよ』とお德は猶一つ皮肉を言つた。

お源は負けぬ氣性だから、これにはむつとしたが、大庭家に於けるお德の勢力を知つて居るから、逆らつては損と虫を壓へて

『まアそれで勘辨してお吳れよ。出入りするものは重に私ばかりだから私さへ開閉に氣を附けりやァ大丈夫だよ。どうせ本式の盜賊なら垣根だつて御門だつて越すから木戸なんか何にもなりやァ仕ないからね。』と半分折れて出たのでお德は

『さう言へばさうさ。だからお前さんさへ開開を嚴重に仕てお吳れなら先ァ安心だが、お前さんも知つてるだらう此里はコツ〳〵泥棒や屑屋の惡い奴が彷徨するから油斷も間際もなりや仕ない。そら近頃出來たパン屋の隣に河井樣て軍人さんがあるだらう。彼家ぢやァ二三日前に買立の銅の大きな金盥をちよろりと盜られたさうだからねえ。』

『まア如何して』とお源は水を汲む手を一寸と休めて振り向いた。

『井戸邊に出て居たのを、女中が屋後に干物に往つたぱつちりの間に盜られたのだとサ。矢張木戸が少しばかし開いて居たのだとサ。』

『まア、眞實に油斷がならないね。大丈夫私は氣を附けるが、お德

さんも盗られさうなものは少時でも戸外に放棄つて置かんやうにな
さいよ』
『私はまア其様ことは仕ない積りだが、それでも、ツイ忘れること
が有るからね、お前さんも屑屋なんかに氣を附けてお呉れよ。木戸
から入るにや是非お前さん宅の前を通るのだからね。』
『えゝ氣を附けるともね。盗られる日にや薪一本だつて炭一片だつ
て馬鹿々々しいからね。』
『さうだとも。炭一片とお言ひだけれど、どうだらう此頃の炭の高
値いことは。一俵八十五錢の佐倉が彼だよ。』とお徳は井戸から臺所
口へ續く軒下に並べてある炭俵の一を指して、『幾干入つてるものか
ね。ほんとに一片何錢に當くだらう。まるでお錢を涼爐で燃して居
るやうなものサ。土竈だつて堅炭だつて悉な去年の倍と言つても可

い位だからね、』とお徳は嘆息まじりに『眞實にやりきれや仕ない』
『それに御宅は御人數も多いんだから入用ことも入用サね。私のと
こなんか二人限だから幾干も入用ア仕ない。それでも三錢五錢と計
量炭を毎日のやうに買うんだからね、全くやりきれや仕ない。』
『全く骨だね』とお徳は優しく言つた。
以上炭の噂まで來ると二人は最初の木戸の事は最早口に出さない
で何時しか元のお徳お源に立還りぺちやくちやと仲善く喋舌り合つ
て居たところは埒も無い。
十一月の末だから日は短い盛で、主人眞藏が會社から歸つたのは
最早暮れがかりであつた。木戸が出來たと聞いて洋服のまゝ下駄を
突掛け勝手元の庭へ廻はり、暫時は木戸を見てたゞ微笑して居たが
お徳が傍から

『旦那様、大變な木戸で御座いませう。』と言つたので
『これは植木屋さんが作らへたのか。』
『さうで御座います。』
『隨分妙な木戸だが、併し植木屋さんにしちやア能く出來てる』と手を掛けて揺振つて見て
『案外丈夫さうだ。まアこれでも可い、無いよりか增だらう。其内大工を頼んで本當に作らすことに仕やう。』と言つて『竹で作へても木戸は木戸だ、ハ、ハ、ハ、』と笑ひながら屋内へ入つた。
お源はこれを自分の宅で聞いて居て、くす〳〵と獨で笑ひながら『眞實に能く物の解る旦那だよ。第一彼樣心持の優い人つたらめつたに有りや仕ない。彼家ぢや奥樣も好い方だし御隱居樣も小まめに、ちよこまかなさるが人柄は極く好い方だし、お清樣は出戻りだけに

何處か執拗れてるが、然し氣質は優しい方だし』と思ひつゞけて來てハタとお德の今日晝間の皮肉を回想して『水の世話にさへならなきや如彼奴に口なんか言かしや仕ないんだけど、房州の田舍者奴が可愛がつて頂だきや可い氣になりやアがつて如何だらう彼の圖々しい案梅は』とお德の先刻の言葉を思ひ出し、『大變な木戸でせうだつて、あれで難癖を附ける積りが合憎と旦那がお取上に相成らんから可い氣味だ。愚態ア見やアがれだ』と又つと氣を變へて『だけど感心と言へば感心だよ。容色も惡くはなし年だつて私と同じなら未だいくらだつて嫁にいかれるのに、彼樣やつて一生懸命に奉公しているんだからね、全く普通の女にや眞似が出來ないよ。それに恐しい正直者だから大庭樣でも彼女に任かして置きや間違はないサ……』
こんな事を思ひながらお源は洋燈を點火て、火鉢に炭を注がうと

して炭が一片もないのに氣が着き、舌鼓をして古ぼけた藥鑵に手を觸へて見たが湯は冷めて居ないので安心して、お湯の熱い中に早く歸つて來れば可い『然し今日若か前借して來て呉れないと今夜も明日も火なしだ。火ぐらゐ木葉を拾つて來ても間に合ふが、明日食ふお米が有りや仕ない』と今度は舌鼓の代に力のない嘆息を洩した。頭髪を乱して、血の色のない顔をして、薄暗い洋燈の陰にしよんぼり坐つて居る此時のお源の姿は隨分憐な樣であつた。

其所へのつそり歸つて來たのが亭主の磯吉である。お源は單直前借の金のことを訊いた。磯は默つて腹掛から財布を出してお源に渡した。お源は中を査めて

『たつた二圓』

『あゝ』

『二圓ばかし仕方が無いじやアないか。どうせ前借するんだもの五圓も借りて來れば可いのに。』

『だつて貸さなきや仕方がない。』

『そりや左樣だけど能く賴めば親方だつて五圓位貸して呉れさうなものだ。これを御覽、』とお源は空虛の炭籠を見せて『炭だつてこれだらう。今夜お米を買つたら幾干も殘りや仕ない。……』

磯は默つて煙草をふかして居たが、煙管をポンと強く打いて、膳を引寄せ手盛で飯を食ひ初めた。たゞ白湯を打かけてザク〳〵流し込むのだが、それが如何にも美味さうであつた。

お源は亭主の此所爲に氣を呑れて默つて見て居たが山盛五六杯食つて、未だ止めさうもないので呆れもし、可笑くもなり

『お前さん其樣にお腹が空いたの。』

磯は更に一椀盛けながら『俺は今日半食を食はないのだ。』

『如何して。』

『今日彼時から往つたら親方が厭な顔をして此多忙しい中を何で遲く來ると小言を言つたから、實はこれ〳〵だつて木戸の一件を話すと、そんな事は手前の勝手だつて言やアがる、糞忌々敷いから其からグン〳〵仕事に掛つて二時過ぎになるとお茶飯が出たが、俺は見向も仕ないんだ。お女中が來て今日はお美味い海苔卷だから早やく來て食べろと言つたが到當俺は往かないで仕事を仕續けてやつたのだ。そんなこんなで前借の事を親方に言ひ出すのは全く厭だつたけど、言はないじや居られんから歸りがけに五圓貸して吳れろと言ふと、へん仕事は怠けて前借か、俺も手前の圖圖しいのには敵はんよそら是で可からうつて二圓出して與こしたのだ。仕方が無いじやア

ないか。』と磯は腹の空いた譯と二圓外前借が出來なかつた理由を一遍に話して了つた。そして話し了つたころ漸と箸を置いた。

全體磯吉は無口の男で又た口の利きやうも下手だが如何かすると啖火交りで今のやうに威勢の可い物の言ひ振をすることもある、お源にはこれが頗る嬉しかつたのである。然しお源には連添てから足掛三年にもなるが未だ磯吉は怠惰者だか働人だか判斷が着かんのである。東京女の氣まぐれ者には其で濟でゆくので、三日も四日も仕事を休む、どうかすると十日も休む、けれどサアとなれば人三倍も働くのが宅の磯樣だと心得て居る、だからサアとなれば困りや仕ないと信じて居る。然し何處まで行つたら其「サア」だか其樣ことはお源も考へたことはない。又たお源は磯さんはイザとなれば隨分人の出來ない思切た大膽なことをする男だと賴母がつて居る。けれど

左様ばかし思へんこともある。其實案外意氣地のない男かしらと思ふ場合もあるが、それは一文なしになつて困り拔た時などで、さう思ふと情なくなるから成るべく其は自分で打消して居たのである。

實際磯吉は所謂る（解らん男）で、大庭の女連は何となく薄氣味惡く思つて居た。だからお德までが磯には憚る風がある。これがお源には言ふに言はれない得意なので、お德が此風を見せた時、お清が磯に丁寧な言葉を使つた時など嬉さが込上げて來るのであつた。

それで結極のべつ貧乏の仕飽をして、働き盛りでありながら世帶らしい世帶も持たず、何時も物置か古倉の隅のやうな所ばかりに住んで居る、從つてお源も何時しか植木屋の女房連から解らん女だ、つまり馬鹿だとせられて居たのだ。

磯吉の食事が濟むとお源は笊を持て駈出して出たが、やがて量炭

を買て來て、火を起しながら今日お德と木戸のことで言ひあつたこと、旦那が木戸を見て言つた言葉などべら〳〵喋舌て聞かしたが、磯は「さうか」とも言はなかつた。

其うち磯が眠さうに大欠呻をしたのでお源は垢染た煎餅布團を一枚敷いて一枚被けて二人一緒に一個身體のやうになつて首を縮めて寢て了つた。壁の隙間や床下から寒い夜風が吹きこむので二人は手足を縮められるだけ縮めて居るが、それでも磯の背部は半分外に露出て居た。

【中】

十二月に入ると急に寒氣が增して霜柱は立つ、氷は張る、東京の郊外は突然に冬の特色を發揮して、流行の郊外生活にかぶれて初

て郊外に住んだ連中を喫驚さした。然し大庭眞藏は慣れたもので、長靴を穿いて厚い外套を着て平氣で通勤して居たが、最初の日曜日は空青々と晴れ、日が煌々と輝やいて、そよ吹く風もなく、小春日和が又立戻つたやうなので、眞藏とお清は留守居番、老母と細君は禮ちやんとお德を連て下町に買物に出掛けた。

郊外から下町へ出るのは東京へ行くと稱して出慣れぬ女連は外出の支度に一騷するのである。それで老母を初め細君娘、お德までの着變やら何かに一しきり騷しかつたのが、出て去つた後は一時に森となつて家内は人氣が絶たやうになつた。

眞藏は銘仙の褞袍の上へ兵古帶を卷きつけたまゝ日射の可い自分の書齋に寢轉んで新聞を讀んで居たが、お午前になると退屈になり、書齋を出て緣邊をぶら〳〵歩いて居ると『兄樣』と障子越しにお清

が聲をかけた。

『何です。』

『おホゝゝゝ「何です」だつて。お午食は何にも有りませんよ。』

『かしこ參りました。』

『おホゝゝゝ「かしこ參りました」だつて。眞實に何にもないんですよ。』

其處で眞藏はお清の居る部屋の障子を開けると、内ではお清がせつせと針仕事をして居る。

『大變勉强だね。』

『禮ちやんの被布ですよ、良い柄でせう。』

眞藏はそれには應へず、其處邊を見廻はして居たが。

『最少し日射の好い部屋で縫つたら可ささうなものだな。そして火

鉢もないぢやないか。』

『未だ手が凍結るほどでもありませんよ。それに此節は御儉約といふことに決定たのですから。』

『何の御儉約だらう。』

『炭です。』

『炭は成程高價なつたに違ないが宅で急に其を節約するほどのことはなからう。』

眞藏は衣食臺所元のことなど一切關係しないから何も知らないのである。

『如何して兄樣、十一月でさへ一月の炭の代がお米の代よりか餘程上なんですもの。これから十二、一、二と先づ三月が炭の要る盛ですから儉約出來るだけ仕ないと大變ですよ。お德が朝から晩まで炭

が要る炭が高價いて泣言ばかり言ふのも無理はありませんわ。』

『だつて炭を儉約して風邪でも引ちや何もなりや仕ない。』

『まさか其樣ことは有りませんわ。』

『しかし今日は好い安排に暖かいね。母上でも今日は大丈夫だらう。』と兩手を伸して大欠伸をして、

『何時か知らん。』

『最早直ぐ十二時でせうよ。お午食にしませうか。』

『イヤ未だ腹が一向空かん。會社だと午風の辨當が待遠いやうだけどなア。』と言いながら其處を出て勝手の座敷から女中部屋まで覗きこんだ。女中部屋など從來入つたことも無かつたのであるが、見ると高窓が二尺ばかり開け放しになつてるので、何心なく其處から首をひよいと出すと、直ぐ眼下に隣のお源が居て、お源が我知らず見

上た顔とぴたり出會つた。お源はサと顔を眞赤にして狼狽切つた聲を漸と出して

『お宅では斯いふ上等の炭をお使ひなさるんですもの、堪りませんわね。』と佐倉の切炭を手に持て居たが、それを手玉に取りだした。窓の下は炭俵が口を開けたまゝ並べてある場處で、お源が木戸から井戸邊にゆくには是非この傍を通るのである。

眞藏も一寸狼狽いて答に窮したが

『炭のことは私共に解らんで……』と莞爾微笑て其まゝ首を引込めて了つた。

眞藏は直ぐ書齋に歸つてお源の行爲に就て考がへたが判斷が容易に着ない。お源は炭を盜んで居る所であつたとは先づ最初に來る判斷だけれど、眞藏は其を其儘確信することが出來ないのである。實

際たゞ炭を見て居たのかも知れない、通りがゝりだからツイ手に取つて見て居る所を不意に他人から瞰下されて理由もなく顔を赤らめたのかも知れない。まして自分が見たのだから狼狽へたのかも知れないと考へれば考へられんこともないのである。眞藏は成るべく後の方に判斷したいので、遂にさう心で決定て兎も角何人にも此事は言はんことにした。

しかし萬一若し盜んで居たとすると放下つて置いては後が惡からうとも思つたが、一度見られたら、とても惡事を續行ることは得爲まいと考へたから尙ほ更ら此事は口外しない方が本當だと信じた。

どちらにしてもお德が言つた通り、彼處へ竹の木戸を植木屋に作らしたのは策の得たるものでなかつたと思つた。

午後三時過ぎて下町行の一行はぞろ〳〵歸宅つて來た。一同が茶

の間に集まつてがや〳〵と今日の見聞を今一度繰返して話合ふのであつた。お清は勿論、眞藏も引出されて相槌を打つて聞かなければならない。禮ちやんが新橋の勸工場で大きな人形を强請つて困らしたの、電車の中に泥醉者が居て衆人を苦しめたの、眞藏に向つて細君が、所天は寒むがり坊だから大德で上等飛切の舶來のシャツを買つて來たの、下町へ出ると如何しても思つたよりか餘計にお金を使ふだの、それからそれと留度がない。そして聞く者よりか喋舌て居る連中の方が餘程面白さうであつた。

先づ此がや〳〵が一頻止むとお德は急に何か思ひ出したやうに起て勝手口を出たが暫時して返つて來て、妙に眞面目な顏をして眼を圓くして、

『まア驚いた！』と低い聲で言つて、人々の顏をきよろきよろ見廻

はした。人々も何事が起つたかとお德の顏を見る。

『まア驚いた！』と今一度言つて、『お清樣は今日屋外の炭をお出しになりや仕ませんね？』と訊いた。

『否、私は炭籠の炭ほか使はないよ。』

『そうら解つた、私は去日から何如も炭の無くなりかたが變だ、如何炭屋が巧計をして底ばかし厚くするからつて斯うも急に無くなる筈がないと思つて居たので御座いますよ。それで私は想當つてる事があるから昨日お源さんの留守に障子の破目から內をちよいと覗いて見たので御座いますよ。さうすると如何でせう』と、一段聲を低めて彼の破火鉢に佐倉が二片ちやんと埋つて灰が被けて有るじやア御座いませんか。それを見て私は最早必定さうだと決定て御隱居樣に先づ申上げて見やうかと思ひましたが、一つ係蹄をかけて此方で

驗めした上と考がへましたから今日行つて試たので御座いますよ。』
とお德はにやりと笑つた。
『どんな係蹄をかけたの？』とお清は心配さうに訊いた。
『今日出る前に上に並んだ炭に一々符號を附けて置いたので御座います。それが如何でせう、今見ると符號を附けた佐倉が四個そつくり無くなつて居るので御座います。そして土竈は大きなのを二個上に出して符號を附けて置いたら其も無いのです。』
『まア如何したと云ふのだらう。』とお清は呆れて了つた。
老母と細君は顏見合して默つて居る。眞藏は偖は愈々と思つたが今日見た事を打明けるだけは矢張見合はした。つまり眞藏には左樣まですするに忍びなかつたのである。
『で御座いますから炭泥棒は何人だか最早解つてます。如何致しま

せう。』とお德は人々が此大事件を喫驚して、轟々と論評を初めて吳れるだらうと豫期してゐたのが、お清が聲を出して吳れた外、旦那を初め後の人は默つて居るので、少し張合が拔けた調子で斯う問ふた。暫時く誰も默つて居たが
『如何するッて、如何するの？』とお清が問ひ返した、お德は少々焦燥たくなり
『炭をですよ。炭を彼のまゝにして置けばこれから幾干でも取られます。』
『臺所の緣の下は如何だ』と眞藏は放擲つて置いてもお源が今後容易に盜み得ぬことを知つて居るけれど、其理由を打明けまいと決心してるから、仕樣事なしに斯う言つた。
『充滿で御座います。』とお德は一言で拒絕した。

『さうか』と眞藏は默つて了う。

『それじや斯うしたら如何だらう。お德の部屋の戸棚の下を明けて當分兎も角彼處へ炭を入れることにしたら。そしてお德の所有品は中の部屋の戸棚を整理けて入れたら』と細君が一案を出した。

『それじやァ左樣致しませう。』とお德は直ぐ贊成した。

『お德には少し氣の毒だけれど。』と細君は附加した。

『否、私は「中の部屋」のお戸棚へ衣類を入れさして頂ければ尙ほ結構で御座います。』

『それじや先あ左樣決定るとして、全體物置を早く作れといふのに眞藏がぐず〳〵して居るから斯ういふことになるのです。物置さへあれば何のこともないのに。』と老母が漸と口を利たと思つたら物置の愚痴、眞藏は頭を搔いて笑つた。

『否、斯ういふことになつたのも、竹の木戸のお蔭で御座いますよ。ですから私は彼處を開けさすのは泥棒の入口を作へるやうなものだと申したので御座います。今となりや泥棒が泥棒の出入口を作へたやうなものだ。』とお德が思はず地聲の高い調子で言つたので、老母は急に

『靜に、靜に、そんな大きな聲をして聽れたら如何します。私も彼處を開けさすのは厭じやッたが開けて了つて今急に如何もならん。今急に彼處を塞げば角が立て面白くない。植木屋さんも何時まで彼樣物置小屋見たやうな所にも居られんで移轉なり如何なりするだらう。そしたら彼所を塞ぐことにして今は唯だ何にも言はんで知らん顏を仕てる、お德も決してお源さんに炭の話など仕ちやなりませんぞ。現に盜んだ所を見たのではなし又高が少しばかしの炭を盜られ

たからつて其を荒立てゝ彼人者たちに怨恨れたら猶ほ損になります
ぞ。眞實に。』と老母は老母だけの心配を諄々と說た。
『眞實に左樣よ。お德は如何かすると譏謔を言ひ兼ないがお源さん
に其樣ことでもすると大變よ、反對に物言を附けられて如何な目に
遇ふかも知れんよ、私は彼の亭主の磯が氣味が惡くつて成らんの
よ。變妙來な男ねえ。彼樣奴に限つて向ふ不見に人に喰つてかゝる
よ。』とお淸も老母と同じ心配。老母も磯吉のことは口には出さなか
つたが心には無論それが有たのである。
『何に彼男だつて唯の男サ。』と眞藏は立上がりながら『然ども先ア
關係はんが可い』
眞藏は自分の書齋に引込み、炭問題も一段落着いたので、お德と
お淸は大急で夕御飯の仕度に取掛つた。

お德はお源が如何な顏をして現はれるかと內々待て居たが、平常
も夕方には必然水を汲みに來るのが姿も見せないので不思議に思つ
て居た。
日が暮て一時間も經てから磯吉が水を汲みに來た。

【下】

お源は眞藏に見られても巧く誤魔化し得たと思つた。恰度眞藏が
窓から見下した時は土竈炭を袂に入れ佐倉炭を前掛に包んで左の手
で壓へ、更に一個取らうとする處であつたが、元來性質の良い邪推
などの無い旦那だから多分氣が附かなかつただらうと信じた。けれ
ど夕方になつて如何しても水を汲みにゆく氣になれない。
そこで磯吉が仕事から歸る前に布團を被つて寢て了つた。寢たつ

て眠むられは仕ない。垢染た煎餅布團でも夜は磯吉と二人で寢るから互の體温で寒氣も凌げるが一人では板のやうにしやちこ張つて身に着かない、で起きて居るよりも一倍寒く感ずる。ぶる〳〵慄へさうになるので手足を縮められるだけ縮めて丸くなつた處を見ると人が寢てるとは承知ん位だ。

色々考へると厭惡な心地がして來た。貧乏には慣れてるがお源も未だ泥棒には慣れない。先日からちよく〳〵盜んだ炭の高こそ多くないが確的に人目を忍んで他の物を取つたのは今度が最初であるから一念其處へゆくと今までにない不安を覺えて來る。此不安の内には恐怖も羞恥も籠つて居た。

眼前にまざ〳〵と今日の事が浮んで來る、見下した旦那の顔が判然出て來る、そしてテレ隠しに炭を手玉に取つた時のことを思ふと

顔から火が出るやうに感じた。

『眞實に如何したんだらう。』とお源は思はず叫んだ。そして徐々逆上氣味になつて來た。『若しか知れたら如何する。』『知れるものか彼旦那は性質が良いもの。』『性質の良いは當にならない。』『性質の善良のは魯鈍だ。』と促急込んで獨問答をして居たが

『魯鈍だ、魯鈍だ、大魯鈍だ』と思はず又叫んで『フン何が知れるものか』と添足した。そして布團から首を出して見ると日が暮れて入口の障子戸に月が射して居る。けれども起きて洋燈を點けやうとも仕ないで、直ぐ首を引込て又た丸くなつて了つた。そこへ磯吉が歸つて來た。

頭が割れるやうに痛むので寢たのだと聞いて磯は別に怒りもせず驚きもせず自分で燈を點け、藥罐が微溫湯だから火鉢に炭を足し、

水も汲みに行つた。湯の沸騰るを待つ間は煙草をパク〳〵吹してゐたが。

『如何痛むんだ。』

返事がないので、磯は丸く凸起つた布團を少時く熟と視て居たが

『オイ如何痛むんだイ。』

相變らず返事がないので磯は默つて了つた。其中湯が沸騰て來たから例の通り氷のやうに冷た飯へ白湯を注けて澤庵をバリ〳〵、待ち兼た風に食ひ初めた。

布團の中でお源が啜泣する聲が聞えたが、磯には香物を嚙む音と飯を流し込む音と、美味いので夢中になつて居るのとで聞えなかつた、そして飯を食ひ終つたころには啜泣の聲も止んだのである。

磯が火鉢の縁を忽々叩き初めるや布團がむく〳〵動いて居たが、

やがてお源が半分布團に卷纏つて其處へ坐つた。前が開て膝頭が少し出て居ても合さうとも仕ない、見ると逆上せて顏を赤くして眼は涙に潤み、頻りに啜泣を爲て居る。

『如何したと云ふのだ、え？』と磯が問ふたが、此男の持前として驚いて狼狽へた樣子は少しも見えない。

『磯さん私は最早つく〳〵厭になつた。』と言ひ出してお源は涙聲になり

『お前さんと同棲になつてから三年になるが、其間眞實に食ふや食はずで今日はと思つた日は一日だつて有りやしないよ。私だつて何も樂を仕樣とは思はんけれど、これじや餘りだと思ふわ。お前さんこれじや乞食も同然じや無いか。お前さん左樣は思はないの？』

磯は默つて居る。

『これじや唯だ食つて生きてるだけじやないか。饑死する者は世間に滅多にありや仕ないから、食つて生きてるだけなら誰だつてするよ。それじや餘り情ないと私は思ふわ。』涙を袖で拭て『お前さんだつて立派な職人じやないか、それに唯た二人限の生活だよ。それが如何だらう、のべつ貧乏の仕通しで其貧乏も唯の貧乏じや無いよ、滿足な家には一度だつて住まないで何時でも斯樣物置か――』

『何を何時までべらくく喋舌てるんだい。』と磯は矢張お源の方は向ないで、手荒く煙管を擊いて言つた。

『お前さん怒るなら何程でもお怒り。今夜といふ今夜は私は如何あつても言ふだけ言ふよ。』とお源は急促込んで言つた。

『貧乏が好きな者はないよ。』

『そんなら何故お前さん月の中十日は必然休むの？お前さんはお酒

は呑ないし外に道樂はなし滿足に仕事に出てさへお吳なら如斯貧乏は仕ないんだよ。――』

磯は火鉢の灰を見つめて默つて居る。

『だからお前さんが最少し精出してお吳れなら此節のやうに計量炭もろくに買ないやうな情ない……』

お源は布團へ打伏して泣きだした。磯吉はふいと起つて土間に下りて麻裏を突掛けるや戸外へ飛び出した。戸外は月冴えて風はないが、骨身に徹へる寒さに磯は大急ぎで新開の通へ出て、七八丁もゆくと金次といふ仲間が居る、其家を訪ねて。十時過まで金次と將棋を指して遊んだが歸掛に一寸一圓貸せと賴んだ。明日なら出來るが今夜は一文もないと謝絕られた。

歸路に炭屋がある。此店は酒も薪も量炭も賣り、大庭も此店から

炭薪を取り、お源も此店へ炭を買ひに來るのである。新開地は店を早く終うので此店も最早閉つて居た。磯は少時く此店の前を迂路々々して居たが急に店の軒下に積である炭俵の一個をひよいと肩に乗て直ぐ横の田甫道に外て了つた。

大急で歸宅つて土間にどしりと俵を下した音に、泣き寢入に寢入つて居たお源は眼を覺したが聲を出なかつた。そして今のは何の響とも氣に留めなかつた。磯も其儘お源の後から布團の中に潜り込んだ。

翌朝になつてお源は炭俵に氣が着き、喫驚して

『磯さん此は如何したの、此炭俵は？』

『買つて來たのサ。』と磯は布團を被つてるまゝ答へた。朝飯が出來るまでは磯は床を出ないのである。

『何店で買つたの？』

『何處だつて可いじやないか。』

『聞いたつて可いじやないか。』

『初公の近所の店だよ。』

『まア如何して其樣遠くで買つたの。……オヤお前さん今日お米を買ふお錢を費つて了やアしまいね。』

磯は起上つて『お前がやれ量炭も買へんだのッて八か敷しく言ふから昨夜金公の家へ往つて借りやうとして無ッてやがる。其れから直ぐ初公の家へ往つたのだ。炭を買ふから少許貸せといつたら一俵位なら俺家の酒屋で取つて往けと大なこと言ふから直ぐ其家で初公の名前で持て來たのだ。それだけあれば四五日は保るだらう。』

『まア左樣』と言つてお源はよろこんだ。直ぐ口を明けて見たかつ

たけれど、先ア後の事と、せつせと朝飯の仕度をしながら『え、四五日どころか自宅なら十日もあるよ。』

昨夜磯吉が飛出した後でお源は色々に思ひ難んだ末、亭主に精出せと勸める以上、自分も氣を腐らして寢て居ちや何もならない、又たお隣へも顔を出さんと却て疑がはれると斯う考へたのである。

其處で平常の通り辨當持たせて磯吉を出してやり、自分も飯を食べて一通片附たところでバケツを持つて木戸を開けた。

お清とお德が外に出て居た。お清はお源を見て

『お源さん大變顏色が惡いね、如何か仕たの』

『昨日から少し風邪を引たもんですから……。』

『用心なさいよ、それは不可い』

お德は「お早う」と口早に挨拶した限り何も言はない、そしてお源

が炭俵の並べてないのに氣が着き顏色を變へて眼をぎよろ〳〵さして居るのを見て、にやり笑つた。お源は又た早くも之を看取りお德の顏を睨みつけた。お德は斯う睨みつけられたとなると最早喧嘩だ何か甚い皮肉を言ひたいがお清が傍に居るので辛抱して居ると十八九になる增屋の御用聞が木戸の方から入つて來た。增屋とは昨夜磯吉が炭俵の並べてあるお源の家である。

『皆樣お早う御座います。』と挨拶するや、昨日まで戸外に並べてあつた炭俵が一個見えないので『オヤ炭は何處へ片附けたのですか。』

お德は待つてたといふ調子で

『あア悉皆內へ入ちやつたよ。外へ置くと如何も物騷だからね。今の高價い炭を一片だつて盜られちや馬鹿々々しいやね。』とお源を見る、お清はお德を睨む、お源は水を汲んで二歩三歩歩るき出したと

ころであつた。

『全く物騒ですよ、私の店では昨夜到當一俵盗まれました。』

『如何して。』とお清が問ふた。

『戸外に積んだまゝ、平時放下つて置くからです。』

『何炭を盗られたの。』とお徳は執着くお源を見ながら聞いた。

『上等の佐倉炭です。』

お源は此等の問答を聞きながら、齒を喰ひしばつて、踉蹌いて木戸の外に出た。

土間に入るやバケツを投るやうに置いて大急ぎで炭俵の口を開けて見た。

『まア佐倉炭だよ！』と思はず叫んだ。

* * * * *

お徳は老母からも細君からも、みつしり叱られた。お清は日の暮になつてもお源の姿が見えないので心配して御機嫌取りと風邪見舞とを兼ねてお源を訪ねた。内が餘り寂然して居るので『お源さん、お源さん』と呼んで見た。返事がないので可恐々々ながら障子戸を開けるとお源は炭俵を脚繼にしたらしく土間の眞中の梁へ細帶をかけて死で居た。

二日經つて竹の木戸が破壊された。そして生垣が以前の樣に復歸つた。

それから二月經過と磯吉はお源と同年輩の女を女房に持つて、澁谷村に住んで居たが、矢張豚小屋同然の住宅であつた。（をはり）

窮死

九段坂の最寄にけちなめし屋がある。春の末の夕暮に一人の男が大儀さうに敷居をまたげた。既に三人の客がある。まだ洋燈を點けないので薄暗い土間に居並ぶ人影も朧である。

先客の三人も今來た一人も皆な土方か立んばう位の極く下等な勞働者である。餘程都合の可い日でないと白馬も祿々は飲めない仲間らしい。けれども先の三人は、多少か好結果かつたと見えて、思ひ〳〵に飲つて居た。

『文公、さうだ君の名は文さんとか言つたね。身體は如何だね。』と角張つた顔の性質の良さうな四十を越した男が隅から聲をかけた。

『難有う、どうせ長くはあるまい』と今來た男は捨ばちに言つて、

投げるやうに腰掛に身を下して、兩手で額を押へ、苦しい咳息をした。年頃は三十前後である。

『さう氣を落すものぢやアない、しつかりなさい』と此店の亭主が言つた。それぎりで誰も何とも言はない。心のうちでは「長くあるまい」と云ふのに同意をして居るのである。

『六錢しか無い、これで何でも可いから…』と言ひさして、咳息で食はして貰ひたいといふ言葉が出ない。文公は頭の髪を兩手で握かんで悶いて居る。

めそ〳〵泣いてゐる赤兒を背負つたおかみさんは洋燈を點けながら

『苦るしさうだ、水をあげやうか。』と振り向いた。文公は頭を横に振つた。

『水よりか此方が可い、これなら元氣がつく』と三人の一人の大男

が言つた。此男は此店には馴染でないと見えて先刻から口をきかなかつたのである。突きだしたのが白馬の杯。文公は又も頭を横にふつた。

『一本つけやう。矢張これでないと元氣がつかない。代價は何時でも可いから飲つた方が可からう。』と亭主は文公が何とも返事せぬ中に白馬を一本つけた。すると角ばつた顔の男が

『何に文公が拂へない時は自分が如何にでもする。えッ、文公、だから一ッ飲つて見な。』

それでも文公は頭を押へたまゝ默つて居ると、間もなく白馬一本と野菜の煮物を少ばかり載せた小皿一つが文公の前に置かれた。此時やつと頭を上げて

『親方どうも濟まない。』と弱い聲で言つて又も咳息をしてホッと溜

息を吐いた。長顔の痩こけた顔で、頭は五分刈がそのまゝ伸る丈のびて、もゝくちやになつて少の光澤もなく、灰色がゝつて居る。文公のお蔭で陰氣勝になるのも仕方がない、しかし誰もそれを不平に思ふ者はないらしい。文公は續けざまに三四杯ひつかけて又たも頭を押へたが、人々の親切を思はぬでもなく、又た深く思ふでもない。まるで別の世界から言葉をかけられたやうな氣持もするし、うれしいけれど、それがそれまでの事である事を知づて居るから『どうせ長くはない』との感を暫時の間でも可いから忘れたくても忘れる事が出來ないのである。

身體にも心にも呆然としたやうな絶望的無我が霧のやうに重く、あらゆる光を遮つて立ちこめて居る。

空腹に飲んだので、間もなく醉がまはり稍や元氣づいて來た。顔

をあげて我知らずにやりと笑つた時は四角の顔が直ぐ

『そら見ろ、氣持が直つたらう。飲れ飲れ、一本で足りなきやアもう一本飲れ、私が引受るから何でも元氣を加るにやアこれに限ッて事よ！』と御自身の方が大元氣になつて來たのである。

此時、外から二人の男が駈け込んで來た。何れも土方風の者である。

『とう〳〵降て來アがつた。』と叫けんで思ひ〳〵に席を取た。文公の來る前から西の空が眞黑に曇り、遠雷さへ轟きて只ならぬ氣勢であつたのである。

『何に、直ぐ晴ります。だけど、今時分の驟雨なんて餘程氣まぐれだ。』と亭主が言つた。

二人が飛込んでから急に賑うて來て、何時しか文公に氣をつける

者も無くなつた。外はどしや降りである。二個の洋燈の光線は赤く微に、陰影は闇く遍く此煤けた土間を籠めて、荒くれ男の赫顔だけが右に左に動いて居る。

文公は惠れた白馬一本をちび〳〵飲み了ると飯を初た、これも赤兒を背負た女主人の親切で鱈腹喰つた。そして出掛ると急に亭主が此方を向いて

『未だ降つてるだらう、止でから行きな。』

『たいしたことは有るまい。皆樣どうも難有う』と穴だらけの外套を頭から被つて外へ出た。最早晴り際の小降である。兎も角も路地を辿つて通街へ出た。亭主は雨が止んでから行きなと言つたが、何所へ行く？文公は路地口の軒下に身を寄せて往來の上下を見た。幌人車が威勢よく駈て居る。店々の灯火が道路に映つて居る、一二丁

先の大通を電車が通る。さて文公は何處へ行く？

、、めし屋の連中も文公が何處へ行くか勿論知らないが併し何處へ行かうと、それは問題でない。何故なれば居殘つて居る者の中でも、今夜は何處へ宿るかを決定て居ないものがある。この人々は大概、所謂る居所不明、若は不定な連中であるから文公の今夜の行先など氣にしないのも無理はない。然し彼の容態では遠らずまゐつて了うだらうとは文公の去つた後での噂であつた。

『可憎さうに。養育院へでも入れば可い。』と亭主が言つた。

『所が其養育院とかいふ奴は面倒臭くつてなか〳〵入られないといふ事だせ。』

と客の土方の一人がいふ。

『それじやア行倒だ！』と一人がいふ。

『誰か引取人が無いものかナ。全體野郎は何國の者だ。』と一人がいふ。

『自分でも知るまい。』

實際文公は自分が何處で生れたのか全く知ない、兩親も兄弟も有るのか無いのかすら知ない。文公といふ稱呼も誰いふとなく自然に出來たのである、十二歳頃の時、浮浪少年とのかどで、暫時監獄に飼れて居たが、色々の身の爲になるお話を聞された後、門から追ひ出れた。それから三十幾歳になるまで種々な勞働に身を任して、やはり以前の浮浪生活を續けて來たのである。此冬に肺を患でから藥一滴飲むことすら出來ず、土方にせよ、立坊にせよ、それを休めば直ぐ食ふことが出來ないのであつた。

『最早だめだ』と十日位前から文公は思つてゐた。それでも稼げる

だけは稼がなければならぬ。それで今日も朝五錢、午後に六錢だけ漸く稼いて、其六錢を今めし屋で費つて了つた。五錢は晝めしに成て居るから一文も殘らない。

さて文公は何處へ行く？。茫然軒下に立て眼前の此世の樣を熟と見て居る中に、

『ア、寧そ死んで了ひたいなァ』と思つた。此時、惡寒が全身に行きわたつて、ぶる〳〵ッと慄へた、そして續けざまに苦るしい咳息をして咽入つた。

ふと思ひ付いたのは今から二月前に日本橋の或所で土方をした時知り合になつた辨公といふ若者が此近處に住で居ることであつた。道惡を七八丁飯田町の河岸の方へ歩いて闇い狹い路地を入ると突當に鐵葉葺の棟の低い家がある。最早雨戸が引よせてある。

辿り着いて、それでも思ひ切つて

『辨公、家か。』

『誰だい。』と內から直ぐ返事がした。

『文公だ。』

戸が開て『何の用だ。』

『一晩泊めて吳れ。』と言はれて辨公直ぐ身を橫に避けて

『まアこれを見て吳れ、何處へ寢られる？』

見れば成程三疊敷の一室は名ばかりの板間と、上口に漸く下駄を脫ぐだけの土間とがあるばかり、其三疊敷に寢床が二つ敷いてあつて、豆洋燈が板間の箱の上に乘てある。其薄い光で一ッに寢床に寢て居る辨公の親父の頭が朧に見える。

文公の默つて居るのを見て、

『常例の婆々の宿へ何故で行かねえ？』
『文なしだ。』
『三晩や四晩借りたつて何だ。』
『ウンと借が出來て最早行ねえんだ。』と言ひ樣、咳息をして苦しい息を内に引くや思はずホッと疲れ果た嘆息を洩した。
『身體もよく無いやうだナ。』と辨公初て氣がつく。
『すつかり駄目になつちやつた。』
『そいつは氣の毒だなア』と内と外で暫時無言で衝立て居る。すると未だ寢着れないで居た親父が頭を擡げて
『辨公、泊めて遣れ、二人寢るのも三人寢るのも同じことだ。』
『同じことは一こつた。それぢやア足を洗ふんだ。この磨滅下駄を持て其處の水道で洗らつて來な、』と辨公景氣よく言つて、土間を探

り、下駄を拾つて渡した。
其處で文公は漸と宿を得て、二人の足の裾に丸くなつた。親父も辨公も畫間の激しい勞働で熟睡したが文公は熱と咳息とて終夜苦しめられ曉天近くなつて漸と寢入つた。
短夜の明け易く四時半には辨公引窓を明けて飯を焚きはじめた。親父も間もなく起きて身支度をする。
飯米が出來るや先づ辨公は其日の辨當、親父と自分との一度分を作へる。終つて二人は朝飯を食ひながら親父は低い聲で
『此若者は餘程身體を痛めて居るやうだ。今日は一日そつとして置いて仕事を休ます方が可からう。』
辨公は頬張て首を縱に二三度振る。
『そして出がけに、飯も煮いてあるから勝手に食べて一日休めと言

へ。』

辨公はうなづいた、親父は一段聲を潜めて

『他人事と思ふな、乃公なんぞ最早死なうと思つた時、仲間の者に助けられたなア一度や二度じやアない。助けて吳れるのは何時も仲間中だ、汝も此若者は仲間だ助けて置け。』

辨公は口をもご〳〵しながら親父の耳に口を寄せて

『でも文公は永くないよ。』

親父は急に箸を立て、睨みつけて

『だから猶ほ助けるのだ。』

辨公は又も從順にうなづいた。出がけに文公を搖り起して

『オイ一寸と起ねえ、これから我等は仕事に出るが、兄公は一日休むが可い。飯も炊てあるからナア、イヽカ留守を賴んだよ。』

文公は不意に起されたので、驚いて起き上がりかけたのを辨公が止めたので、又た寢て、その言ふことを聞いて唯だうなづいた。

餘り當にならない留守番だから、雨戸を引よせて親子は出て行つた。文公は留守居と言はれたので直ぐ起きて居たいと思つたが轉つて居るのが結極樂なので十時頃まで眼だけ覺めて起き上らうとも爲なかつたが、腹が空つたので苦しいながら起き直つて。飯を食つて又たごろりとして夢現で正午近くなると又た腹が空る。それで又た食つてごろついた。

辨公親子は或親分に屬て市の埋立工事の土方を稼いで居たのである。辨公は堀を埋る組、親父は下水用の土管を埋る爲めの深い溝を掘る組。それで此日は親父は溝を掘て居ると午後三時頃、親父の跳上げた土が折しも通りかゝつた車夫の脚にぶつかつた。此車夫は車

も衣裝も立派で乘せて居た客も紳士であつたが、突如人車を止めて『何をしやアがるんだ、』と言ひさま溝の中の親父に土の塊を投つけた。『氣をつけろ、間抜め』といふのが捨臺詞で其儘行かうとすると親父は承知しない。

『此野郎！』といひさま道路に這ひ上つて、今しも梶棒を上げかけて居る車夫に土を投つけた。そして

『土方だつて人間だぞ、馬鹿にしやアがんな、』と叫けんだ。

車夫は取て返し、二人は握合を初めたが、一方は血氣の岩者ゆゑ苦もなく親父を溝に突き落した。落ちかけた時調子の取りやうが惡かつたので棒が倒れるやうに深い溝に轉げ込んだ。その爲め後腦を甚く擊ち肋骨を折つて親父は悶絶した。

見る間に附近に散在して居た土方が集まつて來て、車夫は毆打られ

れるだけ毆打られ其上交番に引ずつて行かれた。

虫の呼吸の親父は戸板に乘せられて親方と仲間の土方二人と、氣拔のしたやうな辨公とに送られて家に歸つた。それが五時五分である。文公は此騷に喫驚して隅の方へ小さくなつて了つた。間もなく近所の醫師が來る事は來た。診察の型だけして『最早脈がない。』と言つたきり、そこ〳〵に去つて了つた。

『辨公毅然しな、俺が必然仇を取つてやるから。』と親方は言ひながら財布から五十錢銀貨を三四枚取り出して『これで今夜は酒でも飲で通夜をするのだ、明日は早くから俺も來て始末をしてやる。』

親方の去つた後で今まで外に立て居た仲間の二人は兎も角内へ入つた。けれども坐る處がない、此時辨公は突然文公に

『親父は車夫の野郎と喧嘩をして殺されたのだ。これを與るから木

賃へ泊つて呉れ。今夜は仲間と通夜をするのだから。』と貰つた銀貨一枚を出した。文公はそれを受取つて、

『それじやア親父さんの顔を一度見せて呉れ。』

『見ろ。』と言つて辨公は被せてあつたものを除たが、此時は最早薄闇いので、明白しない。それでも文公は熟と見た。

＊　＊　＊　＊　＊

飯田町の狹い路地から貧しい葬儀が出た日の、翌日の朝の事である。新宿赤羽間の鐵道線路に一人の轢死者が發見つた。

轢死者は線路の傍に置かれたまゝ蔦が被けて有るが頭の一部と足の先だけは出て居た。手が一本ないやうである。頭は血にまみて居た。六人の人がこの周圍をウロ〳〵して居る。高い堤の上に兒守の小娘が二人と職人體の男が一人、無言で見物して居るばかり、四邊

には人影がない。前夜の雨がカラリと霽つて若草若葉の野は光り輝いて居る。

六人の一人は巡査、一人は醫師、三人は人夫、そして中折帽を冠つて二子の羽織を着た男は村役場の者らしく線路に沿うて二三間の所を往つ戻りつして居る。始終談笑して居るのが巡査と人夫で、醫者はこめかみの邊を兩手で押へて蹲居んで居る。蓋し棺桶の來るのを皆が待つて居るのである。

『二時の貨物車で轢かれたのでしよう。』と人夫の一人が言つた。

『その時は未だ降つて居たかね？』と巡査が煙草に火を點けながら問ふた。

『降つて居ましたとも。雨の上つたのは三時過ぎでした。』

『どうも病人らしいねえ。大島樣。』と巡査は醫師の方を向いた、大

島醫者は巡査が煙草を吸つて居るのを見て、自身も煙草を出して巡査から火を借りながら、

『無論病人です。』と言つて轢死者の方を一寸と見た。すると人夫が

『昨日其處の原を徘徊いて居たのが此野郎に違ひありません。たしかに此の外套を着た野郎です。ひよろ〳〵歩いては木の蔭に休んで居ました。』

『さうすると何だナ、矢張死ぬ氣で來たことは來たが晝間は死ねないで夜行つたのだナ。』と巡査は言ひながら疲勞れて上り下り兩線路の間に蹲んだ。

『奴さん彼の雨にどし〳〵降られたので如何にもかうにも忍耐きれなくなつて其處の堤から轉り落ちて線路の上へ打倒れたのでせう。』と人夫は見たやうに話す。

『何しろ憐れむ可き奴サ。』と巡査が言つて何心なく堤を見ると見物人が增えて學生らしいのも交つて居た。

此時赤羽行の汽車が朝暾を眞ともに車窓に受けて威勢よく駛つて來た。そして火夫も運轉手も乘客も皆な身を乘出して薦の被けてある一物を見た。

此一物は姓名も原籍も不明といふので例の通り假埋葬の處置を受けた。これが文公の最後であつた。

實に人夫が言つた通り文公は如何にも斯うにもやりきれなくつて倒れたのである。

（完）

疲勞

京橋區三十間堀に大來館といふ旅館がある、先づ上等の部類で客は皆な紳士紳商、電話は客用と店用と二種かけて居る位で、年中十二三人から三十人までの客が有るとの事。

或年の五月なかばごろである、帳場に坐つて居る番頭の一人が通りがゝりの女中を呼んで。

『お清さん、これを大森樣の所へ持つていつて、此方が先程來ましたがお不在だと言つて斷はりましたつて……』

と一枚の小形の名刺を渡した。お清はそれを受とつて梯子段を上つた。

午後二時頃で大概の客は實際不在であるから家内しんとして極め

て靜かである。中庭の青桐の若葉の影が拭きぬいた廊下に映つてぴか〳〵光つて居る。

北の八番の唐紙をすつと開けると内に二人。一人は主人の大森龜之助。一人は正午前から來て居る客である。大森は机に向つて電報用紙に萬年筆で電文を認めて居るところ、客は上衣を脱いで胴衣一つになり頻に書類を調べて居るところ、煙草盆には埃及煙草の吸ひ殼がくしや〳〵に突込である。

大森は名刺を受とつてお清の口上を終局まで聽かず

『オイ君、中西が來た！』

『そして如何した？』

『いま君が聽いた通りサ、不在だと言つて歸へしたのだ。』

『そいつは弱わつた。』

『彼奴一週間後でなければ上京られないと言つて來たから、帳場に彼奴のことを言つて置かなかつたのだ。まア可いサ、上京て來て吳れたに越したことはない。これから二人で出かけやう。』

頭髪の少し禿げた、でつぷり肥つた客は『ウン』と言つたぎり黄金縁眼鏡の中で細い眼をぱちつかして、鼻下の眞黑な鬚を右手でひねくり乍ら考がへて居る。それを見て大森は煙草を取つて煙草盆をつゝきながら靜かに

『それとも呼ばうか？』

『まア其方が可いな。此方が彼奴ばかりに依頼て居るやうに思はれるのは馬鹿げて居るからな。』

大森は『ちよッと』と言つて一口吸つた煙草を灰に突込み机に向つて急速いで電文を書き了り、今までぼんやり控へて居たお清にそれ

を渡して

『直ぐ出してお吳れ。』

お清は座敷を出た。大森は又た煙草を取つて

『それも左樣だ、彼の先生怜悧で居て馬鹿だから餘り此方で騒ぐと直ぐ高く止つて卒直に承知することも故意とぐずりたがるからね。』

『それで居て此方で少し大く出ると又直ぐ怒るのだ。始末にいけない。』と客に言つて大欠伸を一ッして『兎に角呼ぶとしやうじやアないか。』

『何時呼ばう？』と言つてこれも貰ひ欠伸をした。

『今夜は如何だ。今呼んだつて彼奴旅宿に居やアしない。』

大森は机の上の黄金時計をのぞいて

『二時四十分か。今はとても居ない。しかし』と又た時計のぞいて

少し考へて『明日の朝早くしやうじやアないか。中西が來たとなれば僕はこれから駿河臺の大將に會つて置くはうが可いと思ふ。』

『成程それは其方が可い。』

『それから今夜は澤田を呼んで見本の說明の順序を能く作つて置いて貰ふことにする。』

『成程そいつは猶ほ大切だ。我々だつて中西が對手なら結構說明位は出來るが、それは澤田に越した事はない。それじやア左樣決めた。これから手紙を持してやつて、電話じやア駄目だよ、そして明朝午前八時までに御來車を仰ぐとでもして置う。』

『よし手紙を直ぐ持たしてやらう』と大森は卷紙を執てすら〳〵と書き出した。其間に客は取散してあつた書類を丁寧に取りそろへて大な手革包に納めた。

『中西の旅宿は隨分しみつたれて居るが、彼奴よく辛抱して取換へないね。』と大森は封筒へ宛名を書きながら言つた。『常旅宿となると矢張居心地が可いからサ』と客は答へて上衣を引寄せ、片手を通しながら『君大將に會つたら例の一件を何とか決定て貰はないと僕が非常に困ると言て吳れ給へ。大將は如何かして物にしてやらうと言ふので手間取つて居るだらうがそれじやア實際君の知つてる通り僕がやりきれない、故鄉の奴等人に事を賴む時はわい〳〵言つて騷ぐ癖に、その事が甘くゆくと見向もしないんだ。人を馬鹿にしてやアがる。だから大將にどちらでも可いから駄目だとか出來るとか、明白に早く決定を與へて貰ひたいと言つて吳れ給へ、大將あれで馬鹿に人が善いから賴むと何でもかんでも左樣してやらなければならんと心得てるから遣り切れない、仲に立てる者は難有惑迷だ。』と言つて

る中に上衣を着て了う、何時大森がベルを押したか、女中が入つて來た。

『これは奇妙不思議だ、中西へ手紙をやらうとすると、お蝶さんがやつて來る、爭そへんものだ、』と大森が十七八の少女に手紙を渡す

『アラ又あんな事をおッしやる、中西さんなんか何でもないワ、眞實に私くやしいわ、皆なして揶揄ふんだもの』と手紙を奪取るやうに取つて『可いわ、そんな事をおッしやるなら此のお手紙を何處へ打捨つてしまふから。』

『イヤ謝罪つた、それは大切の手紙だ、打捨られてたまるものか、直ぐ源公に持してやつてお呉れ、お蝶さんは善い子だ。』

『蝶ちやんは善い子だ、序でに人車を。』と客が居住を直して合槌を打つた。

『田浦樣、禿が自慢にやなりませんよ』と言ひ捨てゝ出て去つた。

間もなく車が來て田浦は去り、續いて大森も美麗な宿車で威勢よく出て去つた。

午後四時半頃になつて大森は外から歸つて來たが、室に入るや、其五尺六寸といふ長身を座敷の眞中にごろりと横へて、大の字になつて暫時く天井を見つめて居た。四角な引しまつた顏には堪へ難い疲勞の色が見える。洋服を脫ぐのも面倒臭いらしい。

間もなくお清が入つて來て『江上樣から電話で御座います。』

大森は跳ね起きた。ふら〳〵と眼がくらみざうにしたのを、ウンと蹈張つて突立つた時、彼の顏の色は土色をして居た。

けれども電話口では威勢の可い聲で談話をして『それでは直ぐ來て下さい』と答へた。

室にかへると又もごろりと横になつて眼を閉ぢて居たが、ふと右の手を擧げて指で數を讀んで何か考へて居るやうであつた。やがて其手がばたり疊に落たと思ふと大鼾をかいて其顏はさながら死人のやうであつた。

（終）

節操

『房、奥樣の出る時何とか言つたかい。』と佐山銀之助は茶の間に入ると直ぐ訊た。

『今日は講習會から後藤樣へ一寸廻るから少し遲くなると被仰いました。』

『飯を食せろ！』と銀之助は忌々しさうに言つて、白布の覆けてある長方形の食卓の前にドッカと坐わつた。

女中の房は手早く爛瓶を銅壺に入れ、食卓の布を除つた。そして更に卓上の食品を彼所此處と置き直して心配さうに主人の樣子をうかがつた。

銀之助は外套も脱がないで兩臂を食卓に突いたまゝ眼を閉て居る

『お衣服をお着更になつてから召上つたら如何で御座います。』と房は主人の窮屈さうな樣子を見て、恐る〳〵言つた。御機嫌を取る積でもあつた。何故主人が不機嫌であるかも略知つて居るので、

『面倒臭い此儘で食ふ、お爛は最早可いだらう。』

房は爛瓶を揚て直ぐ酌をした。銀之助は會社から歸りに何處かで飲んで來たと見え、此時既にやゝ醉て居たのである。醉へば蒼白くなる顏は益々蒼白く秀でた眉を寄せて口を一文字に結んだのを見ると房は可恐と思つた。

二三杯ぐい〳〵飲んでホッと嘆息をしたが、銀之助は如何考へて見ても忌々しくつて堪らない。今日は平時より遲く故意と七時過ぎに歸宅つて見たが、矢張豫想通り妻の元子は歸つて居ない。これなら下宿屋に居るも同じことだと思ふ位なら未だ辛抱も出來るが銀

之助の腹の底には或物がある。

『何時頃に歸ると言つた。』

『何とも被仰いませんでした。』と房は言惡さうに答へる。

後藤へ廻はるなら廻はると朝自分が出る前にいくらでも言ふ時があるじやアないかと思ふと、銀之助は思はず

『人を馬鹿にして居やアがる。』と唸るやうに言つた。そして酒ばかりぐい〳〵呑むので、房は

『旦那樣何か召上がりませんか、』と如何かして機嫌を取る積りで優しく言つた。

『見ろ、何が食へる。薄ら寒い秋の末に熱い汁が一杯吸へないなんて情ないことがあるものか。下宿屋だつて汁ぐらゐ吸はせる。』

銀之助の不平は最早二月前からのことである。そして平時も此不

平を明白に口へ出して言ふ時は『下宿屋だつて』を持出す、決して腹の底の或物は出さない。

房は『下宿屋』が出たので沈默て了つた。銀之助は急に起立がつて、

『出て來る。』

『最早直き奥樣がお歸宅りになりませう。』と房は驚いて止めるやうに言つた。

『奥樣の歸宅のを待たないでも可いじやアないか。』

銀之助はむちやくちや腹で酒ばかし呑んで斯うやつて居るのが、女房の歸へるのを待つて居るやうな氣がしたので急に外に飛び出したくなつたのである、

『外で何を勝手な眞似をして居るか解りもしない女房のお歸宅を謹

んでお待申す亭主じやアないぞ』といふのが銀之助の腹である。

『それはさうで御座いますが、最早直きお歸りになりませうから。』と房は飽くまで止めやうとした。

『歸つたつて可いじやアないか。乃公は出るから』と言ひ放つて、何か思ひ着いたと見え、急速いで二階に上つた。

火鉢には櫻炭が埋かつて、小さな鐵瓶からは湯氣を吐いて居る。空氣洋燈が煌々と燿いて書棚の角々や、金文字入りの書や、置時計や、水彩畫の金緣や、籐のソハに敷てある白狐の銀毛などに反射して部屋は綺麗で陽氣である、銀之助はこれが好である。しかし今夜は此等の光景も彼を誘引する力が少しもない。机の上に置いてある彼が不在中に來た封書や葉書を手早く調べた。其中に一通差出人の姓名の書いてない封書があつた。不審に思つて先づ封を切つて見る

と驚くまいことか彼が今の妻と結婚しない以前に關係のあつた靜といふ女からの手紙である。

銀之助は靜と結婚する積りであつたけれど教育が無いとか身分が卑しいとかいふ非難が親族や朋友の間に起り、且つ其純潔すら疑がはれたので遂に何時とはなしに銀之助の方から別れて了つたのであつた。別れて今の妻と結婚して後は靜の成行に就き銀之助は全く知らなかつた。

ところが五年目に突然此手紙、何事かと驚いて讀み下すと其意味は――お別れしてから種々の運命に遇た末今は或男と夫婦同樣になつて居る、然るに貴方樣との關係と同じく矢張男の家で結婚を許さない、その爲め男は遂に家出して今は愛宕町何町目何番地小川方に二人して日蔭者の生活をして居る。窮迫に窮迫を重ね、ちび〳〵した借金も積りて今は何としても立行かぬ樣となつた。そこで如何なることがあつても貴方樣にはと誓つて居たけれど其誓も捨て義理も忘れてお願ひ申すのである、何卒二十圓だけ用意して明晩來て吳れまいか――といふのである。

明晩とは今夜である、銀之助はしみ〳〵靜の不幸を思つた。靜は男に愛着はれ又た男を愛着ふ女である。そして可憐で正直で怜悧な女であるが不思議と關係のない者からは卑しい人間のやうに思はれる女で・實に何者にか咀はれて居るのではないかと思つた。しかし銀之助には以前の戀の情は少もなかつた。

どうせ飛び出すのだ、何しろ訪ねて見ようと銀之助は先づ懷中を改めると五圓札が一枚と餘は小錢で五六十錢あるばかり。これでも仕方がない、不足の分は先方の樣子を見てからの事と直ぐ下に降

りた。

『房、遲くなつたら閉めても可いよ。』

『アラ如何してもお出になりますので御座いますか。』と房はきよと〳〵して氣が氣でない。

『何に心配しないでも可いよ、奥樣に急に用が出來たから出たつて言つてお吳れ。』

外は星月夜で風の無い靜な晩である。左へ曲れば公園脇の電車道銀之助は右に折れてお濠邊の通行のない方を選んだ。ふと氣が着いて自宅から二三丁先の或家の瓦斯燈で時計を見るとしゝ時過である。

外で冷かな空氣に觸れると醉が足りない。もすこし飲んで出れば可かつたと思つた。

愛宕町は七八丁の距離しかないので銀之助は靜のこと、今の妻の

元子のことを考へながら、歩むともなく、徐々歩るいた。

成程比べて見ると靜には何處か卑しいところがあつて、元子にはそれがない。

靜の卑しいやうに他から思はれるところは何故であるかと考へた。靜には何處かに色ッぽい風がある。女性にはなくてならぬ節操といふ釘が一本足りないで、其爲め身體全體に『たるみ』が出來て居る、其『たるみ』が卑しい色を成して居るのだ、それが證據には自分の前に靜には情夫が有つたらしく、自分の後に今の男があるではないか。

けれでも自分の經驗に依ると靜は自分と關係してる間は決して自分を不安に思はしめるやうなことは無かつた。正直で可憐で柔和で身も魂も自分に捧げて居るやうであつた。

銀之助は斯う考がへて來ると解らなくなつた。節操といふものが解らなくなつた。

成程元子は見たところ節操々々して居る。けれど講習會を名に何をして居るか知れたものでない。想像して見ると不審の點は幾多もある。今夜だつて何を働いて居るか自分は見て居ない。自分の見る事は出來ないこと、それが自分に猛烈な苦惱を與へることを元子は實行して居るではないか。

考へれば考へるほど銀之助には解らなくなつた。忌々しさうに頭を振て、急に急足で愛宕町の闇い狹い路地をぐるぐる廻つて漸と格子戸の小さな二階屋に「小川」と薄暗い瓦斯燈の點けてあるのを發見けた。「小川方」とあつた、よろしいこれだと、躊躇うことなく格子を開けて

『お宅にお靜さんといふ人が同居して居られますか。』

と訊や、直ぐ現はれたのが靜であつた。

『能く來て下さいました。待て居たんですよ。サアどうか上つて下さいましな。』と低い艶のある聲は昔のまゝである。

『イヤ上るまい。貴方は一寸出られませんか。』

『さうね、一寸待つて下さい。』と急いで二階へ上つたが間もなく降て來て

『それでは其所いらまで御一所に歩きませう。』

二人は並んで默つて路地を出た。出るや直ぐ銀之助は

『よくこれが出しましたね。』と親指を靜の眼の前へ突き出した。

『アラ彼な事を。相變らず口が惡いのね。』

『別れてから、たつた五年じアありませんか。』

『ほんとに五年になりますね、昨日のやうだけれど。』

二人の言葉は一寸と途斷れた、そして。何所へともなく目的なく歩て居るのである。

『今のこれとは何時からです。』と銀之助は又た親指を出した。

『これはお止しなさいよ、變ですから。一昨年の冬からです。』

『それまでは。』

『貴方と不可なくなつてから唯だ内に居ました。』

『たゞ。』

『さうよ。』と言つて『おゝ薄ら寒い』と靜は銀之助に寄り添た。銀之助は思はず左の手を靜の肩に掛けかけたが止した。

『僕も醉が醒めかゝつて寒くなつて來た。靜ちやんさへ差つかへ無けれァ彼の角の西洋料理へ上がつてゆつくり話しませう。』

靜は一寸考へて居たが

『最早遲いでせう。』

『ナアに未だ。』

靜は又一寸考へて

『貴郎私のお願を叶へて下すつて。』と言はれて氣が着き、銀之助は停止まつた。

『實は僕今夜は五圓札一枚しか持て居ないのだ。これは僕の小使錢の餘りだから可いやうなものゝ若しか二十圓と纏ると、鍵の番人をして居る妻君の手からは兎ても取れつこない。どうかして僕が他から工面しなければならないのは貴女にも解るでせう。だから今夜はこれだけお持なさい。餘は二三日中に如何にか爲ますから。』と紙入から札を出て靜に渡した。

『ほんとに、私はこんなことが貴郎に言はれた義理ぢアないんですけれど。手紙で申し上げたやうな譯で……』

『最早可いよ、僕には解つてるから。』

『だつて全く貴樣にお願ひして見る外方法が盡ちやつたのですよ。……。』

『最早解つてますよ。それで餘の分は何れ二三日中に持て來ます。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊

銀之助は靜に分れて最早歩くのが嫌になり、俥を飛ばして自宅に歸つた。遲くなるとか、閉めても可いとか房に言つたのを忘れて了つたのである。

歸つて見ると未だ元子は歸宅て居ない。房も機嫌を取る言葉がないので沈默て横を向いてると、銀之助は自分でウヰスキーの瓶とコ

ップを持て二階へ駈け上がつた。

精で三四杯あほり立てたので醉が一時に發して眼がぐらぐらして來た。此時

『斷然元子を追ひ出して靜を奪つて來る。卑しくつても節操がなくつても靜の方が可い』といふ感が猛然と彼の頭に上つた。

『靜が可い、靜が可い』と彼は心に繰返しながら室内をのそのそ歩いて居たが、突然ソハの上に倒れて兩手を顏にあてゝ溢るゝ涙を押へた。

（終）

二　老人

【上】

秋は小春の頃、石井といふ老人が日比谷公園のベンチに腰を下して休息で居る。老人とは言ふものゝ漸と六十歳で足腰も達者、至つて壯健の方である。

日はやゝ西に傾いて赤蜻蛉の翼が、きら〳〵と光り、風無きに風あるが如く浮々と飛んで居る、老人は眼を瞬たいて其を眺めて居る、看るともなしに看て居る、空々寂々心中何等の思ふことも無い體。

老人の前を幾組かの人が通つた。老へるも若きも、病るも健かなるも。されど誰あつて此老人の氣に留める者も無く、老人も亦た人が通らうと犬が過ぎ行かうと一切お關ひなし、悠々行路の人、緣な

くんば眼前千里、たゞ靜かな穩かな蒼天が何時も何時も平等に覆ふて居るばかりである。

右の手を左の袂に入れてゴソ〳〵やつて居たが、やがて「朝日」を一本取出して口に啣へた。今度はマッチを出したが箱が半分壞れて中身は僅に五六本しか無い。生憎に二本摺り損なつて三本目で漸と火が點いた。

スパリ〳〵と如何にも旨さうである。青い煙、白い煙、眼の先に透明に光つて、渦を卷て消ゆく。

『オヤ、彼れは德ぢやないか。』

と石井翁は消えゆく煙の末に浮び出た洋服姿の年若い紳士を見て思つた。芝生を隔てゝ二十間ばかり先だから判然しない。判然しないが似て居る。背格好から歩き風まで確に武だと思つたが、彼は足早

に過ぎ去つて木蔭に隱れて了つた。

此姿のおかげで老人は空々寂々の境に何時までも居る譯にゆかなくなつた。

甥の山上武は二三日前、石井翁を訪うて、口を極めて其無爲主義を攻擊したのである。武を石井老人は何時も德と呼ぶ、其は武の幼名を德助と稱つてから、十二三の頃德の親父が當世流に武と改名さしたのだ。

德の姿を見ると二三日前の德の言葉を老人は思ひ出した。

德の說く所も萬更無理では無い、道理はあるが、彼の德の言草が本氣でない。眞實彼奴は左樣信じて言ふ譯ぢやない。あれは當世流の理窟で、何人も言ふたと、言はゞ口前だ。德の本心は矢張私を引張出て五圓でも十圓でも稼がさうとするのだ、其證據には先達頃ま

では遊んで暮すのは無駄だ、足腰の達者な中は取れる金なら取るやうにするが得だ、叔父が出る氣さへあれば必然周旋する、如何せ隱居仕事の積だから十圓だつて決して恥るに足らんと言つた癖に今度は如何だ。人間一生、いやしくも命のある間は遊んで暮らす法はない、病氣でない限り死ぬるまで仕事をするのが人間の義務だと言ふ。全然理窟の根本が違つて來たぢやないか、――矢張私を稼がす積りサとまで……考へて來た時。老人は恰度一本の煙草を喫ひ切つた。

石井翁は一年前に或官職を停めて恩給三百圓を貰ふ身分になつた。月に割つて二拾五圓。一家は妻に二十になるお菊と十八になるお新の二人娘で都合四人生活、銀行に預けた貯金とても高が知れてるから先づ食つて行けないといふのが世間並である。けれども石井

翁は少も苦にしない。

例を車夫や職工に取つて、食つて行けないはずは無いと主張するのである。無論食ふに食はれない理窟はない、家賃、米代以下お新の學校費まで計算して成程二十五圓で間に合さうと思へば間に合ふのである。

それで石井翁の主張は、間に合ひさへすれば、それで行つてゆく。今更私が隱居仕事で候のと言つて腰辨當で會社にせよ役所にせよ病院の會計にせよ、五圓十圓と稼いで見て如何する、私は永年のお務を終て、やれ〳〵御苦勞であつたと恩給を頂く身分になつたのだ。治まる聖代の難有さにこれぞといふ失策もせず、長病氣にも罹らず長官にも下僚にも憎まれも嫌がられもせず務め上げて來たのだ。最早斯うなれば私などは所謂る聖代の逸民だ。恩給だけで兎も

角も暮せるなら、それを難有く頂戴して、すつかり慾から離れて其日々々を一家睦じく樂く暮すのが當然だ。よしんば二十五圓に十圓殖たら幾千の贅澤が出來る。――悉皆慾で慾には限がない――役目となれば五圓が十圓でも、雨の日雪の日には休む譯には往かない、矢張腰辨當で鼻水を垂らして若い者の中に交つてよぼ〳〵と通はなければならぬ。オ、嫌厭な事だ！

といふのである。だから役を退た時、知人やら親族の者が、隱居仕事を勸め、中には先方に略交渉をつけて物にして來てまで勸めたが、悉く以上の理由で拒絶して了つたのである。細君は氣輕な人物で何事も斷念の可い性質だから文句はない。愚痴一つ言はない。お菊お新の二人も母を助けて飯米も焚けば八百屋へ使者にも行く。斯くてこそ石井翁の無爲主義も實行されて居るのである。

處が武の母は石井翁の細君の妹だけに、此無爲主義を危み、姉は盲從してこそ居れ、女は矢張り女、石井樣の隱居仕事で二十五圓の上に十圓殖るなら如何位樂と思ふか知れないと、武をして石井翁を說き落さす積で居るのである。

彼は變物だと最初世話を仕かけた者が手を退いた時分。或日曜日の午後二時頃、武は樣子を見る可く赤坂區南町の石井を訪ねた。俥の入らぬ路地の內で、三軒長屋の最端が其である。中古の建物だから、それほど見苦くは無い。上口の四疊半が玄關なり茶の間なり長火鉢これに伴なふ一式が列べてある。隣室が八疊、これが座敷、この以外には臺所の傍に薄暗い三疊があるばかり。南向の緣先一間半ばかりの細長がい庭には棚を造り翁の娛樂の鉢物が列てある。手狹であるが全體が能く整理されて亂雜な態は毛ほどもなく敷居も柱も

緣も能く拭きこまれて、光つて居る。

『御免なさい。』と武は上口の障子を開けたが茶の間に誰も居ない。

『武です。』と添加へた。すると座敷で

『德さんかえ、サアお上り。』と言つたのが叔母である。

武は上つて襖を開けると座敷の眞中で叔父叔母差向ひの圍碁最中！叔父は一寸武を見て、微笑つて眼で挨拶したばかり。叔母は

『德さん少し待つてお呉れ。直き勝負が着くから』と一心不亂の體である。

『何卒か御ゆつくり。』と德さんの武も此外に挨拶の仕樣がない。ぼ呆れ返つて、爲樣なしに盤面を看て居た。

『德さんは碁が打てたかね。』と叔父は打ちながら問うた。

『全然で駄目です。』

『でも四目殺ぐらゐは出來るだらう。』
『五目並なら出來ます。』
『ハハ、、、、五目並ぢや仕方が無い。』
『叔母さんが碁をお打になることは僕些少も知りませんでした。』
『私ですか、私はこれで隨分古いのですよ。』と叔母は言つたが振向きもしない。
『常住打つて居らつしやつたのですか。』
『否、やたらに打だしたのは此家へ引退んでからですよ。——鳥渡これを待つて頂戴。』
『成りません。』と石井翁、一ぷく點けてスバり〳〵と悠然たるものである。
『だつて此切斷は全く私の見落ですもの。』

『だから先刻から私は「待ませんよ、」「待ませんよ」と二三度も警告を發して置いたぢやないか。』
『待ませんは貴方の口癖ですよ。』
『誰がそんな癖を付けました、私に。』
武は思はずクスリと笑つた。
『それぢや如何あつても待つて下さらんの。』
『マア待ますまい、癖に成るから。』
と言はれて叔母は盤面を見渡して暫く考へて居たが、
『それぢや投ませう。其處が切斷ては碁に成ませんもの。』
『先づさう言つた樣な形だね。』
其處で叔母は投出した。此れから改つて挨拶が濟むと、雜談に移り武は叔父叔母差向で、大概毎日碁を打つ事、娘兩人は今日上野公

園に散歩に出掛た事など聞かされた。

右の次第で徳さんの武も終に手を退いて半歳餘も經つと母親は矢張氣になると見えて如何にかして石井様を說き落して吳れろと賴む。其處で武も隱居仕事の五圓十圓說では到底夫婦差向ひの碁打を說落すことは出來ないと考へ、今度は遊食罪惡說を持出して滔々と卷席立てゝ見た。

石井翁は散々徳さんの武に言はして置いた揚句、

『それぢや山に隱れて木の實を食ひ露を飲んで居る人は如何する。』

『あれは仙人です。』

『仙人だつて人だ。』

『それぢや叔父さんは仙人ですか。』

『市に隱れた仙人の積で居るのだ。』

これで武は又も擊退されて了つたのである。

【下】

さて石井翁は煙草一本喫了つた處でベンチを起うとしたが徳の遊食罪惡說が鳥渡氣に掛りだしたので又一本取り出して喫ひ初めた。徳の本心を看破て居る。そして仙人說で擊退は仕たものゝ、成程、未だぴんしやんして居るのに唯だ遊んで食ふて居るといふのは褒たことでは無いやうに思はれる。それなら何をする。腰辨は眞平だ。田舍に往つて百姓でもするか。こいつは可いかも知れんが差當つて田地がない。翁は行塞つて了つたので、仙人主義を辯護する理窟に立返つて頻と考へ込んで居ると、どしりとばかり同じベンチに身を投げるやうに腰を下した者がある。振向て見るや

『オヤ河田さんぢや無いか。』

先方は全く石井翁に氣が附かなかつたものと見えて、翁に聲を掛けらるゝと卒然飛起つて帽を脱り

『コレは〳〵石井様ですか、貴方とは全然氣が附かんで失禮しました。』とぺこ〳〵お辭儀をする。そして顔を少し紅らめた様子は餘程狼狽したらしい、矢張六十餘の老人である。

『まアお掛なさい。そして其後は如何しました。』

『イヤもうお話にも何もなりません。』と腰を下しながら、

『相變らずで面目次第も無い譯です。』と胡麻白の亂髪に骨太の指を熊手形に差込んで手荒く搔いた。

石井翁は綿服ながら小ザツパリした衣裝に引更て此老人河田翁は柳原仕込の荒いスコツチの古洋服を着て、バクバク靴を穿いて居る

『でも何か仕て居られるだらう。』と石井翁はじろ〳〵河田翁の様子を見ながら聞いた。そして腹の中で「成程相變らずだ」なと思つた。

『イヤ兎てもお話にも何も……』と矢張頭を搔て居たがポケットから鹿皮の眞黑になつた煙草入と扁曲た鉈豆煙管とを取出た。ところが生憎と煙草は塵埃混合の粉末ばかり其儘又たポケットに仕舞込んだのを見て石井翁は「朝日」を袋共出して

『サアお喫ひなさい。』

『イヤこれは如何も』と河田翁は遠慮なく一本抽取つて、石井翁から火を借りた。

此二老人は三十歲前後の頃、或役所で一年餘同僚であつたばかりで無く、石井の親類が河田の親類の親類とかで、石井一家では河田翁の噂は時折出て「今何を仕て居るだらう」「眞實に彼な氣の毒な人

はない」など言はれて居たのである。

『然し遊んでも居なさらんだらうが。』と石井翁は何處までも心配さうに聞く。

『イヤ兎てもお話にも何も……』

これが河田翁持前の一つで、人に對すると言ひ度いことも言へなくなり、つまらん所に自分を卑下して仕まふのである。

『貴方が私の家へ來てから最早五年になるなァ』と石井翁は以前の事を思ひ出した。

『さうなりますかね、早いものだ。……』

『彼の時、貴方が一杯機嫌で「雨の夜に日本近くねぼけて流れこむを唄つて踊つた時は面白かつたがね、ハ、ハ、、、、』

『ハ、、』と一緒に笑つたぎり河田翁は何も言はない。そして何と

なくそは〳〵して居る。

三十の年に恩人の無理強ひに屈して、養子に行き、養子先の娘の半狂氣に辛抱しきれず、遂に敬太郎といふ男の兒を連れて飛びだして了ひ、其兒は姉に預けて育てゝ貰ふ、其以後は決して妻帶せず、純然たる獨身者で到頭六十餘歳まで通して來たのが河田翁の一生である。

此獨身者が翁の不遇の原因をなしたのか、不遇が獨身者の原因であつたのか、これを判つことは出來ない。

善人で、酒も強ては飲まず、これといふ道樂もなく、出入交際の人々には義理を堅くして居て、そして遂に不遇で何時もまご〳〵して安定の所を得ず今日が日に及んだ翁の運命は不思議な事としか思へない。

其處で石井の人々初め翁を知て居る者は皆な「氣の毒な人だ」と言ひ又た不思議なことだと評して居る。しかし皆々言ひ合はしたやうに一致して居る「理由」が無いのでもない、第一河田樣は意久地が無い。其證據には養子に行く前に深く言ひ交した女があつた、愈々養子に行くと定んや五圓で帶の片側を買つて、それを手切同樣に泣く〳〵別れた。第二に案外片意地で高慢な所があつて些細な事に腹を立て直ぐ衝突して職業から離れて了ふ。第三に妙に遠慮深い處があること。

成程さう聞かされると翁の知人共の所謂る「理由」は多少の「理由」を成して居る。

けれど大なる理由が未だ無ければならぬ。人が若し壯年の時から老人の時まで、純然たる獨身生活即ち親子兄弟の關係からも離れて只だ一人、今の社會に住むなら並大抵の人は河田翁と同樣の運命に陷りはせまいか、老いて益々富み且つ榮えるものだらうか。

翁の兒敬太郎は翁と全然無關係で育ち且つ世に立た。そして二十五六の頃、八百屋を初めたが、間もなく止して、賣卜者となつた。且つ今は行方も知れない。そして見ると河田翁其人の脈胳には「放浪」の血が流れて居るのではないか。それが敬太郎へも流込んだのではないか。

石井翁は無論斯ういふことを考へて研究もせず、たゞ氣の毒がる仲間の一人ゆゑ、何にかして今の境遇も聽いて見たいと思ひ、古い事まで話題にして見たが、河田翁は少しも引立ない。たゞそは〳〵して居る。

『何時でせうか』と河田翁は卒然聞いた。石井翁は帶の間から銀時

計の大きいのを出して見て

『三時半です』

『イヤそれぢや最早行かなきやならん。』と河田翁は口早に言つて、急に聲を潜め、四邊をきよろ〳〵見廻しながら

『實は私此頃或婦人會の集金掛を爲て居るのですから、毎日毎日東京中を遍回らされるので此歳では兎てもやり切れなくなりました そこで最少し樂な仕事をと頼で歩きましたら、やつと旨い口が發見つたんです。それは食扶持一切先方持で月給が七圓だといふのです それで身體を動かすことは餘り無いといふんですから早速それに決めたのです。ところが、』と四邊を見廻はした上に更に延上がつて近所を見廻したが、一段聲を潜めて『私は大變なことを仕て居るんだ兎角足らん〳〵で一圓二圓と費ひ込み到頭十五圓ほど會の集金を費

ひ込で了つたのです。サアそれもチャンと返して帳簿を整理して置かんと今の旨い口に行く事が出來ない。そこで此四五日其十五圓の調達に隨分駈廻りましたよ。やつと三十間堀の野口といふ舊友の倅が返濟の途さへ立てば貸してやらうといふ事になり、今日四時から五時までの間に先方で會ふことになつて居るのです。まアザッと斯んな苦しい譯で……けれど費込の一件は極く内密にお願ひします』と言つて起立り、石井翁が何も言ひ得ぬ中に河田翁は辭儀をペコペコして去つて了つた。

石井翁は取殘されて茫然と河田翁の後姿を見送て居た。

河田翁が延び上がつて遠くまで見廻したのは巡査が可恐かつたのだ。そこで翁と巡査と摺違つた時に河田翁は急に帽子に手をかけて禮をした。石井翁は見て居て其意味が解らなかつた。

（完）

泣き笑ひ

時之助の母親は女中お光の歸るのを一刻千秋の思で待て居る。

『又た彼の魯鈍のことだから、のろくさ〳〵して居るのだらう、眞實に仕樣がないねえ』と大焦燥に焦燥て居る。

するとお光は果して頗る暢氣に、鼻歌でも唄はんばかりの樣子で歸つて來た、と母親には見受られたのである。いきなり

『お光！お光！お前何をぐづ〳〵して居るのだねえ、眞實に！』

『へえ。』と年は十七ばかりの、孤兒なるが故に可哀さうだと、東京から連れ歸つた女中が、眼をパチクリ〳〵、奥樣の顏を眺めて居る

『へえもないもんだ、それで片山の武さんは歸宅つて居ましたか。』

『へえ、片山の坊樣は歸宅つて居ました。』

『そんなら大村の坊樣は？』

『歸宅つて居ました』

母親は急込んで、

『そんなら我家の坊樣は如何したか尋問ましたか。』

『へえ。』

『へえじやアありません、眞實にお前のやうな大馬鹿がありますか我家の坊樣の事を聞ないくらゐなら、お使に行つて何の役にたちます。』

『でも奥樣が只だ片山の坊樣と大村の坊樣が歸宅つたか聞て來いとお仰いましたから、それで……。』

『さう言ひましたとも、けれど何故我家の坊樣はと一言訊くことが出來ません、』と白眼つけて、直ぐ奥に向て

『眞實に貴方心配ですから、御自分で一寸と聞いて來て下さいませんか。』

夕闇薄暗き椽側に涼んで居た休職判事の父親は又た悠然たるものである、團扇をバタリ〳〵

『まアお前のやうにワイ〳〵騒いだつて仕樣がないよ。必定寄道でもしたのだから、今に歸宅つて來るよ。』

『貴方もそんな暢氣な事ばかりおつしやつて萬一の事があつたら如何なさいます。』

『萬一の事とはどんな事だ。』

『萬一のことゝは萬一の事です。』

『我家の時が水へでも陷つたと言ふのだらう。』

『さうですとも。そんな事が無とも限りません。連伴が少年のことですから驚いて逃て來て知らん顏をして居るなんて、よく東京でもあるぢやありませんか。』

『そんな馬鹿々々しいことがあつて堪るものかね。第一お前は時等が釣魚に行く場處の模樣を知らないから、さういふこと言ふのだ、今日、時が釣に往つた處は平地で池の堤といふものがない、だから落ちやうがない。よしんば落ちたにしても足をのめりこます位のもので決して生命に彼是ある筈がないのだ。必定、寄道を爲て居るのだよ。』といはれて乙なことおつしやると言ひたさうな身構をして東京の奥樣

『堤があるか無いか、昨年來たばかりの私にはお國の事は存じませんが、もしか貴方が、斷て寄道を爲たのだとおぼしめすなら一寸と聞いて來て頂くわけに參りませんか知ら。片山の坊樣でも我家の時

が寄道を爲たのか池に陷つたのか位は知て居なさる筈ですから。』と東京式のせきこんだ調子で迫る。一方は平氣なもの、

『お前が心配するのだからお前が聞にゆけば可ぢやアないか。』

『行きますとも、そんなら私が行きます。』

『アレ奥樣、私が參ります。』

『いゝえ、私が行きます。お前などに賴むと安心が出來ません。』

『いゝえ、私が參ります。』

『うるさいね。兩人で行つたら可いだらう。』と父の一聲。母親とお光は申しあはしたやうに沈默つて了つた。そして、こそ〳〵兩人は外方に出掛けた。

『お光や。お前は片山へ行つて聞いておいで。私は此處で待つて居るから。時は平時この道から歸るから。』

と言はれて家から四丁ばかりの淋しい辻に奥樣を殘してお光は再び片山の家へと急いだ。

夕月煙靄をこめて蓮池の香り高き處に母親は月に向つて立つて居た。暫時するとお光が歸つて來て

『奥樣矢張坊ちやんは居殘りなんださうです。』

『一人でかえ。』

『へえ。』

『まア何といふ兒だらう、田舍道の一里上もある所へ遊びにゆきながら、日が暮れても歸つて來ないなんて……』

『今にお歸りになりますよ。』とお光は奥樣の泣き出しさうな聲を聞て慰める。奥樣は無言で蓮池と屋敷との間を通ふ眞直な道を眺めて居たが、

『お前先へお歸り。そして風呂の下を見てお置き。私は少し此處で待つて見るから。』

『畏まりました』とお光の去つた後で、母親は『若しか』といふ場合を色々に想像して、胸の痛くなる程心配して待て居ると、間もなく連池の邊に小さな影が見えだした。だん〳〵近いて來るのを見ると、時之助らしい。けれども若しか又た他家の兒かも知ぬと心も空に見つめて居ると、釣竿を肩にして左手に魚籠を提げ、小聲で唱歌を歌ひながら來るのは正しく時之助である。

『時じやアありませんか』といふ一刹那、悲み變じて喜びとなる。

『ヤア、母樣其處で何を爲て居るのです。』

『まア此兒は。何を爲て居る所じやありません。お前こそ斯んなに遲くまで何をして居たのです、』といふ時、喜び變じて怒となる。

『釣つて居ました。今日は澤山釣れましたよ。』

『最早これから決して釣魚にはやりません。』

『何故？』

『何故もないもんです。さッさと、お歸りなさい。』

と母親は安心して先へ立ち歩めば時之助は平氣なもの、口笛を吹きながら續く。

流石に何程か心配になつてゐたと見えて父親は玄關先に立つて居たが二人の姿の門内に現るゝや

『歸つた、歸つた！』と、にこ〳〵する。

『まア貴方如何でしょう。居殘つて釣つて居たのですとサ、呆れた兒じやアありませんか。』

『時、お前が餘まり遲いので母樣大變心配しましたぞ。』と父親から

言はれても、それには答へず、

『今日は澤山釣れましたよ、今見せます』と言ひ捨てゝ裏へ廻はり井戸邊で足を洗つて、魚籠を提げたまゝ座敷へ入いり、洋燈の下で魚籠の蓋を取り、

『そら、こんなに釣れました。』

『どれ〳〵』と父親は覗込むで

『成程これはお前にしては大漁だ』と感心する。

『隨分大きなの居ますよ。見せましょう』と臺所へ飛んで行き

『光、摺鉢をお呉れ。』

お光は摺鉢を渡しながら

『大變遲うございましたことねえ。』

『默れ！』と摺鉢を奪取り、座敷に飛で歸つて、魚籠をあけると、

大小四五十尾の鮒が銀光を放つて、ぞろ〳〵と出て來る。

『ねえ、父上此魚なぞ隨分大きいでしよう。』

『なる程これは太い。』

『何になります。そんなものを十尾や五尾釣つて來て。眞實に人に心配ばかりかけて！』

と先程から父親が優しく言ふ程、劫腹がつて居た母親は我鳴りつける。

『ほゥだ』と時之助は喜しさうに鮒を眺めながらいふ。

『何が「ほゥ」です。』と母親は睨みつける。

『だつて母上の國じやアこれが五尾か十尾でも、日本帝國は四十九尾ですからね。』

『百尾でも五尾でも其樣ものは同ことです、生意氣を言ふ。』

『でも此奴のやうな大きい鮒は母上見たことが無いでしよう、』と鮒の尾を掴んでぶらさげて見せる。

『何が大いものか。鼻へ捻り込みさうなものが何になります。』

『ほウだ』

『何が「ほウ」です。』

『ほうだ』

『何が「ほウ」です。』

『だつて母上の鼻の穴は隨分大い穴ですねえ。』

『何故です』

『だつて此鮒が鼻へ捻り込れるのですもの』

と平氣でいふのを聞いて父親は思ずくす〳〵と笑つた。

『まア此兒は、此兒は、』と母親は口惜いので泣くのか、可笑いので

笑ふのか、眼には涙、口元は笑味、呆れ返つて後の言葉が出ない。

（完）

都の友へ、B生より

（前略）

久しぶりて孤獨の生活を遣つて居る、これも病氣のお蔭かも知れない。色々なことを考へて久しぶりで自己の存在を自覺したやうな氣がする、これは全く孤獨のお蔭だらうと思ふ。此温泉が果して物質的に僕の健康に効能があるか無いか、そんな事は解らないが何しろ温泉は惡くない。少くとも此處の、此家の温泉は惡くない。

森閑とした浴室、長方形の浴槽、透明つて玉のやうな温泉、これを午後二時頃獨占して居ると、くだらない實感からも、夢のやうな妄想からも脱却して了ふ。浴槽の一端へ後腦を乗て一端へ爪先を掛て、ふわりと身を浮べて眼を閉る。時に薄目を開て天井際の光線窓

を見る。碧に煌めく桐の葉の半分と、蒼々無際限の大空が見える。老人なら南無阿彌陀佛〳〵と口の中で唱へる所だ。老人でなくとも此心持は同じである。

居室に歸つて見ると、ちやんと整頓て居る。出る時は書物やら反古やら亂雜極まつて居たのが、物各々所を得て靜かに僕を待て居るごろりと轉げて大の字なり、坐布團を引寄せて二つに折て枕にして又も手當次第の書を讀み初める。陶淵明の所謂る『不レ求ニ甚解一』位は未だ可いが時に一ページ讀むに一時間もかゝる事がある。何故なら全然で他の事を考へて居るからである。昨日も君の送つて呉れたチエホフの短篇集を讀んで居ると、ツイ何時の間にか「ボズ」さんの事を考へ出した。

ボズさんの本名は權十とか五郎兵衞とかいふのだらうけれど、此

土地の者は唯だボズさんと呼び、本人も平氣で返事をして居た。

此以前僕が此處へ來た時の事である、或日の午後僕は溪流の下流で香魚釣を行つて居たと思ひ玉へ。其場所が全たく僕の氣に入つたのである、後背の涯からは雜木が枝を重ねて被ひかゝり、前は可り廣い澱が靜に渦を卷て流れて居る。足場はわざ〳〵作つた樣に思はれる程、具合が可い。此處を發見た時、僕は思つた此處で釣るなら釣れないでも半日位は辛棒が出來ると思つた。處が僕が釣初めると間もなく後背から『釣れますか』と唐突に聲を掛けた者がある。

振り向くと、それがボズさんと後に知つた老爺であつた。七十近い、脊は低いが骨太の老人で矢張釣竿を持て居る。

『今初めた計りです。』と言ふ中、浮木がグイと沈んだから合すと、餌釣としては、中々大いのが上つた。

『此處は可なり釣れます。』と老爺は僕の直ぐ傍に腰を下して煙草を喫ひだした。けれど一人が竿を出し得る丈の場處だからボズさんは唯見物をして居た。

間もなく又一尾上げるとボズさん、

『旦那はお上手だ。』

『だめだよ。』

『イヤさうでない。』

『これでも上手の中かね。』

『此溫泉に來るお客さんの中じやア旦那が一等だ。』と大げさに贊めそやす。

『何しろ道具が可い。』と言はれたので僕は思はず噴飯だし、

『それじア道具が釣るのだ、ハ、ハ、……』

ボスさん少しく狼狽いて、

『イヤ其は誰だつて道具に由ります。如何ら上手でも道具が惡いと十尾釣れるところは五尾も釣れません。』

それから二人種々の談話をして居る中に懇意になり、ボズさんが遠慮なく言ふ處によると僕の發見た場所はボズさんのあじろの一で足場はボズさんが作つた事、東京の客が連れて行けといふから一緒に出ると下手の癖に釣れないと言つて怒つて直ぐ止す事、釣れないと言つて怒る奴が一番馬鹿だといふ事、温泉に來る東京の客には斯ういふ馬鹿が多い事、魚でも生命は惜いといふ事等であつた。

其日はそれで別れ、其後は互に誘ひ合つて釣に出掛て居たが、ボズさんの家は一室しかない古い茅屋で、其處へ獨でわびしいに住んで居たのである。何でも無遠慮に話す老人が身の上の事は成る可く

避けて言はないやうにして居た。けれど遠まはしに聞き出した處によると、田之浦の者で悴夫婦は百姓をして可なりの生活をして居るが、其夫婦のしうちが氣に喰ぬと言つて十何年も前から一人で此處に住んで居るらしい、そして悴から食ふだけの仕送りを爲て貰つてる樣子である。成程さう言へば何處か固拗なところもあるが、僕の思ふには最初は頑固で行つたのながら後には却つて孤獨のわび住ひが氣樂になつて來たのではあるまいか。世を遁がれた人の趣があるのは其理由であらう。

其處で僕は昨日チエホフの『ブラックモンク』を讀さして思はずボズさんの事を考へ出し、其以前二人が溪流の奥深く泝つて「やまめ」を釣つた事など、それからそれへと考へると堪らなくなつて來た。實は今度來て見ると、ボズさんが居ない。昨年田之浦の本家へ

歸つて亡なつたとの事である。

事實、此世に亡い人かも知れないが、僕の眼にはありありと見える、菅笠を冠つた老爺のボズさんが細雨の中に立て居る。

『病氣に良くない、』『雨が降りさうですから』など宿の者がとめるのも聞かず、僕は竿を持て出掛けた。人家を離れて四五丁も 泝 ると既に路もなければ畑もない。たゞ左右の斷涯と其間を迂回り流る〻溪水ばかりである。瀨を辿つて奥へ奥へと泝るに連れて、此處彼處、舊遊の澱の小蔭にはボズさんの菅笠が見えるやうである。嘗てボズさんと辨當を食べた事のある、平い岩まで來ると、流石に僕も疲れて了つた。元より釣る氣は少しもない。岩の上へ立てジッとして居ると寂しいこと、靜かなこと、深谷の氣が身に迫つて來る。

暫時すると箱根へ越す峻嶺から雨を吹き下して來た、霧のやうな

雨が斜に僕を掠めて飛ぶ。直ぐ頭の上の草山を灰色の雲が切れぎれになつて駈る。

『ボズさん！』と僕は思はず涙聲で呼んだ。君、狂氣の眞似をすると言ひ玉ふか、僕は實に滿眼の涙を落つるに任かした。（略）

（をはり）

入郷記

九月三十日

とかく我が航海は何時も僥倖のみ多し。今宵も亦た珍らしき和なり。船客皆眠に就き、我獨り覺む、いざ然ば此記を書かざる可からず。

先づ一昨日の事より大略を記し置んに、朝、友の二三に送られて新橋より乘車、薄暮名古屋に着し一泊す。此處にて道中見物記を認めて大島君に送りぬ。

昨朝名古屋を發して京都に下車。井上君を訪ひ久ぶりにて快談痛論す。彼、何が故に歸國するかと問ふ。

ありのまゝを語りぬ。彼も亦涙を流して、止めもせず、すゝめも

せず、只だ「然るか」とのみ答へ、嘆息を洩しぬ、彼は何時ながら我に對して杞憂を懷き居るなり。それも可なり。

今日午前、大島君に一報す、要は井上と快談したる模樣のみ。井上の曰く、大阪河口まで送らんと、我之れを辭しぬ。雨降り、さなきだに憂多き我心の、更に沈める樣を見て、強て今一日の滯在をすゝめたれどもこれ亦辭しぬ。離別にのぞみて、我例の壺を示したるに彼泣く。彼曰く、「君は悲哀の人として此世に出で來たりしが如し、」我曰く、「或は然らん」と。

京都より汽車の中にて、我井上の語を思ひ出し、樣々に考がへ始めぬ、母の事、祖母の事、而して、我が思想感情の傾向などを思ひつゞけて、げに井上の語は當れりと感じ、一度は甚く心屈し、氣沈みたれども、亦た靜かに前途の希望を想起し來り、僅かに愁雲を一

掃し得たり。隣席の老人と語りて頗る發明する所ありたれども、そは他日詳しく記す可し。老人は長野の人、我は「長野の老人」てふ稱呼を以て記憶し置かん、渠は今、何處に在ることならん、懷しきかな。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

夜はいよ〳〵更け、海は益々穩かなり、機關の響、遠きが如く近きか如く聞ゆ、水夫の欠伸の聲、彼方に聞ゆ、何人ぞ、甲板の上を靴曳づりて歩むは。彼も眠り難き人の一個か、我心はさえ行くばかりなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此船に乘り込みしは今日午後一時なり、明日は又た此船中に暮すことかと思へば、甚だもどかしく感ず。されど明後日は我が故郷に

在る可し。嗚呼我が故郷！二十年前一度、別れて今はじめて會んとする我が故郷！明後日は其山河我が眼前に現はれ來るなり、祖母樣にお目にかゝるも、明後日なり、すべてが明後日なり、笑ふも泣くも。

嗚呼！故郷來る可き幾歳月の間、我は爾の懷をかるべし、爾我に何を示し、何を語り、何を敎ふるぞ。

いざ我も亦甲板に出て晴れわたる大空の星を仰がんか。

十月一日

『お身は何處まで』

これ彼女が問ひかけし言葉なり。

『某町まで』と我は答へぬ

彼女は驚ける樣にて、自己も亦「某町」に往く者なるを告げ且つ、

「某町」は則ち自己の故郷にして今は歸路なる由を語りぬ、而して彼女は更に問ひぬ。

『某町にゆき玉ふは何の用事ぞ』

我は事もなげに『歸省するなり』と答へければ、彼女は俗に所謂る頭の毛の尖から足の爪の尖迄眺めつゝ、かゝる男は未だ嘗て某町には見當らざりしがと訝かるものゝ如し。聞けば此の老女生れ落ちてより五十幾年、某町以外には一歩も踏み出したることなく、此度近隣の隱居連數人と、初めて京大阪の見物に出懸けて、今は其歸るさなりとぞ。故にこの老女は某町の事をば恰も吾家の内の如く委しく知りつ。何町には誰々が居て、何山には狐が幾匹棲むといふことまで承知せるが如し。我歸省するなりと聞きて、斯くも驚きたるは無理もあらじ。

暫時諦視たる後

『お宅は何處ぞ』と訪ねぬ。

『二十年目に歸るなり、さればよくは樣子も知らねど、家は城山の麓、山際といふ處にありとか、君は上村といふ家を知らずや。』

彼女はこの答を聞て、愕然と驚きたるまゝ、愈々訝かしげに我を眺めて、忍びやかに、

『然らば君は潔樣にては在さずや、』

との問に我も流石に驚きぬ。神に感謝す、神は我未だ我古郷に足を入れざる前に、既にこの愉快なる朋友を我に紹介したまひぬ。この老女名は村田きみ、某町の町外れに住む者なる由、年若き頃は、屢々吾家に往來せりとぞ。我生れて二年目、一家を擧げて上京したる其時の樣子をも彼女は知れり。彼女の曰く、其時親しく知人を

招かれて、離別の宴を開かれし折は、我も亦席に連なるを得たり。實に憶へば既に二十年の古き昔なるよと老の跪き涙は我をして又暗派を呑ましめぬ。

五年前祖母様のみ歸國して、山際の舊宅に住みたまひし以來、村田老女は屢々訪問れて今昔を語り合ひなどせし由、吾母今春彼世に逝かれし事をも老女はとくに知り居たり、又吾身の事は祖母様より委しく聞きて、幾度か噂せしともいふ。されど今秋我母の白骨を小さき壺に納めて、故山に歸り來るとは夢にも想はざりしと語りぬ。

上村といふ家を知らずやと問はれし刹那に君が顔の、君が母の面影に生寫しなるを感じぬ、其面影をのみ土産として古郷に歸り給ふとは如來なる御不運ぞや、祖母様の御嘆きの程も想ひやらる、と語りて老女は泣きぬ。

彼女、歳は五十七といふ。さらば、亡き吾母より七歳老いて吾父より二歳若し。其天禀甚だ淡白なり、眞摯なり、正直なりと評するの外、未だ其特質を見出す能はす。

若し一夜、或は雨ふる夜、彼女と相對して、其懷舊談、其經歷談或は誰彼の身の上の様々の物語りなど聞く事を得ば何等の幸福ぞ、冬の夜屋外の風雨を聽きつゝ、暖爐の前に安樂椅子を据ゑて、古き旅行記を讀むてふ逸樂とても、よもや我がこの幸福には優るまじと思ひぬ。

* * * * * *

明日は故山に在るべし。

吾が故山果して如何の様ぞ。彼女の曰く、甚だ狹き所なれば、東京に住み馴れたる御身にはいと窮屈なる可しと。彼女誤れり月の光

星の影、旭日輝き、夕陽呟き所、人の住む所、社會の成立つ所、我に於て何の廣狹あらん。今日吾船ある島の沖を航する時、其島の小蔭に一箇の茅屋を見たり、青松家の後に並び、白砂前に帶の如く、而して磯打つ波の音は此家に住む人の生活の變化なき調べと相和するものゝ如し。吾心怪しく跳りぬ。嗚呼天の一方、地の一角、人あらば我與に語らん、我與に住まん。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

故山果して如何の樣ぞ、彼女の曰く、町は古びて穢なく、路は細く、礫多し、京大阪に較ぶべくもあらず、況んや思ふに東京に住みたまひし御身に在りては……と。笑ふべし、彼女は京大阪に惚れこみたり、其所謂狹き穢き巷、其細くして确多き路、我に在りて如何に樣々の空想の種なるぞ。我に空想の翼を有す、恍惚の際、屢々青

煙霞の如き翼を搏つて、世界の各地を見舞ひぬ、嘗て月光に睡るテームス河畔の大都を下瞰したり、嘗て驛鈴を想ふてアラビヤの舊都に入りぬ、見馴れぬ生活の樣、異樣の衣服、言語、家屋、時として は其山河の光景の異趣、奇觀、而も等しく我々人間の戀、怨、悲、苦、唱歌、涕泣、夢想し來りて吾心の跳りし事幾度ぞ。

而して今吾が故山、吾が現の如き夢、夢は我が現とならんとす、老女の所謂低き穢なき屋根の並びて、或は白堊の剝げ落ちたる倉に夕陽の眞向に射したる所、其處に老人、小兒、男と女と、犬と猫と鼠と棲むを思へば、これ實に吾が夢の現に化したるにあらずや。

明日は故山に在るべし。否、今日は故山に在るべし。今は十月二日の午前二時なればなり。

然れど母よ、孤兒今獨り故山に歸る、寧ろ悲痛の極みに候はずや

幽魂在しまさば我に伴ひ給へ。

○○○

十月二日

我今此處に坐す、然り東都に非らず、船中に非らず、吾家の一室に坐するなり、此室は嘗て吾父の書齋なりし、祖父の書齋なりし、而して實に祖父の祖父の書齋なりし、而して我今此處に坐す。

故郷は夢ならぬ誠となりて我を取り圍みぬ。

祖母は果して泣き、あらゆる繰り言を以て我に訴へ給ひぬ、我亦只泣くのみ、慰むる言葉を知らず。

祖母曰く、汝既に父に別れ又母に別る、汝に兄弟あるか、無し。汝に頼りにする程の親戚あるか、無し。而して我斯の如く老いぬ、噫、哀れの孤兒よ、我若し逝かば汝は誰が縁を頼みとするぞ、あゝ不運なる孤兒よと我只泣くのみ、然れど又祖母を慰めて云ひぬ。

父母に別れしは是非も候はす、今は只祖母様をこそ頼りにす、今日よりは御傍に在りて、御介抱も出來る事故何事も御養生を第一となし給ひて、二人樂しく暮らし申すべし、吾が行く末を思ひ煩ひたまへども、我には親しき友もあり、吾心だに正しくば吾世總べて同胞の如くにも候と覺ゆる、頼りなしとてさのみ嘆き給ひぞと、祖母は首肯き給ひたれども、猶老の涙は堰き止むる由も無かりき、想ふに祖母は我を見て嬉しとも悲しともあらゆる感懐の一時に溢れしならん。

今日正午、船某港に着す、實に寂寥たる港なり。港よりは市街見えず、二三箇の問屋らしき家屋山の麓に在り、其外に家無し、二三の漁舟波止場の蔭に眠るが如く泛ぶを見たり、其外に船なし。陸地を見やれば山に山重なりて遠くして煙の如きものと、近くし

て鮮かなるものと、何れも秋の光充ち渉りて、時に其中腹より青煙縷の如く立ち昇るを見る、あゝ吾が故山！谷の蔭、峰の麓、如何なる人や棲む、笑ふ者は誰ぞ、泣く者は誰ぞ、何故に泣くか、笑ふ所以も聞かまほしくあり、事情をも委しく知りたし、我も今日よりは御身等の仲間にくははるなりと思ひし時、偏らに懷かしき心地せり。

然り我實に今日よりは御身等の仲間入りするなり、故郷の人々よ

この心荒れ、思亂れ、疑惑に血荒る我をも容れよかし。

村田老女は吾が爲めに人力車二輛を世話して、親しく車夫に言ひ含めて我を此家に送りたるなり。車は一條坦道を走りぬ、我は左右を顧み行手を眺めつ、靜かに車上に在りたれども、初めて見る山、河のありふれたる形、初めて見る橋、家のありふれたる樣、總べて

意味ありげに我を動かし吾心は例の如き詩の境に入り初めぬ。

* * * * * * *

嗚呼、怪しきは吾心かな、否、これ吾心の怪しきに非ず。棲み馴れたる土地に在りては、已に周圍の事物に馴れて人は容易に人生の意味を感獲し得るものにあらず、これ吾が經驗せる事實なり。我嘗て千葉地方に旅せる事あり、日暮れて雲も亦迷ふ時、疲れたる足を曳きて漸くに千葉街の街外れに到着して、忽然寂しき田園より人寰に入りたる時、重く家並に上を蔽ふ煙、彼方此方の街頭に明滅する燈火、小兒の叫ぶ聲、犬の吠ゆる聲、豆腐賣りの聲、空車を引きて薄暗き横道に入りし男、軒端に茫然と立つ女、見る物、聞く物總べて吾が旅行の心に觸れし時、これ等のありふれたる光景の如何に強く新らしく人間生活の形を我に示したるぞ。

＊　＊　＊　＊　＊

車山を繞れば眼前に現はれ來りしものは、歴史癖の詩人、詩人的歴史家の夢想に依つて描かれしが如き古城趾なり。堤の上、一列に立ち並びたる老松の色黒く、風轟々と鳴れる樣、直ちに人をして古封建の名殘を感ぜしめたり。

一山の鬱々と茂りたるあり、一見して其城山たるを知りぬ、車は馳せて其麓に近きこの家の前に止まりし時、門前に一人の老媼を見たり、即ち我が祖母樣の待ち焦がれ居たまひしなり。

（完）

肱の侮辱

東京市より汽車で何哩ほど往くと、某中學校がある。この中學校の通學生は殆ど無賃同樣の大割引の賃錢で汽車を利用し近在近鄕から集り來る。英語教師の米國人など常に東京から通つて居た。又た教員の中には東京に家を持て居て一週に二度位、家に歸る者もある。木谷といふ洋畫の先生も其一人であつた。或年の十月頃。日曜日の午後講演會があつて講演者は三人、其一人は矢島といふ文學者は木谷先生の盡力で來て呉れたのである。―と誰しも思つて居だが、其實講演會があると聞て、矢島自身が木谷に口をきかして、講演者の一人に加はつたのである。最後に矢島が起て壇に上つた。

諸君！私は口無調法で、おまけに無學で、更におまけに文盲で、とても只今まで御講演になつたやうな理化學的有益な「受賣」は出來ません（前の二人の講演者ぢろりと矢島の顔を睨む、矢島は平氣）其

處で私は只だ私自身が此眼で見て、此心に感じた事の一をお話いたさうと思ひます。

ツマラないと思はれる方々は御退場を願ひます、と申す處ですがさうでない。若し、私の談話中、席を起た方があつたならば、其方は私を侮辱したものと致します(靜にコップに水を注いで一口飲む)

さて、お話はこれからですが、少々困た事が出來ました(と言ひつゝ、洋服のポケットの所々を探す、)お話の草稿が失なりました、(生徒はクス〳〵笑ふ、前の二人の講演者はザマを見ろといふ顏つき、木谷先生は心配の餘、半分椅子から起上つて居る)。これは失禮私は草稿を持て來なかつたのでした。(生徒は益々笑ふ)私の草稿は腹の中に藏て在たのでした。紙へ書いて其一字が見えないと最早行きづまるやうな草稿では無つたのでした。

諸君、これから此腹の中の草稿を少しづゝ繰出します。

私は小供の時から釣が好で、河や沼に出かけた者ですが、今でも此道樂は止みません。其處で今年の六月の初でした、此學校の近所に在る川のやうな川に釣に參りました。此川は初ての事ゆゑ樣子が解らず、たゞぼんやりして川岸の礫の上に腰を下し四方の景色を眺て居ますと、上流の方から岸をたどつて此方へ來る者がある。近いたので見ますと、兼て私の知人でゐる洋畫家でした。餘り立派でない和服を着て顏は例の如く髯ばう〳〵として居ました。

『寫生にでも出掛けて來たのですか』と聞くと

『否、ソーでありません。』と言つて口をもご〳〵さして眼をパチクリ〳〵さして、次の言葉を出さうとして居ますが直ぐは出て來ないのです、これが此の人の癖の一であります。

『私は其處に在る中學校に出て居ます。』

と聞いて私は初めて此仁が此地方の中學校に洋畫の教師をして居ることを知りました。

『東京から通ふのですか。』

『三日目に一度東京の家にかへります。』

夫から四方山の話を一時間もして、洋畫家は去りました。兎も角今日は東京に歸る日であるから午後四時の汽車で同道致さうといふ約束をきめました。

此日の私の釣は大失敗でした。

午後四時の汽車に間に合ふべく、停車場へ急ぎました。

途中、諸君の樣な方に幾人も出會ました。悉皆、肩で風を切るやうな歩きつきを仕て居ました。肩が歩いてるやうでした。其時私

は思ひました、肩が歩くやうであるのが別に衞生に害があるのでもない、國家の存亡に關する次第でもない。併し肩で風を切ないでも同じことだ。どちらでも可いなら彼の高慢ちきな、小にくらしい、いけづうしい、生意氣な、馬鹿のくせに利巧さうな顏をして見せる、臆病なくせに大膽な風をして見せる、所謂る肩で風を切ると丈けは見合した方がよろしい、と思ひました。

停車場の前で畫家は私を待て居ました。そして洋服に着かへて居ましたが、それが又頗る古物である上にカラーもカフスも垢染て鼠色になつて居ます。殊に他人の目につくのは、ボロ〳〵したネクタイが正面でヒン曲つて横でカラーから外れて居る事です。此仁の衣裝は此時ばかりでなく、何時見ても先づ斯な風を爲て居るのです。

間も無く汽車が着いて二人は乘りました。同じ車室の中に語學の

教師らしい西洋人が乗り込みまして、其と一所に生徒が七八人乗りました。覺束ない英語で小生意氣な樣子で西洋人に話し掛けて居るのが第一私の癪にさはりました。所が其の生徒達は始め洋畫の先生が同じ車室に乘つて居る事を知らなかつたやうでしたが、其中一人が後をふり向いて洋畫先生を一目見るや肱で隣の生徒をつゝきました。すると其の生徒が又後をふり向ました。そして小聲で何か言ひながら更に隣の生徒へ肱の合圖を致しますと、此度は他の三四人が一度に後を振り向て同時に皆が顏を見合せて一種異樣な笑ひ方を致しました、語學の先生は氣が付かないやうでしたが、私と話をして居た洋畫先生はいくらか氣が付いたと見えて、恥しい樣な悲いやうな顏容――私は未だ曾て此樣氣の毒らしい情ない顏付を見た事が有りません。――を仕て居ました。

此有樣を見た私は言ふに言はれぬ憤怒の情がこみ上て來て、出來る事なら是れらの生徒を一人一人窓からつまみ出して遺りたい程に思ひました。

諸君！諸君は如何思ひます、成程洋畫先生の風采は上りません、成程世辭も愛嬌もない男ですけれども、此人の心の全部が純白で透明で邪氣の無い事を知りながら、是れに侮蔑を加へる事は善良なる學生の行爲でせうか。

けれども私が今皆さんに申上たいと思ふのは、さう言ふ簡單な倫理問題では無いので有ります。倫理問題の根本問題です。洋畫先生の如き人に侮辱を加へると言ふ事は善か惡かと言ふ事を問ふ前に我々は性格の美を認めると云ふ事を學ばねばなりません。性格に對する同情と言ふ事を知らなければなりません、もし其等の事に一切夢

中で、只空に善とか惡とか言ふ如き倫理の講義を聞けばこそ、彼の洋畫家を侮辱するやうな中學生が出來るのです。私から申ますと彼の洋畫家の風采の上らない事や其の行爲の何となく間抜けて居る事や、其顏付の爺々むさい事や、總てがむしろ長所であつても短所ではないと思ひます。彼のお粗末な外形は其の人の極めて單純な善良な心を示して居ると思ひます。

それらの事に少しも心を用ゐず、用ゐる事を知らず。只外形を見て師を侮辱するが如きは何たる卑い且つ愚なる根性でしよう、諸君の中に一人でも斯の如き少年の加つて居るなら實に皆さんの恥辱で有ります。

講演會が終つて矢島が停車場まで來ると洋畫の先生木谷が送つて來た。汽車が出掛けると木谷は口をモグ〳〵さして何か言はうとしたが言ふ事が出來ない。見ると眼に涙を充滿ふくませて居た。

（完）

湯ヶ原ゆき

一

定めし今時分は閑散だらうと、其閑散を狙つて來て見ると案外さうでもなかつた。殊に自分の投宿した中西屋といふのは部屋數も三十近くあつて湯ヶ原温泉では第一といはれて居ながら而も空室はイクラもない程の繁盛であつた。少し當は違つたが先づ〳〵繁盛に越した事なしと斷念めて自分は豫想外の室に入つた。

元來自分は大の無性者にて思立た旅行もなか〳〵實行しないのが今度といふ今度は友人や家族の切なる勸告でヤッと出掛けることになつたのである。『其處に骨の人行く』といふ文句それ自身がふらふらと新宿の停車場に着いたのは六月二十日の午前何時であつたか忘

れた。兎も角、一汽車乘り遲れたのである。

同伴者は親類の伯母であつた。此人は途中萬事自分の世話を燒いて、病人なる自分を湯ヶ原まで送り屆ける役を持て居たのである。

『どうせ待つなら品川で待ちましようか、同じことでも前程へ行つて居る方が氣持が可いから』

と自分がいふと

『ハア、如何でも。』

其處で國府津までの切符を買ひ、品川まで行き、其プラットホームで一時間以上も待つことゝなつた。十一時頃から熱が出て來たので自分はプラットホームの眞中に設けある四方硝子張の待合室に入つて小さくなつて居ると呑氣なる伯母はそんな事とは少しも御存知なく待合室を出て見たり入つて見たり、煙草を喫て見たり、自分が

折り折り話しかけても只だ『ハア』『さう』と答へらるゝだけで、沈々默々、空々漠々、三日でも斯うして待ちますよといはぬ計り悠然泰然、茫然、呆然たるものであつた。其中漸く神戸行が新橋から來た。特に國府津止の箱が三四輛連結してあるので紅帽の注意を幸にそれに乘り込むと果して同乘者は老人夫婦きりで頗る空て居た、待ち疲れたのと、熱の出たのとで少なからず弱て居る身體をドッかと投げ下すと眼がグラついて思はずのめりさうにした。

前夜の雨が晴て空は薄雲の隙間から日影が洩ては居るものゝ梅雨季は爭はれず、天際は重い雨雲が被り重なつて居た。汽車は御丁寧に各驛を拾つてゆく。

『伯母此處は梅で名高い蒲田ですね。』

『さう?。』

『伯母田植が盛んですね。』

『さうね。』

『御覽なさい、眞紅な帶を結めて居る娘も居ますよ。』

『さうね。』

『伯母川崎へ着きました。』

『さうね。』

『伯母お大師樣へ何度お參りになりました。』

『何度ですか。』

これでは何方が病人か分らなくなつた。自分も斷念めて眼をふさいだ。

二

トロリとした間に鶴見も神奈川も過ぎて平沼で眼が覺めた。僅かの假寢ではあるが　それでも氣分がサッパリして多少か元氣が附いたので懲ずまに伯母に

『横濱に寄らないだけ未だ可う御座いますね。』

『ハア。』

是非もないことゝ自分も斷念めて咽喉疾には大敵と知りながら煙草を喫ひ初めた。老人夫婦は頻りと話して居る。而もこれは婦の方から種々の問題を持出して居るやうだ、そして多少か煩いといふ氣味で男はそれに說明を與へて居たが隨分丁寧な者で決して

『ハア』『さう』の比ではない。

若し或人が伯母の背後から其脊中をトンと叩いて『伯母！』と叫んだら『オヽ』と驚いて四邊をきよろ〳〵見廻して初めて自分が汽

車の中に在ること、旅行しつゝあることに氣が附くだらう。全然旅をしながら何物も見ず、見ても何等の感興も起さず、起しても其を折角の同伴者と語り合て更に興を增すこともしないから、初めから其人は旅の面白みを知らないのだ、など自分は獨り腹の中で愚痴つて居ると

『あれは何でしよう、そら彼の山の頂邊の三角の家のやうなもの。』

『どれだ。』

『そら彼の山の頂邊の、そら……。』

『どの山だ』

『そら彼の山ですよ。』

『どれだよ。』

『まア貴下あれが見えないの。ア、最早見えなくなつた。』

と老婦人は殘念さうに舌打をした。伯母は一寸と其方を見たばかり此時自分は思つた、伯母よりか老婦人の方が幸福だと。

そこで自分は『對話』といふことに就て考へ初めた、大袈裟に言へば『對話哲學』又たの名を『お喋舌哲學』に就て。

自分は先づ劈頭第一に『喋舌る事の出來ない者は大馬鹿である』

三

『喋舌ることの出來ないのを稱して大馬鹿だといふは餘り殘酷いかも知れないが、少くとも喋舌らないことを以て甚く自分で豪らがる者は馬鹿者の骨頂と言つて可ろしい、而して此種の馬鹿者を今の世にチヨイ〳〵見受けるには情ない次第である。

『旅は道連、世は情といふが、世は情であらうと無からうと別問題

として旅の道連は難有たい、マサカ獨りでは喋舌れないが二人なら對手が泥棒であつても喋舌りながら歩くことが出來る。』など、それからそれと考へて居るうち又眠くなつて來た。

睡眠は安息だ。自分は眠ることが何より好きである。けれど爲うことなしに眠るのはあたら一生涯の一部分をたゞで失くすやうな氣がして頗る不愉快に感ずる、處が今の場合、如何とも爲がたい、眼の閉るに任かして置いた。

幾分位眠つたか知らぬが夢現の中に次のやうな談話が途斷れ〳〵に耳に入る。

『貴方お腹が空きましたか。』

『・・・・甚く空いた。』

『私も大變空きました。大船でお辨を買ひましよう。』

成程こんな談を聞いて見ると腹が空いたやうである。まして沈默家の特長として伯母も必定さうだらうと、

『伯母お腹が空きましたらう。』

『イヽエ、さうでも有りませんよ。』

『大船へ着いたら何か食べましよう。』

『今度が大船ですか。』

『私は眠て居たから能く分りませんが、』と言ひながら外景を見ると丘山樹林の容樣が正にそれなので

『エヽ、最早直ぐ大船です。』

『大變早いこと！』

大船に着くや老人夫婦が逸早く押ずしと辨當を買ひこんだのを見て自分も其眞似をして同じ物を求めた。頸筋は豚に似て聞までが其らしい老人は辨當をむしやつき、少し上方辨を混せた五十幾歳位の老婦人はすしを頬張りはじめた。

自分は先づ押すしなるものを一つ摘んで見たが酢が利き過ぎてとても喰へぬのでお止めにして更に辨當の一隅に箸を着けて見たがボロ〳〵飯で病人に大毒と悟り、これも御免を被り、元來小食の自分別に苦にもならず總てを伯母にお任して茶ばかり飲んで内心一の悔を懷きながら老人夫婦をそれとなく觀察して居た。

『何故「ビールに正宗……」の其何れかを買ひ入れなかつたらう』といふが一の悔である。大船を發して了へば最早國府津へ着くのを待つ外、途中何も得る事は出來ないと思ふと、淺間しい事には猶ほ殘

念で堪らない。

『酒を買へば可かつた。惜しいことを爲た』

『ほんとに、さうでしたねえ』と誰か合槌を打て呉れた、と思ふと大違の眞中。伯母は今しも下を向て蒲鉾を食ひ欠いて居らるゝ所であつた。

大磯近くなつて漸と諸君の晝飯が了り、自分は二個の空箱の一には笹葉が殘り一には煮肴の汁の痕だけが殘つて居る奴をかたづけて腰掛の下に押込み、老婦人は三個の空箱を丁寧に重ねて、傍の風呂敷包を引寄せ其に包んで了つた。最も左樣する前に老人と小聲で一寸と相談があつたらしく、金貸らしい老人は『勿論のこと』と言ひたげな樣子を首の振り方で見せたのであつた。

此二の悲劇が終つて彼是する中、大磯へ着くと女中が三人はかり

老人夫婦を出迎に出て居て、其一人が窓から渡した包を大事さうに受取つた。其中には空虚の折箱も三ツ入つて居るのである。

汽車が大磯を出ると直ぐ（吾等二人ぎりになつたので）

『伯母今の連中は何者でしよう。』

『今のツて何に？』

『今大磯へ下りた二人です。』

『さうねえ』

『必定金貸か何かですよ。』

『さうですかね』

『でなくても左様見えますね』

『姿様は上方者ですよ、ツルリンとした顔の何處に間抜の狡猾とでも言つたやうな所があつて、ベチヤクリ〳〵老爺の機嫌を取て居ま

したね。』

『さうでしたか』

『妾の古手かも知れない。』

『貴君も隨分口が悪いね』とか何とか伯母が言つて呉れると、益々惡口雜言の眞價を發揮するのだけれども、自分のは合憎く甘い言をトン〳〵拍子で言ひ合ふやうな對手でないから、間の抜けるのも是非がない。

五

箱根、伊豆の方面へ旅行する者は國府津まで來ると最早目的地の傍まで着いた氣がして心も勇むのが常であるが、自分等二人は全然そんな樣子もなかつた。不好な處へいやいやながら出かけて行く

のかと怪まるゝばかり不承無承にプラットホームを出て、紅帽に案内されて兎も角も茶屋に入つた。

伯母は兎につまゝられたやうな顔つきをして、自分は狼につまゝられたやうな顔をして（多分他から見ると其樣顔であつたらうと思ふ）『やれ〳〵』とも『先づ〳〵』とも何とも言はず女中のすゝめる椅子に腰を下した。

自分は伯母に『これから何處へ行くのです』と問ひたい位であつた。最早我慢が仕きれなくなつたので、伯母が一寸と立て用たしに行つた間に正宗を命じて、コップであほつた。伯母の來た時は最早コップも空壜も無い。

思ひきや此藝當を見ながら、

『ヤア、これは珍らしい處で』と景氣よく聲をかけて入つて來た者

がある。

可愛さうに景氣のよい聲、肺臟から出る聲を聞いたのは十年ぶりのやうな氣がして、自分は思はず立ち上つた。見れば友人M君である。

『何處へ？』彼は問ふた。

『湯ケ原へ行く積りで出て來たのだ。』

『湯ケ原か。湯ケ原も可いが此頃の天氣じやアうんざりするナア』

『君は如何したのだ。』

『僕は四五日前から小田原の友人の宅へ遊びに行て居たのだが、雨ばかりで閉口したから、これから歸京うと思ふんだ。』

『湯ケ原へ行き玉へ。』

『御免、御免、最早飽き〳〵した。』

平凡な會話じやアないか。平常なら當然の挨拶だ。併し自分は友と別れて電車に乘つた後でも氣持がすが〳〵して淸凉劑を飲んだやうな氣がした。おまけに先刻の手早き藝當が其効果を現はして來たので、自分は自分と腹が定まり車窓から雲霧に埋れた山々を眺め、

『走れ走れ電車、』

圓太郎馬車のやうに喇叭を吹いて吳れると更に妙だと思つた。

六

小田原は街まで長い、其入口まで來ると細雨が降りだしたが、それも降りみ降らずみたいした事もなく人車鐵道の發車點へ着いたのが午後の何時。半時間以上待たねば人車が出ないと聞いて茶屋へ上り今度は大びらで一本命じて空腹へ刺身を少ばかり入れて見たが、惡

酒なるが故のみならず元來八度以上の熱ある病人、甘味からう筈がない、悉くやめてごろり轉がると、がつかりして身體が解けるやうな氣がした。旅行して旅宿に着いて此がつかりする味は又特別なもので、『疲勞の美味』とでも言はうか、然し自分の場合はそんなどころではなく病が手傳つて居るのだから鼻から出る息の熱を今更の如く感じ、最早や身動きするのもいやになつた。

しかし時間が來れば動かぬわけにいかない、只だ人車鐵道さへ終れば最早着いたも同樣と其を力に箱に入ると中等は我等二人ぎり廣いのは難有いが二時間半を無言の行は恐れ入ると思つて居ると、巡査が二人入つて來た。

一人は張飛の瘦て弱くなつたやうな中老の人物。一人は關羽が鬚髯を剃り落して退隱したやうな中老以上の人物。

痩せた張飛は眞鶴駐在所に勤務すること既に七八年、齋藤巡査と稱し、退隱の關羽は鈴木巡査といつて湯ヶ原に勤務すること實に九年以上であるといふことは、後で解つたのである。

自分の注文通り、喇叭の聲で人車は小田原を出發た。

七

自分は如何いふものかガタ馬車の喇叭が好きだ。回想も聯想も皆な面白い。春の野路をガタ馬車が走る、野は菜の花が咲き亂れて居る、フワリ〳〵と生溫い風が吹いて花の香が狹い窓から人の面を掠める。此時御者が陽氣な調子で喇叭を吹きたてる。如何ら嫁いびりの胡麻白姿さんでも此時だけはのんびりして幾干か善心に立ちかへるだらうと思はれる。夏も可し、清明の季節に高地の旦道を走る時

など更に可し。

ところが小田原から熱海までの人車鐵道に此喇叭がある。不愉快千萬な此交通機關に此鳴物が附いてる丈けて如何か興を助けて居るとは豫て自分の思つて居たところである。

先づ二臺の三等車、次に二等車が一臺、此三臺が一列になつてゴロ〳〵と停車場を出て、暫時くは小田原の場末の家並の間を上には人が押し下には車が走り、走る時は喇叭を吹いて進んだ。

愈々平地を離れて山路にかゝると、これからが初まりと言つた調子で張飛巡査は何處からか煙管と煙草入を出したがマッチがない。關羽も持て居ない。これを見た伯母は徐に袖から取出して

『どうかお使ひ下さいまし。』

と丁寧に言つた。

『これは〳〵。如何もマッチを忘れたといふやつは始末にいかんものでの。』

と巡査は一ぷく點火てマッチを伯母に返すと伯母は生眞面目な顏をして、其を受取つて自身も煙草を喫ひはじめた。別に海洋の絶景を眺めやうともせられない。

どんより曇つて折り〳〵小雨さへ降る天氣ではあるが、風が全く無いので、相摸灣の波靜に太平洋の煙波夢のやうである。噴煙こそ見えないが大島の影も朦朧と浮かんで居る。

『伯母どうです、佳い景色でずね。』

『さうねえ。』

『向うに微に見えるのが大島ですよ。』

『さう?』

此時二人の巡査は新聞を讀んで居た。關羽巡査は眼鏡をかけて。人車は上だからゴロゴロと徐行して居た。

八

景色は大いが變化に乏しいから初めての人なら兎も角、自分は既に幾度か此海と此棧道に慣れて居るから强て眺めたくもない。伯母が定めし珍しがるだらうと思つて居たのが、例の如く簡單な御挨拶だけだから張合が拔けて了つた。新聞は今朝出る前に讀み盡して了つたし、本を讀む元氣もなし、眠くもなし、喋舌る對手もなし、あくびも出ないし、さて斯うなると空々然、漠々然何時か伯母の氣が自分に乘り移つて血の流動が次第々々にのろくなつて行くやうな氣がした。

江の浦へ一時半の間は上であるが多少の高低はある。下りもある喇叭も吹く、斯くて棧道にかゝつてから第一の停留所に着いた所の名は忘れたが此處で熱海から來る人車と入りちがへるのである。

巡査は此處で初て新聞を手離した。自分はホッと呼吸をして我に返つた。伯母はウンともスンとも言はれない。別に我に返る必要もなく又た返るべき我も持て居られない、

『此處で又暫時く待たされるのか。』

と眞鶴の巡査、則ち張飛巡査が言つたので

『いつも此處で待されるのですか。』

と自分は思はず問ふた。

『さうとも限りませんが熱海が遲くなると五分や十分此處で待たされるのです。』

壯丁は車を離れて水を呑むもあり、皆掛茶屋の緣に集つて休んで居た。此處は谷間に據る一小村で急斜面に茅屋が段を作つて叢つて居るらしい、車を出て見ないから能くは解らないが漁村の小なる者蜜柑が山の產物らしい。人車の軌道は村の上端を横つて居る。

雨がポッ〳〵降つて居る。自分は山の手の方をのみ見て居た。初めは何心なく見るともなしに見て居る內に、次第に今見て居る前面の光景は一幅の俳畫となつて現はれて來た。

九

軌道と直角に細長い茅葺の農家が一軒ある、其の裏は直ぐ山の畑に續いて居るらしい。家の前は廣庭で麥などを乾す所だらう、廣庭の突きあたりに物置らしい屋根の低い茅屋がある。母家の入口はレー

ルに近い方にあつて人車から見ると土間が半分ほどはすかひに見える。

入口の外の軒下に楕圓形の据風呂があつて十二三の少年が入て居るのが最初自分の注意を惹いた。此少年は其の日に燒けた背中ばかり此方に向けて居て決して人車の方を見ない。立つたり、しやがんだりして居るばかりで、手拭も持て居ないらし、又た何時出る風も見えず、三時間でも五時間でも一日でも、あアやつて居るのだらうと自分には思はれた。廣庭に向た釜の口から青い煙が細々と立騰つて軒先を掠め、ポッ〳〵雨が其中を透して落ちて居る。半分見える土間では二十四五の女が手拭を姉樣かぶりにして上りがまちに大盥程の桶を控へ何物かを篩にかけて專念一意の體、其桶の前に七ッ八ッの小女が坐りこんで見物して居るが、これは人形のやうに動かな

い、風呂の中の少年も同じくこれを見物して居るのだといふことが自分にやつと解つた。

入口の彼方は長い椽側で三人の少女が坐つて居て其一人は此方を向き今しも十七八の姉樣に髪を結つて貰ふ最中。前髪を切り下て可愛く之も人形の如に順しくして居る、廣庭では六十以上の而も何れも達者らしい婆さんが三人立つて居て其一人の赤兒を脊負て腰を曲げ居るのが何事か婆さん聲を張上げて喋舌つて居ると他の二人の婆樣は合槌を打つて居る。けれども三人とも手も足も動かさない。そして五六人の同じ年頃の小供がやはり身動きもしないで婆さん達の周圍を取り卷いて居るのである。

眞黑な艶の佳い洋犬が一匹、腮を地に着けて臥べつて、耳を垂れたまゝ是れ亦尾をすら動かさず、廣庭の仲間に加はつて居た。そし

て母屋の入口の軒蔭から燕が出たり入つたりして居る。

初めは俳畫のやうだと思つて見て居たが、これ實に畫でも何でもない。細雨に暮れなんとする山間村落の生活の最も靜かなる部分である。谷の奥には墓場もあるだらう、人生悠久の流が此處でも泡立、ぬまでの渦を卷いて居るのである。

十

隨分長く待たされたと思つたが實際は十分ぐらゐで熱海からの人車が威勢能く喇叭を吹きたてゝ下つて來たので直ぐ入れちがつて我々は出立した。

雨が次第に强くなつたので外面の模樣は陰鬱になるばかり、車内は退屈を增すばかり眞鶴の巡査がとう〳〵

『何處へ行しやいます。』と口を切た。

『湯ヶ原へ行うと思つて居ます。』と自分がこれに應じた。思つて居るどころか、今現に行きつゝあるのだ。けれど斯う言ふのが溫泉場へ行く人、海水浴場へ行く人乃至名所見物にでも出掛る人の洒落た口調であるキザな言葉たるを失はない。

『湯ヶ原は可い所です、初めてゞすか。』

『一二度行つた事があります。』

『宿は何方です。』

『中西屋です。』

『中西屋は結構です、近來益々可いやうです。さうだね君。』

と兎角言葉の少ない鈴木巡査に賛成を求めた。

『さうです。實際彼の家が今一番繁盛するでしよう。』と關羽の鈴木

巡査が答へた。

先づこんな有りふれた問答から、だん〳〵談話に花がさいて東京博覧會の噂、眞鶴近海の魚漁談等で退屈を免れ、やつと江の浦に達した。

『サアこれから下りだ。』と齋藤巡査が威勢をつけた。

『伯母これから下りですよ。』

『さう。』

『隨分亂暴だから用心せんと頭を打觸ますよ。』

『さうですか。』

* * * * *

齋藤巡査が眞鶴で下車したので自分は談敵を失つたけれど、湯ヶ原の入口なる門川までは、退屈する程の隔離でもないので困らなか

つた。

日は暮れかゝつて雨は益々強くなつた。山々は悉く雲に埋れて僅かに其麓を現すばかり。我々が門川で下りて、更に人力車に乗りかへ、湯ヶ原の溪谷に向つた時は、さながら雲深く分け入る思ひがあつた。

（終）

少年の悲哀

少年の歡喜が詩であるならば、少年の悲哀も亦た詩である。自然の心に宿る歡喜にして若し歌ふべくんば、自然の心にさゝやく悲哀も亦た歌ふべきであらう。

兎も角、僕は僕の少年の時の悲哀の一ッを語つて見やうと思ふのである。(と一人の男が話しだした。)

* * * * * * *

僕は八歳の時から十五の時まで叔父の家で生育たので、其頃、僕の父母は東京に居られたのである。

叔父の家は其土地の豪家で、山林田畑を澤山持つて、家に使ふ男女も常に七八人居たのである。

僕は僕の少年の時代を田舍で過ごさして呉れた父母の好意を感謝せざるを得ない、若し僕か八歳の時父母と共に東京に出て居たならば僕の今日は餘程違つて居ただらうと思ふ。少くとも僕の智慧は今よりも進んで居た代りに僕の心はヲーズヲース一卷より高遠にして清新なる詩想を受用し得ることが出來なかつたゞらうと信ずる。

僕は野山を駈け暮らして、我幸福なる七年を送つた。叔父の家は丘の麓に在り、近郊には樹林多く、川あり泉あり池あり、そして程遠からぬ處に瀨戸内々海の入江がある。山にも野にも林にも溪にも海にも川にも僕は不自由を爲なかつたのである。

處が十二の時と記憶する、德二郎といふ下男が或日僕に今夜面白い處に伴れてゆくが行かぬかと誘さうた。

『何處だ』と僕は訊ねた。

『何處だと聞つしやるな、何處でも可えじや御座んせんか、徳の伴れてゆく處に面白うない處はない』と徳二郎は微笑を帶びて言つた

此徳二郎といふ男は其頃二十五歳位、屈强な若者で、叔父の家には十一二の年から使はれて居る孤兒である。色の淺黑い、輪廓の正しい立派な男、酒を飲めば必ず歌ふ、飲ざるも亦た唄ひながら働くといふ至極元氣の可い男であつた。常も樂しさうに見えるばかりか心事も至て正しいので狐兒には珍しいと叔父をはじめ土地の者皆に感心せられて居たのである。

『然し叔父さんにも伯母さんにも内證ですよ』と言つて、徳二郎は唄ひながら裏山に登つてしまつた。

頃は夏の最中、月影鮮やかなる夜であつた。僕は徳二郎の後につゐて田甫に出で、稻の香高き畦路を走つて川の堤に出た。堤は一段

高く、此處に上れば廣々とした野面一面を見渡されるのである。未だ宵ながら月は高く澄んで冴えた光を野にも山にも漲ぎらし、野末には靄かゝりて夢の如く、林は煙をこめて浮ぶが如く、背の低い川楊の葉末に置く露は珠のやうに輝いて居る。小川の末は間もなく入江、汐に滿ちふくらんで居る。船板をつぎ合はして懸けた橋の急に低くなつたやうに見ゆるのは水面の高くなつたので、川楊は半ば水に沈んで居る。

堤の上はそよ吹く風あれど、川面は漣だに立たず、澄み渡る大空の影を映して水の面は鏡のやう。徳二郎は堤を下り、橋の下に繫いである小舟の纜を解いて、ひらりと乘ると今まで靜まりかへつて居た水面が俄に波紋を起す。徳二郎は

『坊樣早く早く！』と僕を促しながら櫓を立てた。

僕の飛び乘るが早いか、小舟は入江の方へと下りはじめた。

入江に近くにつれて川幅次第に廣く、月は川面に其清光を涵し、左右の堤は次第に遠ざかり、顧れば川上は既に靄にかくれて、舟は何時しか入江に入つて居るのである。

廣々した湖のやうな此入江を横ぎる舟は僕等の小舟ばかり、德二郎は平時の朗かな聲に引きかへ此夜は小聲で唄ひながら靜かに櫓を漕いで居る。潮の退た時は沼とも思はるゝ入江が高潮と月の光とでまるで樣子が變り、僕には何時見慣れた泥臭い入江のやうな氣がしなかつた。南は山影暗く倒に映り北と東の平野は月光蒼茫として何れか陸、何れか水のけじめさへつかず、小舟は西の方を指して進むのである。

西は入江の口、水狹くして深く、陸迫りて高く、此處を港に錨を

下ろす船は數こそ少いが形は大きく大概は西洋形の帆前船で、其積荷は此濱で出來る食鹽、其外土地の者で朝鮮貿易に從事する者の持船も少からず、內海を往來する和船もあり。兩岸の人家低く高く、山に據り水に臨む其數數百戸。

入江の奥より望めば舷燈高くかゝりて星かとばかり、燈影低く映りて金蛇の如く。寂漠たる山色月影の裡に浮んで恰も畫のやうに見えるのである。

舟の進むにつれて此小な港の聲は次第に聞えだした。僕は今此港の光景を詳細しく說くことは出來ないが、其夜僕の眼に映つて今日尙ほあり〳〵と思ひ浮べることの出來る丈を言ふと、夏の夜の月明らかな晩であるから船の者は甲板に出で家の者は戸外に出で、海にのぞむ窓は悉く開かれ、燈火は風にそよげども水面は油の如く、笛

を吹く者あり、歌ふものあり、三絃の音につれて笑ひどよめく聲は水に臨める青樓より起るなど、如何にも樂しさうな花やかな有樣であつたことで、然し同時に此花やかな一幅の畫圖を包む處の、寂寥たる月色山影水光を忘るゝことが出來ないのである。

帆前船の暗い影の下を潛り、德二郎は舟を薄暗い石段の下に着けた。

『お上りなさい』と德は僕を促した。堤の下で『お乘なさい』と言つたぎり彼は舟中僕に一語を交へなかつたから、僕は何の爲めに德二郎が此處に自分を伴ふたのか少しも解らない、然し言ふまゝに舟を出た。

纜を繫ぐや德二郎も續いて石段に上り、先に立つてすん〳〵登つて行く、其後から僕も無言で從て登つた。石段は其幅半間より狹く

兩方は高い壁である。石段を登りつめると或家の中庭らしい處へ出た。四方板塀で圍まれ隅に用水桶が置いてある、板塀の一方は見越に夏蜜柑の木らしく暗く繁つたのが其頂を出して居る、月の光はくつきりと地に印して寂とし人の氣勢もない。德二郎は一寸立ち止まつて聽耳を立てたやうであつたが、つか〳〵と右なる方の板塀に近いて向へ押すと此處は潛内になつて居て黑い戸が音もなく開いた見ると戸に直ぐ接して梯子段がある。戸が開くと同時に足音靜に梯子段を下りて來て、

『德さんかえ？』と顏をのぞいたのは若い女であつた。

『待つたかね？』と德二郎は女に言つて、更に僕の方を顧み、

『妨樣を連れて來たよ』と言ひ足した。

『坊樣お上んなさいナ。早くお前さんも上つて下さい、此處でぐず

〳〵して居ると可けないから』と女は德二郎を促したので、德二郎は早くも梯子段を登りはじめ、『坊樣暗う御座いますよ』と言つたぎり、女と共に登つて了つたから僕も爲方なしに其後に從いて暗い狹い、急な梯子段を登つた。

何ぞ知らん此家は靑樓の一で、今女に導かれて入つた坐敷は海に臨んだ一室、欄に凭れば港内は勿論入江の奥、野の末、さては西なる海の涯までも見渡されるのである。然し坐敷は六疊敷の、疊も古び、見るからして餘り立派な室ではなかつた。

『坊樣、さア此處へ入つしやい』と女は言つて坐布團を欄の下に運び、夏橙其他の果物菓子などを僕にすゝめた。そして次の間を開けると酒肴の用意がしてある。それを運び込んで女と德二郎は差向に坐つた。

德二郎は平常にない懊しい顏をして居たが、女のさす盃を受けて一呼吸に呑み干し、

『愈々何日と決定つた？』と女の顏を熟と見ながら訊ぬた。女は十九か二十の年頃、色靑ざめて左も力なげなる樣は病人ではないかと僕の疑つた位。

『明日、明後日、明々後日』と女は指を折つて、『明々後日に決定つたの。然しね、私は今になつて又氣が迷つて來たのよ』と言ひつゝ首を垂れて居たが、そつと袖で眼を拭つた樣子。其間に德二郎は手酌で酒をグイ〳〵煽つて居た。

『今更如何と言つて爲方がないじやアないか。』

『それはさうだけれど——考へて見ると死んだはうが何程增しだか知れないと思つて。』

『ハッハッ、、、、坊様、此姉様が死ぬと言ひますが如何しましょうか。……オイオイ約束の坊様を連れて來たのだ、能く見て呉れないか。』

『先刻から見て居るのよ、成程能く似て居ると思つて感心して居るのだ。』と女は言つて笑を含んで熟と僕の顔を見て居る。

『誰に似て居るのた。』と僕は驚いて訊ぬた。

『私の弟にですよ、坊様を弟に似て居るなどゝもつたいない事だけれど、そら、これを御覽なさい。』と女は帶の間から一枚の寫眞を出して僕に見せた。

『坊様、此姉様が其寫眞を德に見せましたから、これは宅の坊様と少しも變らんと言ひましたら是非連れて來て呉れと頼みますから今夜坊様を連れて來たのだから、澤山御馳走を爲て貰はんと可けませんぞ。』と德二郎は言ひつゝも止め度なく飲んで居る。女は僕に摺寄つて、

『サア何でも御馳走しますとも、坊様何が可う御座いますか』と女は優しく言つて莞爾笑つた。

『何にもいらない』と僕は言つて横を向いた。

『それじや舟へ乘りましよう、私と舟へ乘りましよう、え、さう爲ましよう。』と言つて先に立つて出て行くから僕も言ふまゝに女の後に從いて梯子段を下りた、德二郎は唯だ笑つて見て居るばかり。

先の石段を下りるや若き女は先僕を乘らして後、纜を解いてひらりと飛び乘り、さも輕々と櫓を操りだした。少年ながらも僕は此女の擧動に驚いた。

岸を離れて見上げると德二郎は欄に倚つて見下ろして居た、そし

て内よりは燈が射し、外よりは月の光を受けて彼の姿が明白と見える、

『氣をつけないと危難いぞ！』と、德二郎は上から言つた。

『大丈夫！』と女は下から答へて『直ぐ歸るかち待て居てお呉れ。』

舟は暫時く大船小船六七艘の間縫ふて進んで居たが間もなく廣々とした沖合に出た。月は益々冴えて秋の夜かと思はれるばかり、女は漕手を止めて僕の傍に坐つた。そして月を仰ぎ又四邊を見廻はしながら、

『坊樣、あなたはお何歳？』と訊ねた。

『十二。』

『私の弟の寫眞も十二の時のですよ、今は十六……、さうだ十六だけれど十二の時に別れたぎり會はないのだから今でも坊樣と同じ

やうな氣がするのですよ。』と言つて僕の顏を熟と見て居たが忽ち涙ぐんだ。月の光を受けて其顏は猶更蒼ざめて見えた。

『死んだの？』

『否、死んだのなら却て斷念がつきますが別れた限、如何なつたのか行方が知れないのですよ。兩親に早く死別れて唯つた二人の姉弟ですから互に力にして居たのが今では別れ〳〵になつて生死さへ分らんやうになりました。それに私も近い中朝鮮に伴れて行かれるのだから最早此世で會うことが出來るか出來ないか分りません。』と言つて涙が頰をつたうて流れるのを拭きもしないで僕の顏を見たまゝすゝり泣に泣いた。

僕は陸の方を見ながら點つて此話を聞いて居た。家々の燈火は水に映つてきらきらと搖曳いで居る。櫓の音をゆるやかに軋らせなが

ら大船の傳馬を漕で行く男は澄んだ聲で船歌を流す。僕は此時、少年心にも言ひ知れぬ悲哀を感じた。

忽ち小舟を飛ばして近いて來た者がある、德二郎であつた。

『酒を持つて來た！』と德は大聲で二三間先から言つた。

『嬉れしいのねえ、今坊樣に弟のことを話して泣いて居たの』と女の言ふ中德二郎の小舟は傍に來た。

『ハッハッ、、、、大概そんなことだらうと酒を持て來たのだ、飲みな〳〵私が歌つてやる！』と德二郎は既に醉つて居るらしい。女は德二郎の渡した大コップに滿々と酒をついで呼吸もつかずに飲んだ。

『も一ッ』と今度は德二郎が注でやつたのを女は又もや一呼吸に飲み干して月に向て酒氣を吻と吐いた。

『サアそれで可い、これから私が歌つて聞かせる。』

『イ、エ德さん、私は思切つて泣きたい、此處なら誰も見て居ないし聞えもしないから泣かして下さいな、思ひ切つて泣かして下さいな。』

『ハッハッ、、、、そんなら泣きナ、坊樣と二人で聞くから』と德二郎は僕を見て笑つた。

女は突伏して大泣に泣いた、さすがに聲は立て得ないから背を波打たして苦しさうであつた。德二郎は急に眞面目な顏をしてこの有樣を見て居たが、忽ち顏を背向け山の方を見て默つて居る、僕は暫くして

『德、最早歸らう』と言ふや女は急に頭を上げて

『御免なさいよ、眞實に坊樣は私の泣のを見て居てもつまりません

…私坊様が來て下さつたので弟に會つたやうな氣が致しました。坊様も御達者で早く大きくなつて豪い方になるのですよ』とおろおろ聲で言つて『德さん眞實に餘り遲くなるとお宅に惡いから早く坊様を連れてお歸りよ、私は今泣いたので昨日からくさ〳〵して居た胸がすいたやうだ。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊

女は僕等の舟を送つて三四丁も來たが、德二郎に叱られて漕手を止めた、其中に二艘の小舟はだん〳〵遠ざかつた。舟の別れんとする時、女は僕に向て何時までも『私の事を忘れんで居て下さいましナ』と繰返して言つた。

其後十七年の今日まで僕は此夜の光景を明白と憶えて居て忘れようとしても忘るることが出來ないのである。今も尙ほ憐れな女の顏

が眼のさきにちらつく。そして其夜、淡い霞のやうに僕の心を包んだ一片の哀情は年と共に濃くなつて、今はたゞ其時の僕の心持を思ひ起してさへ堪え難い、深い、靜かな、やる瀨のない悲哀を覺へるのである。

其後德二郎は僕の叔父の世話で立派な百姓になり今では二人の兒の父親になつて居る。

流の女は朝鮮に流れ渡つて後、更に何處の涯に漂泊して其果敢ない生涯を送つて居るやら、それとも既に此世を辭して寧ろ靜肅なる死の國に赴いたことやら、僕は無論知らないし德二郎も知らんらしい。

（完）

春の鳥

【一】

今より六七年前、私は或地方に英語と數學の教師を爲て居たことが御座います。其町に城山といふのがあつて大木暗く繁つた山で、餘り高くはないが甚だ風景に富で居ましたゆゑ私は散歩がてら何時も此山に登りました。

頂上には城趾が殘つて居ます。高い石垣に蔦葛からみ附いて其が眞紅に染つて居る安排など得も言はれぬ趣でした。昔は天主閣の建て居た處が平地になつて、何時しか姫小松疎に生ひたち夏草隙間なく茂り、見るからに昔を偲ばす哀れな樣となつて居ます。

私は草を敷いて身を横たへ、數百年斧の入れたことのない鬱たる

深林の上を見越しに近郊の田園を望んで樂んだことも幾度であるか解りませんほどでした。

或日曜の午後と覺えて居ます、時は秋の末で大空は水の如く澄んで居ながら野分吹きすさんで城山の林は烈しく鳴つて居ました。私は例の如く頂上に登つて、やゝ西に傾いた日影の遠村近郊を明く染めて居るのを見ながら、持つて來た書籍を讀んで居ますと、突然人の話聲が聞えましたから石垣の端に出て下を見下しました。別に怪しい者でなく三人の小娘が枯枝を拾つて居るのでした。風が烈しいので得物も多いかして澤山背に負たまゝ猶も四邊をあさつて居る樣子です。むつまじげに話しながら樂しげに歌ひながら拾つて居ますそれが何れも十二三、多分何村あたりの農家の子供でしやう。

私は暫時見下して居ましたが、又もや書籍の方に眼を移して何時

が尋常でないのです。生白い丸顔の、眼のぎよろりとした樣子までが唯の子供でないと私は直ぐ見て取りました。

『先生。何を爲て居るの？』と私を呼びかけましたので私も一寸と驚きましたが、元來私の當時教師を務めて居た町は極く小さな城下ですから私の方では自分の教兒の外の人を餘り知ないでも土地の者は都から來た年若い先生を大概知つて居るので、今此子供が私を呼びかけたも實は不思議はなかつたのです。其處へ氣がつくや私も聲を優しうして

『書籍を讀んで居るのだよ。此處へ來ませんか。』と言ふや、兒童はイキなり石垣に手をかけて猿のやうに登りはじめました。高五間以上もある壁のやうな石垣ですから私は驚いて止めやうと思つて居る中に早くも中程まで來て、手近の葛に手が屆くとすら〳〵とこれを

か小娘のことは忘れて了ひました。するとキャッといふ女の聲、驚いて下を見ますと、三人の子供は何に懼れたのか枯木を背負たまゝアタフタと逃げ出して忽ち石垣の彼方に其姿を隱して終ひました。可怪なことゝ私は其近處を注意して見下して居ると、薄暗い森の奥から下草を分ながら道もない處を此方へやつて來る者があります。初は何物とも知れませんでしたが、森を出て石垣の下に現はれた處を見ると十一か十二歳と思はるゝ男の兒です。紺の筒袖を着て白木綿の兵兒帶をしめて居る樣子は農家の兒でも町家の者でもなさゝうでした。

手に太い棒切を持つて四圍をきよろ〳〵見廻して居ましたが、フト石垣の上を見上げた時思はず二人は顏を見合しました。子供は熟と私の顏を見つめて居ましたが、やがてニヤリと笑ひました。其笑

手繰つて忽ち私の傍に突立ちました。そしてニヤ〳〵と笑つて居ます。

『名前は何と呼ふの？』と私は問ひました。『六』『六？六さんといふのかね。』と問ひますと、兒童は點頭いたま〻例の怪しい笑を洩して口を少し開けたま〻私の顏を氣味の惡いほど熟視て居るのです。

『何歳かね、歳は？』と私が問ひますと、怪訝な顏を爲て居ますから、今一度問返しました。すると妙な口つきをして唇を動かして居ましたが急に兩手を開いて指を屈て一、二、三と讀んで十、十一と飛ばし、顏をあげて眞面目に

『十一だ。』といふ樣子　漸と五歳位の兒の、やう〳〵數を覺えたのと少しも變らないのです。そこで私も思はず『能く知つて居ますね』

『母上さんに敎つたのだ。』『學校へゆきますか。』『往かない。』『何故

往かないの？』

兒童は頭を傾げて向を見て居ますから考へて居るのだと私は思つて待つて居ました。すると突然兒童はワア〳〵と啞のやうな聲を出して駈出しました。『六さん六さん』と驚いて私が呼止めますと

『烏々』と叫びながら後も振りむかないで天主臺を駈下りて忽ち其姿を隱くしてしまひました。

【二】

私は其頃下宿屋住でしたが何分不自由で困りますから色々人に賴んで、遂に田口といふ人の二階二間を借り、衣食一切のことを任すことにしました。

田口といふは昔の家老職、城山の下に立派な屋敷を昔のまゝに構

へて有福に暮して居ましたので此二階を貸し私を世話して呉れたのは少からぬ好意で在たのです。

處で驚いたのは田口に移つた日の翌日、朝早く起きて散歩に出ようとすると城山で逢つた兒童が庭を掃いて居たことです。私は『六さん、お早う』と聲をかけましたが、兒童は私の顏を見てニヤリ笑つたまゝ草箒で落葉を掃き、言葉を出しませんでした。

日の經つ中に此怪しい兒童の身の上が次第に解かつて來ました、と言ふのは、畢竟私が氣をつけて見たり聞いたりしたからでしよう。

兒童は名を六藏と呼びまして田口の主人には甥に當り、生れついての白痴であつたのです。母親といふは四十五六、早く夫に分れまして實家に歸り、二人の兒を連れて兄の世話になつて居たのでありま

ます。六藏の姉はおしげと呼び其時十七歳、私の見る處ではこれも亦た白痴と言つてよいほど哀れな女でした。

田口の主人も初の程は白痴のことを隱して居るやうでしたが、何にをいふにも隱し得ることで無いのですから終に或夜のこと私の室に來て敎育の話の末に甥と姪の白痴であることを話しだし、如何にかしてこれに幾分の敎育を加へることは出來ないものかと私に相談をしました。

主人の語る處に依ると此哀れなきやうだいの父親といふは非常な大酒家で、其爲に生命をも縮め、家產をも蕩盡したのださうです。そして姉も弟も初の中は小學校に出して居たのが、二人とも何一つ學び得ずいくら敎師が骨を折つても無益で、到底他の生徒と同時に敎へることは出來ず、徒らに他の腕白生徒の嘲弄の道具になるばか

りですから、却て氣の毒に思つて退學をさしたのださうです。

成程詳しく聞いて見ると姉も弟も全くの白痴であるとが、愈々明白になりました。

然に主人の口からは言ひませんが、主人の妹、卽ちきやうだいの母親といふも普通から見ると餘程拔けて居る人で、二人の子供の白痴の源因は父の大酒にもよるでしようが、母の遺傳にも因ることは私は直ぐ看破しました。

白痴教育といふが有ることは私も知つて居ますが、これには特別の知識の必要であることですから私も田口の主人の相談には浮かと乘りませんでした。たゞ其容易でないことを話したゞけで止しました。

けれども其後だん〳〵おしげと六藏の樣子を見ると、如何にも氣

の毒でたまりません。不具の中にもこれほど哀れなものはないと思ひました。啞、聾、盲などは不幸には相違ありません。言ふ能はざるもの、聞く能はざる者、見る能はざる者も、尙ほ思ふことは出來ます。思ふて感ずることは出來ます。白痴となると、心の啞、聾、盲ですから殆ど禽獸に類して居るのです。兎も角、人の形をして居るのですから全く感じがない譯ではないが普通の人と比べては十の一にも及びません。又た不完全ながらも心の調子が整ふて居ればまだしもですが、更に歪になつて出來て居るのですから、樣子が餘程變です、泣くも笑ふも喜ぶも悲も皆な普通の人から見ると調子が狂つて居るのだから猶ほ哀れです。

おしげは兎も角、六藏の方は兒童だけに無邪氣なところが有りますから、私は一倍哀れに感じ、人の力で出來ることならば如何にか

して少しでも其智能の働きを増してやりたいと思ふやうになりました。

すると田口の主人と話してから二週間も經つた後のこと、夜の十時ごろでした、最早床に就うかと思つて居る處へ、

『先生、お寢ですか』と言ひながら私の室に入つて來たのは六藏の母親です。背の低い、痩形の、頭の小い、凸の顏、何時も齒を染めて居る昔風の婦人、口を少し開けて人のよさゝうな、たわいのない笑を何時も其眼尻と口元に現はして居るのが此人の癖でした。

『そろ〳〵寢やうかと思つて居る處です。』と私が言ふ中、婦人は火鉢の傍に坐つて『先生 私は少しお願が有るのですが。』と謂つて言ひ出しにくい樣子。『何ですか。』『六藏のことで御坐います。あのやうな馬鹿ですから將來のことも案じられて、其を思ふ私は自分の馬

鹿を棚に上げて、六藏のことが氣にかゝつてならないので御坐います。』

『御尤です。けれどもさうお案じなさるほどのことも有りますまい。』とツイ私も慰めの文句を言ふのは矢張人情でしやう。

〔三〕

私は其夜だん〳〵と母親の言ふ處を聞きましたが何よりも感じたのは親子の情といふことでした。前にも言つた通り此婦人とても餘程拔けて居ることは一見して解るほどですが、それが我子の白痴を心配することは普通の親と少しも變らないのです。

そして母親も亦た白痴に近いだけ、私は益々憐を催ほしました。思はず私は貰ひ泣きをした位でした。

其處で私は六藏の敎育に骨を折つて見る約束をして氣の毒な婦人を歸へし、其夜は遲くまで、いろ〳〵と工夫を凝らしました。さて其翌日からは散歩ごとに六藏を伴ふことにして、機に應じて幾分かづゝ智能の働きを加へることに致しました。

第一に感じたのは六藏に數の觀念が欠けて居ることです。一から十までの數が如何しても讀めません。幾度も繰返して敎へれば、二三と十まで口で讀み上げるだけのことは爲ますが、路傍の石塊を拾ふて三個並べて、幾個だときゝますと考がへてばかり居て返事を爲ないのです。無理にきくと初は例の怪しげな笑方をして居ますが後には泣きだしさうになるのです。

私も苦心に苦心を積み、根氣よく務めて居ました。或時は八幡宮の石段を數へて昇り、一、二、三と進んで七と止り、七だよと言ひ

聞して、さて今の石段は幾個だときゝますと、大きな聲で十と答へる始末です。松の並木を數へても、菓子を褒美に其數を敎へても、結果は同じことです。一、二、三といふ言葉と、其言葉が示す數の觀念とは、此兒童の頭に何の關係をも有つて居ないのです。

白痴に數の觀念に缺けて居ることは聞ては居ましたが、これほどまでとは思ひもよらず、私も或時は泣きたい程に思ひ、兒童の顏を見つめたまゝ涙が自然に落ちたこともありました。

然るに六藏はなか〳〵の腕白者で、惡戲を爲るときは隨分人を驚かすことがあるのです。山登りが上手で城山を駈廻るなどまるで平地を歩くやうに、道のあるところ無い處、サツサと飛ぶのです。ですから從來も田口の者が六藏は何處へ行つたかと心配して居ると晝飯を食つたまゝ出て日の暮方になつて城山の崖から田口の奥庭にひ

よつくり飛び下りて歸つて來るのださうです。木拾ひの娘が六藏の姿を見て逃げ出したのは必定これまで幾度となく此白痴の腕白者に嚇されたものと私も思ひ當つたのであります。

けれども又た六藏は直きに泣きます。母親が兄の手前を兼ねて折り〳〵痛く叱ることがあり、手の平で打つこともあります、其時は頭をかゝへ身を縮めて泣き叫びます。しかし直ぐと笑つて居る樣は打たれたことを全然忘れて終つたらしく、これを見て私は猶更此白痴の痛しいことを感じました。

かゝる有樣ですから六藏が歌など知つて居る筈も無さゝうですが知つて居ます。木拾ひの唄ふやうな俗歌を暗んじて、をり〳〵低い聲でやつて居ます。

或日私は一人で城山に登りました、六藏を伴れてと思ひましたが

姿が見えなかつたのです。

冬ながら九州は暖國ゆゑ天氣さへ佳ければ極く暖かで、空氣は澄んで居るし山のぼりには却て冬が可いのです。

落葉を踏んで頂に達し例の天主臺の下までゆくと、寂々として滿山聲なき中に、何者か優い聲で歌ふのが聞えます、見ると天主臺の石垣の角に六藏が馬乘に跨がつて、兩足をふら〳〵動かしながら、眼を遠く放つて俗歌を歌つて居るのでした。

空の色、日の光、古い城趾、そして少年、まるで畫です。少年は天使です。此時私の眼には六藏が白痴とは如何しても見えませんでした。白痴と天使、何といふ哀れな對照でしやう。しかし私は此時、白痴ながらも少年はやはり自然の兒であるかと、つく〴〵感じました。

今一ッ六藏の妙な癖をいひますと、此兒童は鳥が好で、鳥さへ見れば眼の色を變て騷ぐことです。けれども何を見ても鳥といひ、いくら名を敎へても憶えません。『もず』を見ても『ひよどり』を見ても烏といひます。可笑いのは或時白鷺を見て烏といッたことで、鷺を烏にいひ黑めるといふ俗諺が此兒だけには普通なのです。

高い木の頂邊で百舌鳥が鳴いて居るのを見ると六藏は口をあんぐり開けて熟と眺めて居ます。そして百舌鳥の飛立つてゆく後を茫然と見送る樣は、頗る妙で、この兒童には空を自由に飛ぶ鳥が餘程不思議らしく思はれました。

【四】

さて私もこの憐れな兒の爲めには隨分骨を折つて見ましたが眼に

見えるほどの効能は少しも有りませんでした。

彼是するうちに翌年の春になり、六藏の身の上に不慮の災難が起りました。三月の末で御座いました、或日朝から六藏の姿が見えません、晝過になつても歸りません、遂に日暮となつても歸つて來ませんから田口の家では非常に心配し、殊に母親は居ても起ても居られん樣子です。

其處で私は先づ城山を探すが可らうと、田口の僕を一人連れて、提灯の用意をして、心に怪い痛しい想を懷きながら平常の慣れた徑を登つて城趾に達しました。

俗に虫が知らすといふやうな心持で天主臺の下に來て

『六さん！六さん！』と呼びました。そして私と僕と、申し合はしたやうに耳を聳てました。場所が城趾であるだけ、又た索す人が普

通の兒童でないだけ、何とも知れない物すごさを感じました。

天主臺の上に出て、石垣の端から下をのぞいて行く中に北の最も高い角の眞下に六藏の死骸が墜ちて居るのを發見しました。

怪談でも話すやうですが實際私は六藏の歸りの餘り遲いと知つてからは、どうも此高い石垣の上から六藏の墜落して死だやうに感じたのであります。

餘り空想だと笑はれるかも知れませんが、白狀しますと、六藏は鳥のやうに空を翔け廻る積りで石垣の角から身を躍らしたものと、私には思はれるのです。木の枝に來て、六藏の眼のまへまで枝から枝へと自在に飛で見せたら、六藏は必定、自分も其枝に飛びつかうとしたに相違ありません。

死骸を葬つた翌々日、私は獨り天主臺に登りました。そして六藏

のことを思ふと、いろ〳〵と人生不思議の思に堪えなかつたのです。人類と他の動物との相違。人類と自然との關係。生命と死などいふ、問題が年若い私の心に深い〳〵哀を起しました。

英國の有名な詩人の詩に『童なりけり』といふがあります。それは一人の兒童が夕毎に淋しい湖水の畔に立て、兩手の指を組み合はして、梟の啼くまねをすると、湖水の向の山の梟がこれに返事をするこれを其童は樂にして居ましたが遂に死にまして、靜かな墓に葬られ、其靈は自然の懷に返つたといふ意を詠じたものであります。

私はこの詩が嗜きで常に讀んで居ましたが、六藏の死を見て、其生涯を思ふて、其白痴を思ふ時は、この詩よりも六藏のことは更に意味あるやうに私は感じました。

石垣の上に立つて見て居ると、春の鳥は自在に飛んで居ます。其

一は六藏ではありますまいか。よし六藏でないにせよ。六藏は其鳥とどれだけ異つて居ましたらう。

* * * * *

憐れな母親は其兒の死を却て、兒のために幸福だといひながらも泣て居ました。

或日のことでした、私は六藏の新しい墓にお詣りする積りで城山の北にある墓地にゆきますと、母親が先に來て居て頻りと墓の周圍をぐる〳〵廻りながら、何か獨言を言つて居る樣子です。私の近くのを少も知らないと見えて

『何だつてお前は鳥の眞似なんぞ爲た、え、何だつて石垣から飛んだの？……だつて先生がさう言つたよ、六さんは空を飛ぶ積りで天主臺の上から飛んだのだつて。いくら白痴でも鳥の眞似をする人が

ありますかね、』と言つて少し考へて『けれどもね、お前は死んだはうが可いよ。死んだはうが幸福だよ……』

私に氣がつくや、

『ね、先生。六は死んだはうが幸福で御座いますよ、』と言つて涙をハラ〳〵とこぼしました。

『さういふ事も有りませんが、何しろ不慮の災難だからあきらめるより致方がありませんよ。……』

『けれど何故烏の眞似なんぞ爲たので御座いましよう。』

『それは私の想像ですよ。六さんが必定鳥の眞似を爲て死んだのだか解るものじやありません。』

『だつて先生はさう言つたぢや有りませぬか。』と母親は眼をするるて私の顏を見つめました。

『六さんは大變鳥が嗜であつたから、さうかも知れないと私が思つただけですよ。』

『ハイ、六は鳥が嗜好でしたよ。鳥を見ると自分の兩手を斯う廣げて、斯して』と母親は鳥の搏翼の眞似をして『斯して其處らを飛び歩きましたよ。ハイ、さうして鳥の啼眞似が上手でした』と眼の色を變て話す樣子を見て居て私は思はず眼をふさぎました。

城山の森から一羽の鳥が翼をゆるやかに、二聲三聲鳴きながら飛んで、濱の方へゆくや、白痴の親は急に話を止めて、茫然と我をも忘れて見送つて居ました。

この一羽の鳥を六藏の母親が何と見たでしょう。

（完）

小春

（一）

十一月某日、自分は朝から書齋に籠つて書見をして居た。其書はヲーズヲルス詩集である、此詩集一冊は自分に取りて容易ならぬ關係があるのだ。これを手に入れたは既に八年前のこと、忘れもせぬ九月二十一日の夜であつた。あゝ八年の歳月！憶へば夢のやうである。

殊に此一二年は此詩集すら、僅に二三十卷しかない我藏書中にあつても甚しく冷遇せられ、架上最も塵深き一隅に放擲せられて居た。否、一月に二度位は引出されて瞥見された事も有つたらう、併し要

するに瞥見たるに過ぎない、曾て自分の眼光を射て心靈の底深く徹した一句一節は空しく赤い線青い棒で標點けられてあるばかり最早自分を動かす力は消果て居た。今更其理由を事々しく自問し自答するにも當るまい、こんな事は初めから解つて居る筈である、『マイケル』を讀でリウクの命運の爲に三行の涙を濺いだ自分は何時しか又リウクを誘ふた浮世の力に誘はれたのだ。

そして今も今、いと誇顏に「我は老熟せり」と自から許して居る。

ア、老熟！別に不思議はない、

"Man descends into the Vale of years."

『人は歳月の谷間へと下る』

といふ一句が『エキスカルション』第九編中に在つて自分は之に太く青い線を引いてるではないか。どうせ此が人の運命だらう、其證

據には自分の友人の中でも隨分自分と同じく、自然を愛し、自然を友として高き感情の中に住で居た者もあつたが、今では立派な實際家になつて、他人の噂をすれば必ず『彼奴は常識が乏しい』とか、『彼は事務家だ豪い處がある』など評し、以前の話が出ると赤い顏をして、『彼時はお互に未だ若かつた』と頭を掻くではないか。

自分がヲーズヲルスを見捨てたのではない、ヲーズヲルスが自分を見捨てたのだ。たまさか引出して見た處で何が解らう。ヲーズヲルスも斯ういふ事務家や老熟先生に解るやうには歌はなかつたに違いない。

處で自分免許の此老熟先生も實は流石に全然老熟し得ないと見えて、實際界の事が甘く行かず、此頃は家にばかり引籠つて居て多く世間と交はらない。其結果でもあらうかヲーズヲルス詩集までが一週

間に一二度位は机の上に置かれるやうになつた。

さて十一月某日、自分は朝から書齋に籠つて書見をして居た、と更て書き出す。

（二）

昨日も今日も秋の日は佳く晴れて、實に小春の天氣、仕事をするにも、散策を試みるにも、又た書を讀むにも申分ない氣候である。ヲーズヲルスの所謂

『一年の熱去り、氣は水の如くに澄み、天は鏡の如くに磨かれ、光と蔭と愈〻明かにして、愈映照せらるゝ時』

である、氣が晴々する、うちにも何處か引緊る處があつて心が浮つかない。斷行するにも沈思するにも精一ぱい出來る。感情も意志も

智力も其能を盡すべき時である。冬はいぢけ春はだらけ夏は痩せる人でも、此季節ばかりは健康と精力とを自覺するだらう。其で季節が季節だけに自分のヲーズヲルス詩集に對する心持がやゝ變つて來た、少しはしんみりと詩の旨を味ふことが出來るやうである。自分は南向の窓の下で玻璃越の日光を避けながら、ソンネットの二三編も讀んだか。そして "Line Composed a few miles abovo Tintern Abbey" の雄編に移つた。此詩の意味は大略左の如くである。

五年は經過せり。而て我今再び此河畔に立て其泉流の咽ぶを聽き、其危巖の聳ゆるを仰ぎ、其蒼天の地に垂れて靜かなるを觀るなり。日は來りぬ、我れ再び此暗く繫れる無花果の樹蔭に座して、彼の田園を望み、彼の果實園を望むの日は再び來りぬ。我れ今再び彼の列樹を見るなり。我れ今再び彼の牧場を見る也。

緑草直ちに門戸に接するを見、樹林の間よりは青煙閑かに卷て空に上ぼるを見る、樵夫の住む所、將た隱者の獨座して爐に對する處か。

此等の美なる風光は我に取りて、過去五年の間、彼盲者に於ける景色の如きものにては非ざりき。一室に孤座する時、都府の熱鬧塲裡に在るの日、我此風光に負ふ處ありたり、心屈し體倦むの時に當りて、我血我心は此等を懷ふ毎に如何に甘き美感を享けて躍りたるぞ、更に負ふ處の大なる者は、我れ此不可思議なる天地の秘義に惱まさるゝに當り、是等の風光を憶ふことに依りて、其壓力を支へ得たること也。若し夫れ之れを憶ふて愈感じ、瞑想靜思の極に到れば我實に一呼吸の機微に萬有の生命と觸着するを感じたりき。

若し此事、單に我が空漠たる信念なりとするも、我心此世の苦惱に悶き暗憺たる日夜を送る時に當りて、我如何に屢々汝に振り向きたるよ、嗚呼ワイの流！林間の逍遙子よ、如何に屢々我心汝に振向きたるよ！

而て我今、再び此處に立つ。我心は獨に今の此樂さを感ずるのみならず、實に又た來るべき歳月に於ける我生命と我食物とは今の此時の感得中にあるべきなり、敢て望むは其感得の兒童の際の如からむことなり。

彼時は山羊の如く然り、山野泉流たゞ自然の導くまゝに逍遙したり。彼時は飛瀑の音、我を動かすこと我情の如く、巖や山や幽邃なる森林や、其色彩形容皆な彼時に於て我を刺激すること食慾の如きものありたり。乃ち彼時は唯だ愛、唯だ感ありしのみ、他

思考するところの者を藉り來りて感興を助くるに及ばざりし也。

されど彼時は既に業に過ぎ逝きたり。

而も我は此經過を悠かず哀まざるなり。我は此損失を償ひて餘ある者を得たり。乃ち我は思想なき兒童の時と異り。今は自然を觀ることを學びたり。今や人情の幽音悲調に耳を傾けたり。今や落日、大洋、清風、蒼天、人心を一貫して流動するところのものを感得したり。

かるが故に我は今尚ほ牧場、森林、山岳を愛す、綠地の上、窮天の間、耳目の觸るゝ所の者を愛す、是等は皆な我が最純なる思想の錨、我心我靈及び我德性の乳母、導者、衛士たり。

嗚呼我が最愛の友よ（妹ドラ孃を指す）、汝今我と共に此清泉の岸に立つ、我は汝の聲音中に我が昔日の心語を聞き、汝の驚喜して閃

く所の眼光裡に我が昔日の快心を讀むなり。嗚呼！我をして少時なりとも汝に於て我昔日を觀取せしめよ、我が最愛の妹よ！

抑も亦斯く祈る所以の者は、自然は決して彼を愛せし者に背かざりしを我れ知れば也。我等の生涯を通じて歡喜より歡喜へと導くは彼の特權なるを知れば也。彼より享くる所の靜と、美と、高の感化は、世の毒舌、妄斷、嘲罵、輕薄をして吾等を犯かさしめず、我等の樂き信仰を擾る勿からしむるを知ればなり。

かるが故に、月光をして汝（妹）の逍遙を照らしめよ、霧深き山谷の風をして恣まゝに汝を吹かしめよ。汝今日の狂喜は他日汝の裏に熟して莊重深沈なる歡と化し汝の心は當に熱しき千象の宮、靜なる萬籟の殿たる可し。

嗚呼果して然らんか、或は孤獨、或は畏懼、或は苦痛、或は悲哀

にして汝を惱まさん時、汝は正に我此言を憶ふべし。

他日若し、我又た汝を見る能はざるの地にあらむか、汝當に我と共に此清泉の岸に立ちしことを忘る勿れ。

先づザット斯ういふ意味である。自分は繰返して讀むだ。そして如何いふ句に最も強くアンダーラインしてあるかと見れば、最初の『五年は經過せり』の一句及び『我心は獨に今の此樂さを感ずるのみならず、實に又た來るべき歳月に於ける我生命と我食物とは今の此時の感得中にあるべきなり』の句を始めとして『自然は決して彼を愛せし者に背かざりし』の句の如き、そして

"Therefore let the moon
Shine on thee in thy solitary walk;
And let the misty mountain winds

be free to blow against thee."

の句に至ては二重にも線が引いてある。何の爲めに引いたか、抑も亦た此濃い青い線を此等の句の下に引いたのは、何時であるか。

『七年は經過せり』と自分は思はず獨語した。さうだ。さうだ！七年は夢の如くに過ぎた。

（三）

自分が最も熱心にヲーズヲルスを讀んだのは豊後の佐伯に居た時分である。自分は田舍教師として此所に一年間滯在して居た。

自分は今ワイ河畔の詩を讀んで、端なく思ひ起すは實に此一年間の生活及び佐伯の風光である。彼地に於て自分は教師といふよりも寧ろ生徒であつた、ヲーズヲルスの詩想に導かれて自然を學ぶ處の

生徒であつた。成程七年は經過した、然し自分の眼底には彼地の山岳、河流、溪谷、綠野、森林悉く鮮明に殘つて居て、我故郷の風物よりも幾倍の色彩を放つて居る。何故だらう？

『月光をして汝の逍遙を照らさしめ』、自分は夜となく朝となく山となく野となく殆ど一年の歳月を逍遙に暮らした。『山谷の風をして恋に汝を吹かしめよ』、自分は我が情と我が身とを投出して自然の懷に任かした。敢えて佐伯を以て湖畔詩人の湖國と同一とは曰はない、然し湖國の風土を叙して

此處には雨、心より降り、晴るゝ時、一段眩ゆき天氣を現し、鳴らざりし泉は鳴り、響かざりし瀧は響き、泉も瀧も、水溢るれども少しも濁らず、波も泡も澄み渡り青味を帶べり、

とヲーズヲルスが言ひしを眞とすれば我が佐伯も實に其通りである。

往々雨の丘より丘に移るに當りて、或は近く或は遠く、或は幽く或は明かに、

といふも亦た全く同じである。若し夫れ雲霧を說いて

或は默然遊動して谷より谷に移るもの、往々にして動かざる自然を動かし、變らざる景色を變へ、塊然たる物象を化して夢となし、幻となし、靈となし、怪となし、

といふに至ては水多く山多き佐伯亦た實にさうである、しかし强て我が佐伯をヲーズヲルスの湖國と對照する必要はない、ノートブックとを携て散步に出掛けたスコットをば嘲りしヲーズヲルスは、決して寫實的に自然を觀て其詩中に湖國の地誌と山川草木を說いたのではなく、たゞ自然其物の表象變化を觀て其眞隨の美感を詠じたので

あるから、若し此詩人の詩文を引いて對照すれば、我日本國中數へきれぬ程の同風光を見出すだらう。

たゞ一言する、『自分が眞にヲーズヲルスを讀んだは佐伯に居る時で、自分が尤も深く自然に動かされたのは佐伯に於てヲーズヲルスを讀んだ時である』といふことを。

爾來數年の間自分は孤獨、畏懼、苦腦、悲哀のかず〳〵を盡した、自分は決して幸福な人ではなかつた、自分の生活は決して平坦ではなかつた。『嗚呼ワイの流！林間の逍遙子よ、如何に數々我心汝に振り向きたるよ！』その通りであつた、我心は此等の壓力を加へらるゝ毎に數々藩匠川畔の風光を憶つた。

今や如何、今や如何。我此一二年の生活は殆ど佐伯を忘れしめ、而してたまさかに佐伯を憶へば彼時の生活は我ながら我の如くには

思はれなくなつた。

（四）

自分は詩集を其儘にして靜に佐伯のことを憶ひはじめた。流石に忘れ果てゝは居ない、彼時の事此時のこと、自分の繰返した逍遙の時を憶ふにつけて其時自分の眼に彫込まれた風光は鮮かに現はれて來る、畫を見るよりも鮮明に現はれて來る。秋の空澄み渡つて三里隔つる元越山の半腹から眞直に立上る一縷の靑煙すら、あり〳〵と眼に浮んで來る。其處で自分は當時の日記を出して、彼所此所と拾ひ讀みに讀んでは其時の風景を思浮べて居ると

『兄さんお宅ですか』と戸外から聲を掛けた者がある。

『お上り』と自分は呼で猶ほ日記を見て居た。

自分の書齋に入つて來たるは小山といふ青年で、恰度自分が佐伯に居た時分と同年輩の畫家である、といふより畫家たらんとて近頃熱心に勉强して居る自分と同郷の者である。彼は常に自分を兄さんと呼で居る。

『御勉强ですか。』

『否、さうぢやアない、今ヲーズヲルスを讀で佐伯のことを思ひ出したから日記を見て居た處だ。』

『如何です散歩にお出になりませんか、今日は寫生しやうと思つて道具を持つて來ました。』

『成程、將几が出來たね。』

『漸と買ひました、大枚一圓二十五錢を投じたのですがね、未だ一度しか使つて見ません。』

と疊んで棒の如くする樫の將几を開いて見せた。

『愈々本式になつたナ』と自分は將几と小山とを見比べて言つた。

『さうです、最早こゝまで行けば後へは退けません』と言放つたが何となく彼の顏色はすぐれなかつた、といふものは其筈だ、彼は故郷なる父母の意に反して其將來を決して居るからである。畫に對する彼の情は燃ゆるやうで、殆ど本氣の沙汰かと彼の友は疑ふほどである。これまで彼は父母の意に從つて高等學校に入る可き準備をして居た時でも、三角に對する冷淡は畫に對する熱心と常も兩極をなして居た。さらに泝ぼつて、彼の小學校に在る時すら彼は畫のみを好で居つたのを自分は知つて居る。此少年に向て父母は醫師たらんことを希望して居るのである。彼は父母の旨を奉じて進で來た。然るに幸か不幸か、彼の健康は如何にしても彼の嗜好に反する學術を忍

んで學ぶほどの彈力を有して居ない。彼は二年間に赤十字社に三度入院した。醫師に勸められて三度湯治に行つた。そして此間彼の精神の苦痛は身體の病苦と讓らなかつたのは則ち彼自身その不健康なるだけに愈々將來の目的を畫家たるに決せんと悶いたからである。

それで此頃は彼も煩悶の時を脱して決心の境に入り着々其方に向つて進んで來たが未だ故郷の父母には此決心を秘して居るのである。彼がやゝもすると不安の色を顏に示すは此故である。

『ナニ畫の爲めになら倒れて止むだけの覺悟は最早決めて居ますから平氣です、』と彼は言ひだして淋しく笑つた。

『君のことだから左だらう。』

『さうですとも、眞實にね兄さん、昨日も日が西に傾いて窓から射しこむと机の上に長い影を曳いて、それを茫然見て居ると何だか哀

れぽい物悲しい心持がして來ましたが、ふと畫の事を考へて、さうだ今だと直ぐ畫板を引掛けて飛び出ました。畫のためとなら小生は何時でも氣が勇み立ちます、』といつて彼は其蒼白い顏に得意の微笑を浮べた。

彼は畫板の袋から二三枚の寫生を取出して見せたが、其進歩は頗る現はれて、最早や素人の域を脱して居るやうである。

『どうです散歩に出ましよう、今日は何だか霞がゝつて全然春のやうですよ。』と小山は自分を促がした。

『さう、最早直き晝だから飯を食つてからにしよう』と自分は小山を止めて、それよりヲーズヲルスの詩に就て自分の觀る處を語つた。

『恰度君の年だつた僕がヲーズヲルスに全心を打こんだのは、其熱

心の度は決して君の今畫に對する熱心に讓らなかつた。君が畫板を持て郊外をうろつき廻はつて居るやうに、僕は此詩集を懷ろにし佐伯の山野を歩るき散かしたが、僕は今もその時の事を思ひだすと何だか懷かしくつて涙がこぼれるやうな氣がするよ』と自分は可い相手を見つけたので、先刻から獨りで憶ひ浮べて居た佐伯の自然に就て、圖まで引いて話しだした。

同じ自然の崇拜者である。彼は畫に由て、自分は詩に導かれて。自分の語る處は彼に能く了解る。彼の問ふ處は自分の言はんと欲する處。

『先づ其な案排でたゞもう夢中であつた。併し君と異うのは、君は觀ると直ぐ畫きたくなる僕はたゞ感ずるばかりだ。それで君は時とすると自然の美の餘りに複雜して現はれて居るのに壓倒せられて了

う、僕には其んなことはない、君は自然を捉へようと試みる、僕は觀て感じ得るだけを感ずる、だいぶ僕の方が樂だ。時によると僕も日記中に君の見取圖くらいな處を書きとめたこともあるが、それは眞の粗雜とした者だ。』

『そのスケッチが見たう御座いますね、』と小山の求めるまゝに十一月三日の記から讀みだした。『野を散歩す日暖かにして小春の季節なり。櫨紅葉は半ば散りて半ば枝に殘りたる、風吹くごとに閃めき飛ぶ。海近き河口に至る。潮退て洲あらはれ鳥の群、飛び廻る。水門を下ろす童子あり。離村に舟を渡さんと舷に腰かけて潮の來るを待つらん若者あり。背低き櫨堤の上に樹ちて濱風に吹かれ、紅の葉毎に光を放つ。野末杏に百舌鳥のあはたゞしく鳴くが聞ゆ。純白の裏羽を日にかゞやかし鋭く羽風を切つて飛ぶは魚鷹なり。其昔に小さ

き島なりし今は丘となりて、其麓には林を周らし、山鳩の栖處に恰好しきがあり。其片蔭に家數二十には足らぬ小村あり、濱風の衝に當りて野を控ゆ。』

その次ぎが十一月二十二日の夜

『月の光、夕の香をこめて僅に照りそめし頃河岸に出づ。村々浦々の人、既に舟と共に散じて晝間の喧しきに似ず最と寂びたり。白馬一匹繫ぎあり、忽ち馬子來り、牽て石級を降り渡船に乘らんとす。馬懼れて乘らず。二三の人、船と岸とに在つて默して之を見る。馬漸く船に乘りて船、河の中流に出づれば、灘山の端を離れて冴えく〳〵と照る月の光、鮮かに映りて馬白く人黑く舟危し。何心なく眺めて在りし吾は幾百年の昔を眼前に見る心地して一種の哀情を惹きぬ。船廻りし時我等亦た乘りて渡る。中流より石級の方を望めば理髮所

の燈火赤く四圍の闇を隈どり、そが前を少女の群ゆきつ返りつして守唄の節合するが聞ゆ。』

その次ぎが十一月二十六日の記、

『午後土河内村を訪ふ。堅田隧道の前を左に小徑をきり坂を越ゆれば一軒の農家、山の麓に在り一個の男、一個の妻、二個の少女麥の肥料を丸め居たり。少年あり、藁を積み重ねし間より頭を出して四人の者が餘念なく仕事するを餘念なく眺め居たり。渡頭を渡りて廣き野に出づ。野は麥撒に忙がしく女子皆な男子と共に働き居たり。山の麓に見ゆるは土河内村なり、谷迫りて一寰區を爲し特さらに世と離れて立つかの如く見ゆ、嘗て山の頂より遠く此村を望み炊煙の立のぼるを見て此村懷かしく我は感じぬ。村に近づくにつれて農夫等多く野に在るを見たり。靜けき村なるかな。少兒の群の嬉戯せる

に遇ひぬ。馬高く嘶くを聞きぬ。されど一村寂然たり。我は古き物語の村に入るが如き心地せり。若者一個庭前にて何事をか爲しつゝあるを見る。礫多き路に沿ひたる井戸の傍に少女あり。水枯れし小川の岸に幾株の老梅並び樹てり、柿の實、星の如く此梅樹の際より現はる。紅葉火の如く燃えて一叢の竹林を照らす。益々奥深く分け入れば村窮まりて唯だ溪流の水清く樹林の蔭より走出づるあるのみ。歸路夕陽野にみつ』

自分は以上の外尙ほ二三編を讀んだ。そして之を聽く小山よりも之を讀む自分の方が當時を回想する情に堪えなかつた。

時は忽然として過ぎた、七年は夢の如くに經過した。そして半熟先生此處に茫然として半ば夢から醒めたやうな寢耄眼を瞬いて居る。

(五)

午後二人は家を出た。小山は畫板を肩から腋へ掛け疊凳几を片手に、藥壜へ水を入れて手巾で包んだのを片手に。自分はヲーズヲルス詩集を懷ろにして。

大空は春のやうに霞すんで居た。普魯西ブリユーでは無論なしコバルトでも濃い過ぎるし、こんな空色は書き難くいと小山は唸きながら行つた。

野に出て見ると、秋は矢張り秋だ。楢林は薄く黃ばみ、農家の周圍に立つ高い欅は半ば落葉して其細い網のやうな枝を空にすかして居る。丘の裾をめぐる萱の穗は白銀の如くひかり、其間から武藏野には餘り多くない櫨の野生が其眞紅の葉を點出して居る。

『こんな錯雜した色は困るだらうねエ』と自分は小さな坂を上りながら頭上の林を仰で言つた。

『さうですね、併し却て此樣な色の方が胡魔化されて描きよいかも知れません、』と小山は笑ひながら答へた。

『下手な畫工が描きさうな景色といふ奴に僕は時々出遇ふが、其實、實際の景色はなか〳〵佳いんだけれども。』

『だから下手が飛付いて描くのですよ、自分の力も知らないで、たゞ景色の佳いに釣られて行るのですから出來上つて見ると、無全で景色の外面を塗抹つた者に成るのです。』

『自然こそ可い迷惑だ、』と自分は笑つた。高臺に出ると四邊が俄に開けて林の上を隱見に國境の連山が微かに見える。

『山！』と自分は思はず叫けむだ。

『何處に、何處に、』と小山は慌たゞしく問ふた。自分の指す方へ、近眼鏡を向けて眼を眩しさうに眺めて居たが、

『成程山だ如何です此瞑かな色は！』と左も懷かしさうに叫けむだ。

此時自分の端なく想出したのは佐伯に居る時分、元越山の絶頂から遠く天外を望んだ時の光景である。山の上に山が重り、秋の日の水の如く澄むだ空氣に映じて紫色に染り、其天末に絲を引くが如き連峰の夢よりも淡きを見て自分は一種の哀情を催し、此等相重なる山々の谷間に住む生民を懷はざるを得なかつた。

自分は小山に此際の自分の感情を語りながら行くと、一條の流、薄暗い林の奥から音もなく走り出で又た林の奥に沒する畔に來た。一個の橋がある。見るかげもなく破れて、殆ど墜ちさうにして居る。

『下手な畫工が描きさうな橋だねエ』と自分は林の蔭から之を望ん

で言つた。

『私が一つ描いて見ましようか。』

『止し給へな、有りふれてるから。』

『しかし斯な物でも描かなければ小生の描く物がありません。』

其處で小山は程可き位置を取つて、將几を置き自分には頓着なく、熱心に描き始めた。自分は日當を避けて楢林の中へと入り、下草を敷て腰を下ろし、我が年少畫家の後姿を木立の際から眺めながら、煙草に火を點けた。

小山は默つて描く、自分は默つて煙草をふかす、四圍は寂然として人聲を聞かない。自分は懷から詩集を取出して讀みだした。頭の上を風の吹き過ぎる毎に、楢の枯葉の磨れ合ふ音ががさ〳〵とするばかり。元來この楢は餘り風流な木でない。其枝は粗、其葉は大、

秋が來てもほんのりとは染らないで、青い葉は青、枯葉は枯葉と、亂雜に枝にしがみ着いて、風吹くとも霜降るとも、容易には落ちない。冬の夜嵐吹きすさぶ頃となつても、がさ〳〵と騷々しい音で幽遠の趣を搔き擾して居る。

併し自分は此音が嗜きなので、林の奥に坐して、ちよこなんとして居ると、此音が此處でも彼方でもする、恰度何かゞ呟くやうである、そして自然の幽寂がひとしほ心に沁みわたる！

自分は何時か小山を忘れ、讀む書にも餘り身が入らず、唯だ林の靜けさに身をまかして居ると、何だか三四年前まで、自分の胸に響いた我心の調に再び觸れたやうな必持がする。

『兄さん！』と小山は突然呼んだ、『兄さん、人の一生を四季に喩へるやうですが、春を小生のやうな時として、小春は人の幾歳位に喩

へて可いでしよう』と何を感じたか、彼方へ向いたまゝ言つた。

『秋かね？』

『秋と言はないで、小春ですよ！』

『僕のやうなのが小春だらう！』と自分は何心なく答へて、そして我知らず、未だ曾て經驗した事のない哀情が胸を衝て起つた。

『君が春なら僕は小春サ、小春サ、いまに冬が來るだらうよ！』

『ハヽヽヽ冬が過ぎればまた春になりますからねエ』と小山はさも輕々と答へた。

四圍は再び寂然となつた。小山は口笛を吹きながら描いて居る。自分は思つた、寧ろ此二人が意味ある畫題ではないかと。

（明治三十三年十一月作）

遺言

今度の戰で想出した、多分大沽沖に在る我軍艦内にも同じやうな事が有るだらうと思ふからお話すると、横須賀なる或海軍中佐の語るには、

我艦隊が明治二十七年の天長節を祝したのは、あたかも陸兵の華園口上陸を保護する爲め、ベカ島の蔭に集合して居た時である、其日の事で有つた。自分は士官室で艦長始め他の士官諸氏と陛下萬歳の祝盃を擧げた後、滯士官室に廻り、此處では我艦長が未で船に乘らない以前から海軍々役に服して居ますといふ自慢話を聞かされて、其からホールへ廻はつた。

戰時は艦内の生活萬事が平常よりか寛かにして有るが、此日は特に

大目に見て有つたからホールの騒は一通りでない。例の椀大の鐵葉製の盃、と言ふよりか常は汁椀に使用されて居る奴で、グイ〳〵あふりながら、或者は月琴を取出して俗歌の曲を唄ひ且つ彈き、或者は四竹で亞米利加マーチの調子に浮かれ、或者は悲壯な聲を張上げてロングサインを歌て居る、中には呂れつの廻らぬ舌で管を卷て居る者も有る、夫れ〳〵五人十人と其處此處に割據して勝手に大氣焔を吐て居た。

自分の入て來のを見て、いきなり一人の水兵が水雷長萬歳と叫ぶと、此處等に居た者一齊に立て自分を取卷き、夫の大盃を指つけた。自分は其一二を受けながら、支那の水兵は今時分定めて旅順や威海衛で大凹に凹で居るだらう、一つ彼奴等の萬歳を祝してやらうではないかと言ふと其は面白いと、チャン萬歳チャン〳〵萬歳など思ひ

〳〵に叫ぶ、其意氣は彼等の眼中既に旅順口威海衛なしである。自分は猶ほ奥の方へと彼等の間を縫て往くと、船首水雷室の前に一小區劃がある、其處に七八名の水兵が、他の中間と離れて一團體をなし、飲で居た。

我水兵は如何に醉て居ても長官に對する敬禮は忘れない。彼等は自分を見るや一同起立して敬禮を行ふ、其態度の嚴肅なるは、未だ十二分に醉て居ないらしい。中央に擁へて居た一人の水兵、これは酒癖の餘り善くないながら仕事は能く行るので士官の受の宜い奴、それが今面白い事を始めた處ですと言ふ。何だと訊ねると、皆な顔を見合はせて笑ふ、中には眼で餘計な事を饒舌るなと止る者もある。其に關はず其水兵の言ふには、此仲間で近頃本國から來た手紙を讀み合ふと言ふのです。自分。其奴は聞きものだ是非傍聽したいものだ

と言て坐を構へた。見れば皆な二通三通づゝの書狀を携へて居る。」

其仕組が面白い、甲の手紙は乙が讀むといふ事になつて居て、其中尤も甚だしい者に罰盃を命ずるといふ約束である。『尤も甚だしい』といふ意味は無論彼等の情事に關かることは言はないでも明白で有る。

さア初めろと自分の急き立つるので、そろ〳〵讀み上げる事になつた。自分が傍で聽くとは思ひがけない事ゆゑ、大に恐縮して居る者もある。其も其筈で、讀む手紙も讀む手紙も悉く長崎より横須賀より、又は品川よりなど、初から其等のばかり撰で持合つたのだから、一として彼等の情事に關しない者はない、悉く罰盃を命ずべき品物である。彼是れする中、自分の向に居た二等水兵が、内ポケットから手紙の束を引出さうとして、其一通を卓の下に落したが、渠は其

を急に拾つてポケットに押込んで殘を隣の水兵に渡した。他の者は之に氣が付なかつたらしい、愈々讀上が濟むと彼酒癖の悪い水兵が、オイ水野、貴樣は一つ隱したぞと言て、サア出せと叫けむだ。此奴怪しからんと他の水兵皆な起上つて、サア出せ厭なら十盃飲めと迫る。自分は笑ながら之を見て居た。

水野は、これ丈は御免だと眞面目で言ふ、愈々他の者は此奴面白いと迫る、例の酒癖が遂に、本性を現はして螺のやうな奴を突つけながら、罰盃の代にこれだと叫んだ。强迫である。自分は餘りのことだと制止せんとする時、水野、其樣な輕石は畏くないが讀まないと變に思ふだらうから讀む、自分で讀むと、渠は激昂して突立つた。

「一筆示し上げ候大同口よりの御手紙たゞ今到着仕い母樣大へん御よろこび涙を流してくり返し〳〵御覽相成りい」

何だ不足言い！　と一人の水兵が笑ひだした。水野は闘はず、ズン〳〵讀む、其聲は震へて居た。

「就ては御自身で返事書き度き由被仰いまゝ御枕許へ筆墨の用意致いところ永々の御病氣ゆえ氣のみはあせり玉へ共お手が利きいはず情なき事よと御歎ありせめては代筆せよと被仰い間御言葉通りを一々に書取り申い

必ず〳〵未練のことあるべからずい

母が身も最早ながくは有るまじく今日明日を定め難き命にいへば今申すことをば今生の遺言とも心得て深く心にきざみ置かれ度いそなたが父は順逆の道を誤り玉ひて前原が一味に加はりいものから今だに我等さへ肩身の狹き心地致いこの度こそ其方は父にも兄にも更りて大君の御爲め國の爲め勇ましく戰ひ、命に代へて父の

罪を償ひ我祖先の名を高めいはんことを返へす〳〵も賴上い

せめて士官ならばとの今日の御手紙の文句は未練にいぞ大將とて兵卒とて大君の爲め國の爲めに捧げい命に二は無是いかゝる心得にては眞の忠義思ひもよらずい兄は其方が上を羨みせめて軍夫に加はりてもと明暮申居いこゝをくみいはば一兵士ながらも其方の幸はいかばかりならむ又た申すまでもなけれど上長の命令を堅く守り同列の方々とは親しく交はり艱難を互にたすけ合ひ心を一にして大君の御爲め御勵みの程偏に祈上い

以上は母が今はの際の遺言と心得いて必ず〳〵女々しき擧動あるべからずい

尙ほ細々のことは嫂かき添へ申すべくい

右認めいて後母樣の仰にて佛壇に燈さゝげいへば私が手に扶けられ

て母様は床の上に坐り玉ひ此遺言父の靈にも告げてはと讀み上げ玉ふ御聲悲しく一句讀みてはむせび玉ふ御有樣の痛ましさ……」

水野が堪へ〳〵し涙こゝに至りて玉の如く手紙の上に落ちたのを見て、聽く方でもじつと悚へて居たのが、恰も電氣に打たれたかのやうに、一齊に飛立たが感極つて誰も一語を發し得ない。一種言ふ可からざる凄まじさが此一區劃に充ちた。

水野君萬歲！　と眞先に叫けむだのが彼の酒癖水兵である。渠は狂氣の如く其大盃を振廻はした。此の時自分の口を衝て出た叫聲は、

天皇陛下萬歲！

初孫

この度は貞夫に結搏なる御品御贈り被下難有存ゐ、お約束の寫眞やう〳〵昨日出來上りゐ間二枚さし上げ申候、內一枚は上田の姉に御屆け被下度ゐ、御覽の如く益々肥太りて最早祖父樣のお手には荷が少々勝ち過ぎるやうに相成りゐ、されば此頃はたゞお膝の上に這上りてだゞをこね居ゐ、この分にては小生が小供の時きゝゐと同じ昔噺を貞坊が聞き候ことも遠かるまじと思はれゐ、これを思へば悲しいとも嬉しいとも申しやうなき感有之これ必ず悲喜兩方と存ゐ、父上は何を申すも七十才いかに强壯にましますとも百年の御壽命は望み難く、去年までは父上々々と申上げゐを貞夫出來ゐて後吾等夫妻が何時となく祖父樣とお呼び申すやう相成ゐ以來、父上御

身も急に祖父様らしく成られいて初孫あやしホク〳〵喜び玉ふを見ては寧ろ涙に御座い、併し涙は不吉不吉、御覽いへ我等一家のいかばかり樂しく暮しいかを、父上母上及び我等夫妻と貞夫の五人！春霞たなびく野邊と雖も我家ののどけさには及ぶまじくい

こゝに父上の祖父様らしく成られいに引換へて母上は益々元氣よろしく殊に近頃は『ワッペウさん』といふ仇名まで取られいて、折り〳〵『おしやべり』と衝突なされいこと之れ亦た貞夫よりの事と思へば可笑しくい、『おしやべり』と申せば皆様直ぐと小生の事に思召されいは〻大違にい、妻のことにい、彼の言葉少き女が貞夫出來いて以來急に口數多く相成り近來は益々烈しくい、そして其饒舌の對手が貞夫といふに至ては實に滑稽に御座い、先夜も次の間にて貞夫を相手に何か解らぬことを申し居い間小生、左様な事を言ふとも小供

には解らぬ少し默て居てお呉れと申しい處

『ソラ御覽、坊やが八釜しいことをお言ひだから父様の御用のお邪魔になるとサ』

『坊やがやかましいのでは無いお前が饒舌るのだよ』

『オヤ〳〵今度は母様が叱かれましたよ、ね坊や父様が、「やかましッ」て畏いことねえ、だから默てねんねおし』

『困るね、そんな事を言ても坊にや解らないのだからお前さへ默れば宜んだよ』

『貞坊や、坊やはお話が解らないとサ、「解りますッ」てお言ひ、坊や解りますよッて』

右の始末にい間小生も遂に『おしやべり』の仇名を與へて最早や彼の勝手に任し居い

お饒舌は兎も角も小供の爲に彼の仲のよい姑と嫁がどうして衝突を、と驚かれいはんかなれど決して御心配には及ばずい、これには奇々妙々の理由あるとにて、天保十四年生の母上の方が明治十二年生の妻よりも育兒の上に於て寧ろ開化主義たり急進黨なることこそ其原因にいなれ、妻は御存知の田舍者にて當今の女學校に入學せしことなければ、育兒學など申す學問致せしにもあらず、言はゞ昔風の家に育ちしたゞの女が初めて子を持ちしまでゆゑ、無論少兒を育てる上に不行屆のこと多きに引換へ、母上は例の何事も後へは退かぬ御氣性なるが上に孫可愛さの餘り平生は左まで信仰し玉はぬ今の醫師及び產婆の注意の一から十まで眞正直に受け玉うて、それは〳〵寢るから起きるから乳を飲ます時間から何やかと用意周到のほど驚くばかりにい、更に驚くべきは小生が妻の爲めにとて求め來り

し育兒に關する書籍などを妻は未だろく〳〵見もせぬ內に、母上は老眼に眼鏡かけながら暇さへあれば片端より讀まれいて成程々々と感心致されいことにい、右等の事情より自然未熟なる妻の不注意を甚だ氣にし玉ふといふ次第然に妻は又た『阿母それは「母の務」の何枚目に書いてありました』などと雜返しを申しいことなり、愈々母上は躍起と成り玉うて『お前はカラ舊癖だから困る』と答へられい、『世は逆樣になりかけた』と祖父樣大笑ひ致されいも無理ならぬ事に御座い

先日貞夫少々風邪の氣有し時、母上眼を丸くし

『小兒が六歲までの間に死ます數は實に夥しいものでワッペウ氏の表には平均百人の中十五人三分と記して御座ります』

と講義錄の口調そつくりで申されい間、小生も思はずふきだしい、

天保生れの女の口からワッペウなどいふ外國人の名前を一種變てこりんな發音にて聞かされいことゆゑ其可笑しさ又格別なりしかば、遂に『ワッペウさん』の尊號を母上に奉ることゝ相成りい、祖父樣の貞夫をあやし玉ふ時にも

『ワッピョー〳〵鳩ッぽッぽウ』

と調子を取られい位、母上も亦た敢て自からワッペウ氏を以て食に居られい、天保出來の女ワッペウと明治生の舊弊人との育兒的衝突と來ては實に珍無類の滑稽にて『一家常に笑聲多く、笑ふ門には福來るの諺で行けば、追々と百千萬兩何のその、岩崎三井にも少々融通してやるやう相成るべきかと內々樂みに致居い

併し今は辨當官吏の身の上、一のうば車さへ考へものといふ始末なれど、祖父樣には貞夫最早重く抱かれ兼いへば、乳母車に乘せて

其處等を押廻はし度きお望にい間近々大憤發を以て一つ新調を致す筈にい

一輛のうば車で小兒も喜び老人も亦た小兒の如く喜び玉ふかと思へば、福は既に我家の門內に巢喰ひ居い、此上過分の福はいらぬ事にい

今夜は雨降りて眞に靜なる晩にい、祖父樣と貞夫は既に夢もなげに眠り、母上と妻は次の室にて何事か小聲に語り合ひ、折り〳〵忍やかに笑ふ樣、小兒のゝの外別に心配もなささうにい

初戀

僕の十四の時であつた。僕の村に大澤先生といふ老人が住で居たと假定し給へ。イヤサ事實だが試みにさう假定せよといふことサ。

此老人の頑固さ加減は立派な漢學者でありながら唯一人相手にする者が無いので解る。地下の百姓を見ても直ぐと理屈でやり込める處から敬して遠けられ、狹い田の畔で此先生に出遇ふ者は先づ一丁前から避けて其のお通りを待て居るといふ次第、先生益々得意になり眼中人なく大手を振て村内を横行して居た。

其家は僕の家から三丁とは離れない山の麓に在て、四間ばかりの小さな建築ながら餘程風流に出來て居て庭には樹木多く、草花など

も種々植えて居たやうであつた。其頃四十ばかりになる下男と十二才になる孫娘と、たつた三人、他處目にはサも淋しさうに又陰氣らしう住で居たが、實際はさうで無かつたかも知れない。

然に或日のこと、僕は獨で散歩しながら計らず此老先生の宅の直ぐ上に當る岡へと出た。何心なく向を見ると大澤の頑固老人、僕の近づくのも知らないで、松の根に腰打ちかけて頻りと書見をして居た。其傍に孫娘がつくねんとして遠く海の方を眺めて居るやうである。僕の足音を聞て娘はふと此方へ向いたが、僕を見て莞爾笑つた。續いて先生も僕を見たが平時の通り可畏い顏をして見せて持て居た書を懷へ入れて了つた。

其頃僕は學校の餓鬼大將だけに頗る生意氣で、少年の癖に[illegible]生の威張るのが癪に觸つてならない。何時か一度は彼の頑固翁を凹

まして吳れうと猪古才なことを考へて居た。其處で、
『先生今讀で居られたのは何の本で御座います』と、斯う訊ねた。
『何でも可いわ、お前又それを聞いて何にする』と、力を込めた低い聲で壓しつけるやうに問ひ返した。
『僕は孟子が好きですから其でお訊ねしたので御座います』と、急所を突いた。此の老先生が兼て孟子を攻擊して四書の中でも之れだけは決して我家に入れないと高言して居ることを僕は知つて居たゆえ、意地惡く此處へ論難の口火をつけたのである。
『フーンお前は孟子が好きか。』『ハイ僕は非常に好きで御座います。』『誰に習らつた、誰がお前に孟子を敎へた。』『父が敎へて吳れました。』『さうかお前は馬鹿な親を持たのう。』『何故です、失敬ぢアありませんか他人の親を無闇に馬鹿なんて！』と僕は躍起になつ

た。
『默れ！生意氣な』と老人は底光りのする眼を怒らして一喝した。
さうすると默つて傍に見て居た孫娘が急に老人の袖を引いて『お祖父さん歸りましようお宅へ、ね歸りましよう』と優しく言つた。僕は其にも頓着なく『失敬だ、非常に失敬だ！』
と叫けむで我滿身の勇氣を示した。老人は忙がしく懷から孟子を引出した、孟子を！
『ソラ此處を讀で見ろ』と僕の眼前に突出したのが例の君、臣を視ること犬馬の如くんば則ち臣の君を見ること國人の如し云々の句である。僕は兼て斯くあるべしと期して居たから、すら〳〵と讀で『これが何です！』と叫けんだ。
『お前は日本人か。』『ハイ日本人で無ければ何です。』『夷狄だ畜生

だ、日本人なら能くきけ、君、君たらずと雖も臣以て臣たらざる可らずといふのが先王の敎だ、君、臣を使ふに禮を以てし臣、君に事ふるに忠を以てす、これが孔子の言葉だ、これこそ日の本の國體に適ふ敎だ、サアこれでも貴樣は孟子が好きか。』

僕は斯う問ひ詰められて一寸文句に困つたが直ぐと『そんなら何故先生は孟子を讀みます』と揚足を取つて見た。先生もこれには少し行詰つたので僕は疊かけて『要之孟子の言つた事は皆な惡いといふのではないでしよう、讀で益になることが澤山あるでしよう、僕は其益になる處だけが好きといふのです、先生だつて同じことでしよう、』と小賢しくも辯じつけた。

此時孫娘は再び老人の袖を引て歸宅を促した。老先生は靜に起立がりさま『お前そんな生意氣なことは言ふ者でない、益になる處と

ならぬ處が少年の頭で分ると思ふか、今夜宅へお出で、色々話して聞かすから』と言ひ捨てゝ孫娘と共に山を下りて了つた。

僕が高慢な老人を凹ましたのか、老人から自分の高慢を凹まされたのか分らなくなつたが、兎も角、少しは凹ましてやつた積で宅に歸り、この事を父に語つた。すると父から非常に叱られて、早速今夜謝罪りに行けと命ぜられ長者を辱めたといふので懇々說諭された。

其晩、僕は大澤先生の宅を初めて訪ねたが、別に謝罪るほどの事もなく、老先生は如何にも親切に色々な話をして聞かして、僕は何だか急に此老人が好になり、自分のお祖父さんのやうな氣がするやうになつた。

其後僕は毎日のやうに老先生の家を訪ねた。學校から歸へると直

ぐに先生の宅へ駈つける、老人と孫娘の愛子は何時も氣嫌よく僕を迎へて呉る。そして外から見るとは大違先生の家は陰氣どころか甚だ快活で、下男の太助は能く滑稽を言ふ面白い男、愛子は小學校にも行かぬ爲かして少も人ずれのしない、何とも言へぬ奥ゆかしさのある可愛い少女、老先生と來たら全で人の善いお祖父さんたるに過ぎない。僕は一箇月も大澤の家へ通ふうち、今までの生意氣な小賢かしい風が次第に失せて了つた。

前に話した松の根で老人が書を見て居る間に、僕と愛子は丘の頂の岩に腰をかけて夕日を見送つた事も幾度だらう。

これが僕の初戀、そして最後の戀さ。僕の大澤と名のる理由も從て了解たらう。

絲くづ

モーパッサン 作
獨歩吟客重譯

市が立つ日であつた。近在近郷の百姓は四方からゴーデルヴィルの町へと集まつて來た。一歩毎に體軀を前に傾けて男はのそ〳〵と歩む、其長い脚は兼ねての遲鈍な、骨の折れる百姓仕事のために拗れて形を爲して居ない。それは鋤に寄かゝる癖があるからで、それで又左の肩を別段に聳かして歩み、體格が總じて歪んで見える。膝のあたりを格別に擴げるのは、刈入れの時、體軀の坐はる身がまへの癖である。白い縫模樣のある襟飾を着けて、糊で固めた綠色のフワ〳〵した上衣で骨太い體軀を包んで居るから、恰度、空に漂ふ風船

へ頭と兩手兩足をつけた樣に見える。

此等の仲間の中には繩の一端へ牝牛又は犢をつけて牽てゆくものもある。牛の直ぐ後へ續て、妻が大きな手籠を提げて牛の尻を葉のついた儘の生の木枝で鞭打きながら往く、手籠の内から雛鷄の頭か、さなくば家鴨の頭がのぞいて居る。此等の女は皆な男よりも小股で早足に歩む、其凋れた眞直ぐな體軀を薄い小さなショオルで飾て其平たい胸の上でこれをピンで留めて居る。皆んな其頭を固く白い布で卷て髮を引緊めて、其上に帽子を置て居る。

がた〳〵馬車が、跳ね返る小馬に牽かれて駈けて往く。車臺の上では二人の男、可笑しな風に身體を搖られて居る。そして車の中の一人の女は緊と兩側を握て身體の搖るのを防で居る。

ゴーデルヴイルの市場は人畜入り亂れて大雜蹈を極めて居る。此群

集の海の表面に現はれ見えるのは牛の角と豪農の高帽と婦人の帽の飾りである。喚ぶ聲、叫ぶ聲、軋る聲、相應じて熱鬧を極めて居る。其中にも百姓の强壯な肺の臟から發する哄然たる笑聲がをり〳〵高く起るかと思ふとをり〳〵又た、兎ある家の垣根に固く繫である牝牛の長く呼る聲が別段に高く聞える。廐の臭や牛乳の臭や、枯草の臭、及び汗の臭が相和して、百姓に特有な半人半畜の臭氣を放て居る。

ブレオーテの人、アウシユコルンが恰度今ゴーデルヴイルに到着した。そして或辻まで來ると、渠は小さな絲屑が地上に落ちて居るのを見つけた。此アウシユコルンといふはノルマン地方の人にまがひなき經濟家で、何に由らず途に落ちて居るものは悉く拾て置けば必ず何かの用に立つといふ考を有て居た。そこで渠は俯むだ――尤も

兼ねて僂麻質斯に惱むで居るから、やつとの思ひで俯むだ。渠は絲の切つ端を拾ひ上げて、そして丁寧に卷かうとする時、馬具匠のマランダンが其門口に立て此方を見て居るのに氣が付た。此二人は曾て或跛人の事で喧嘩をしたことが有るので今日までも互に恨を含むで怒り合て居た。アウシユコルンは絲屑の樣な塵同樣なものを拾つた處を兼ねての敵に見付けられたから、內心頗る恥かしく思つた。そこで手早く上衣の下にこれを匿した。然る後、これを後の衣兜の中に入れた、然る後、何物をか探す樣な風をして地上を見廻はした。そして頭を前の方に垂れて市場の方へと往て了つた、僂麻質斯のために身體を丸で二重にして。

見るが中に渠は群集のうちに沒して了つた。群集は今しも賣買に上氣て大騒ぎをやつて居る。牝牛を買ひたく思ふ百姓は去て見たり來

て見たり、容易に決心する事が出來ないで、絕えず欺されは仕ないかと惑ひつ懼れつ、賣手の眼ばかり眺めては其奴のごまかしと家畜のいかさまとを見出さうとして居る。

農婦は其足もとに大きな手籠を置き家禽を地上に並べて居る。家禽は兩脚を縛ばられた儘、赤い鷄冠をかしげて眼をぎョろ〳〵さして居る。

彼等は感じの無ささうな顏の茫然した風で、買手の値ぶみを聞て、賣價を維持して居る。或は又、急に踏まれた安價にまけて、買手を呼び止める、買手はそろ〳〵逃げかけたので、

『宜ろしい、お待ちなれ

彼れ是れする內に辻は次第に人が散て、日中の鐘が鳴ると、遠くから來た者は皆な旅宿に入てしまつた。

シユールダンの大廣間は中食の人々で一ぱいである、それと同樣、廣い庭先は種々雜多の車が入り亂れて居る――大八車、がたくり馬車、その外名も知れぬ車の泥にまみれて黃色になつて居るのもある。

中食の卓と恰度反對の處に、大きな爐があつて、火が熾に燃えて居て、卓の右側に坐て居る人々の背を溫めて居る。雛鷄と家鴨と羊肉の團子とを串した炙串三本が頻りに返されて居て、閑かに燃ゆる火鉢からは、炙肉の甘さうな香、攣れた褐色の皮の上に迸ばしる肉汁の香が室內に漂ふて人々の口に水を涌かして居る。

そこで百姓の贅澤のありたけがシユールダンの店で喰はれて居る。此シユールダンといふは機敏な奴で一代の中に大分の金を餘した男であ。

皿の後に皿が出て、平らげられて、持ち去られて又た後の皿が來る、黃色な菜果酒の壺が出る。人々は互に今日の賣買の事、儲けの事などを話し合て居る。彼等は又た穀類の出來不出來の評判を尋ね合つて居る。氣候が靑物には申分無いが、小麥には少し濕つて居るとの事。

此時突然、店の庭先で太鼓が轟いた、頓と物にかまはぬ人の外は大方、跳り立て、戶口や窓の處に駈けて出た、口の中をもぐ〳〵さした儘、手に手巾を持た儘で。

役所の令丁が其太鼓を打て了つたと思ふと、キヨト〳〵聲で、のべつに讀みあげた――

『ゴーデルヴイルの住人、其他今日の市場に出たる皆の衆、どなたも承知あれ、今朝九時と十時の間にブーズヴイルの街道にて手帳を落

せし者あり、其内には金五百フランと商用の書類を入れ置かれたり。拾ひし者は速に返すべし――町役場に持參するとも、直にイモーヴイルのフォルチユヲ、ウールフレークに渡すとも勝手なり。御褒美として二十フランの事。』

人々は卓にかへつた。太皷の鈍い響と令丁のかすかな聲とが遠くでするのを人々は今一度聞た。

そこで人々は此事件に話を移して、フォルチユヲ、ウールフレークが再び其手帳を取返すことが出來るだらうか出來ないだらうかなど言ひ合つた。

そして食事が終つた。

人々が珈琲を飲み了つたと思ふと、憲兵の伍長が入口に現はれた。

渠は問た、

『此處にプレオーテのアウシユコルンが居るかね。』

卓の一端に坐て居たアウシユコルンは答た、

『私は此處に居るよ。』

そこで伍長は又、云つた、

『アウシユコルン、お前一寸と私と一所に役場に來て吳れまいか。メイル殿がお前と話したいことがあるさうで。』

アウシユコルンは驚惶の體で、コオンヤックの小さな杯をぐつと呑み干して立ちあがつた。長坐した後の第一歩は常ながら格別に難澁なので、今朝よりも一きは惡しざまに前にかゞみ、

『私は此處に居るよ、私は此處に居るよ。』

と繰返して言て、立ち去つた。

そして渠は伍長に從て行つた。

市長は安樂椅子にもたれて、彼を待て居た。此市長といふは土地の名家で身の丈高く辭令に富むだ威嚴のある人物であつた。

『アウシユコルン、』渠は言つた、『今朝、ブーズヴイルの途上でイモーヴイルのウールフレークの遺した手帳をお前が拾つたの見たものがある。』

アウシユコルンは何故そんな不審が自分の上にかゝつたものか少しもわからないので、もう早や懼れて、言葉もなく市長を見つめた。

『私がつて、私が其手帳は拾ろつたッて。』

『さうだ、お前がよ。』

『私は誓ひます、私はてんで其んなことは丸きり知らねエだ。』

『でもお前は見つかッたゾ。』

『人が私を見たッて、私を。其の私を見つけたチうのは全體誰のこ

ツてお座りますべエ。』

『馬具匠のマランダン。』

そこで老人確かに覺えがある、解つた、眞赤になつて怒つた。

『おやッ！彼奴が私を見たッて、あの惡黨が。彼奴は科が、そら此處に此絲を拾つたの見ただ、貴殿。』

衣兜の底を盲索つて、渠は裡から絲の切屑を引きだした。

しかし市長は疑はしさうに頭を振つた、

『信用のあるマランダンが手帳と此絲と見あやまるといふことは私には信じられぬよ、アウシユコルン。』

アウシユコルンは猛り狂つて、手を擧げて、睡をした、恰度自分の眞實を證明する積りらしく。そして繰返しいつた。

『全く眞實の事なんで貴殿、神樣も御照覽あれ。全く以て、全く以

て。嘘なら命でも首でも。私はどこまでも言ひ張ります。』

市長は尙ほも言ひだした、

『お前は其手帳を拾つた後で、まだ手帳から金がこぼれて落ちては居らぬかと其處らを暫らく見廻したらう。』

可愛さうに老人は、憤怒と恐怖とで呼吸をつまらした。

『そんな嘘が、そんな嘘が――正直ものを誣るやうな、そんな嘘が言へるものなら！』

渠は十分辯解した、渠は信ぜられなかつた。

渠はマランダンと立合はされた。マランダンは何處までも自分の證據を擧げて主張した。渠等は一時間ばかりの間、言ひ爭つた。アウシユコルンは自分で願て身躰の檢査を求めた。手帳らしきものも見出さられなかつた。

遂に市長は大に困て其筋に上申して指揮を仰ぐの外なしと告げて席を立つた。

此事件の噂は忽ち廣まつた。老人が役所を出づるや、人々は其周圍を取圍んで面白半分、嘲弄半分、眞面目半分で事の成行を尋ねた。しかし誰れも渠のために怒つて呉れるものはなかつた。そこで渠は絲の一條を語りはじめた。誰れも信ずるものが無い、皆んな笑つた。

渠は道すがら遇ふ毎に呼びとめられ、渠も亦た知る人に遇へば呼びとめて此一條を繰返し〳〵語りて自分を辯解し、其たび毎に衣兜の裏を返して見せて何にも以て居らぬことを證明した。

渠等は叫んだ、

『何だ古狸！』

そこで渠は誰れも渠を信ずるものが無いのに失望して益々怒り、憤

り、上氣がつて、そして此一條を絶えず人に語つた。

日が暮れかゝつた。歸路に就くべき時になつた。渠は近隣のもの二人と同伴して、道すがら絲屑を拾つた場所を示した。そして途中たゞ其不意の災難を語りつゞけた。

其晩はブレオーテの村を駈け廻はつて、人毎に一條を話したが、一人も渠を信ずるものに遇はなかつた。

其夜は終夜、渠は此一條に惱だ。

次の日、午後一時頃、マリウスボーメルといふ百姓がイモヴイルのウールフレークに其手帳と其内に有つた物とを返しに來た。此百姓はブルトンの作男でイモーヴイルの市場の番人である。

此男の語る處に由れば、渠は其れを途上で拾つたが、讀むことが出來ないのでこれを家に持ち歸り其主人に渡したものである。

此噂が忽ち近隣に廣ろまつた。アウシユコルンの耳にも達した。渠は直ちに家を飛びだして此一條の物語が甘く小説らしく局を結んだと語り歩いた。渠は凱歌をあげた。

『何さ、私が情ないこつたと思つたのはお前さんも知らつしやる通り、此一條の何のといふわけでない、たゞ嘘僞といふことであつたので。嘘ほど人を痛めるものはないのぢや。』

終日渠は自分の今度の災難一件を語つた。渠は途ゆく人を呼び止めて話した。居酒屋へ行つては酒を呑む人にまで話した。次の日曜日、人々が會堂から出かける所を見ては話した。渠は此一件を話すがために知らぬ人を呼び止めたほどであつた。今は渠も胸を撫でた。然るに未だ何故ともわかり兼ね乍ら何處かに渠を安からず思はしむるものがある。人々は渠の語るを聽て居ても頗る眞面目でない。彼等

は渠を信じたらしく見えない。渠は其背後で彼等がこそ〳〵話をして居るらしく感じた。

次の週の火曜日、ゴーデルヴイルの市場へと渠は勇み立て出かけた、彼一條を話したい計りに。

例のマランダンが其戸口を立つて居て渠の通るのを見るや笑ひだした。何故だらう。

渠はクリクトーの或百姓に話しかけると、話の半ばも聽かず、此百姓の胃の凹に酒が入て居た處で、渠に面と向て

『何だ大泥棒！』

そして踵をめぐらして去てしまつた。

アウシユコルンは無言で立ちどまつた。だん〳〵不安心になつて來た。なぜ『大泥棒』と彼を呼んだのだらう。

シユールダンの酒店の卓に坐して、渠は又もや事の一部始終を說きはじめた。

するとモンヂウイエーの馬商が渠に向つて怒鳴つた、

『止して呉れ、止して呉れ古狸、手前の絲の話なら乃公は皆んな知つて居る！』

アウシユコルンは吃つた、

『だつて手帳が出て來ただあ！』

相手は又た怒鳴つた、

『默れ、老毫、拾つた奴が一人居て、返した奴が別に一人居たのよ。それで世間の者は皆んな馬鹿のさ。』

老人は呼吸を止めた。渠は悉り知つた。人々は渠が黨類を作つて、組むで手帳を返したものと渠を詰るのであつた。

渠は辯解を試みたが、卓の人は皆んな笑つた。
渠は其食事をも終はることが出來なく、嘲笑一時に起りし間を立ち去つた。
渠は耻ぢて怒て呼吸も塞がらむ計りに痛憤して、氣も心も搔きむしられて家に歸つた。元來を言へば渠は狡猾なるノルマン地方の人であるから人々が渠を詰つた樣な計略或はもつと甘い手品の出來ないとも云へないので、渠の狡猾は兼ね〳〵人に知れ渡つて居る處から、自分の無罪を證明することは到底叶ふまじきやうに渠も思ひだした。そこで猜忌の惡德のために殆んど傷心して了つた。
そこで渠はあらためて災難一條を語りだした。日毎に其繰言を長くし、日毎に新たな證據を加へ、愈々熱心に辯解し益々嚴肅な誓を立てるやうになつた。誓の文句などは人の居ない時十分考へて用意し

て居るのである。今や渠の心は全く絲の話で充たされてしまつた。
渠の辯解が愈々完全になる丈け、渠の談論が愈々甘くなる丈け、益々渠は信じられなくなつた。
『皆んな嘘言家の證據さ』、人々は渠の背後で言ひ合つて居た。
渠はこれ感じて居る。渠の心はこのために裂かれた。渠は勞して効なく精根を盡して了つた。
渠の衰へ行く樣は明らかに見える。
今や諧謔の徒は周圍の人を喜ばすために渠をして『絲くづ』の物語を行つてもらう樣に成つた、恰度戰場に出た兵士に戰爭談を所望すると同じ格で。あはれ渠の心は根底より壞れ、次第に弱くなつて來た。
十二月の末、渠は遂に床に就た。

正月の初に渠は死んだ。そして最後の苦悩の譫語にも自分の無罪を辯解して、繰返した。

『絲の切れつ端――絲の切れつ端――御覽くだされ此處にあります、貴殿。』

（三十一年三月作）

第二

獨歩集（終）

第二獨歩集一

定價金八拾錢

著者　國木田獨歩
東京市京橋區楠町十五番地
株式會社大鐙閣
代表者　久世菊三

發行者　東京市京橋區南鍛冶町五番地　牧口駒三郎

印刷者　東京市京橋區南鍛冶町五番地　牧口印刷所

印刷所

大正十年五月一日二十八版印刷
大正十年五月二十日三十四版發行
大正十年六月二十日三十五版發行
大正十年七月十日三十六版印刷發行

不許複製

發行所　東京市京橋區楠町十五番地　株式會社大鐙閣
大阪市南區三休橋南詰
振替東京三三六一八　大阪二七一五五
電話京橋一一一三　南一八〇三

18833

◆獨歩叢書◆

看よ明治文壇の革命家を此の天才の著作を

第一編　獨歩集(一)
第二編　獨歩集(二)
第三編　武藏野
第四編　渚
第五編　濤聲
第六編　非凡人

定價各八十錢　郵稅六錢

天才は永久に若し、彼れ今死を超えて歩む

東京・京橋　大鐙閣刊　大阪・三休橋

なにはづにさくやこの花
冬ごもりいまを春べと
咲くやこの花

仁德天皇　英美子